

---

Fate/stay night-the last Fencer-

Vanargandr

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/stay night - the last Fencer -

### 【Nコード】

N2718Y

### 【作者名】

Vanargandr

### 【あらすじ】

時は第五次聖杯戦争                      その舞台となる冬木市に、一人の魔術師の少年がいた。

本来はありえない出演者としてイレギュラーな形で聖杯戦争に参加することになった少年は、果たしてどのような運命を辿るのか？

作品の方向性を定めるため、注意書きを追加しました。

注意！

この作品にはオリ主、オリ設定が登場します。  
そういったオリジナル要素が受け入れられない人には危険な作品です。

オリ主×原作キャラとなっており、ヒロインに原作キャラが当てはまります。

無理やりな設定はしないつもりですが、たとえどのキャラとオリ主がくつついても許容できる方のみお読みになられることをオススメします。

## Prologue ? (前書き)

読者の皆様方、初めまして。

この度Fateの二次創作を書くに至った者です。

以前とあるサイトにて投稿し始めながら、諸事情により更新途絶した作品をこちらにて再度投稿することにいたしました。

再投稿するに当たって、別サイトに投稿していた元の作品は削除しております。

本作の作品傾向としては大きな流れ自体は原作準拠ですが、オリ主の存在によって大なり小なりの事象変化が起こります。

それはキャラクター、ストーリーともに言えることで、原作とは所々違ったものになることと思います。

細部の設定変更や独自解釈など、意図的に設定を変えたりしている部分もありますので、その点についてはご了承ください。

展開や設定等のオリジナル部分について、原作設定との大きな乖離や無視できない矛盾がありましたら、是非ご指摘をお願い致します。

## Prologue ?

時刻は午前六時半。季節は冬の真っ只中。

誰も彼もがまだ家の中で、毛布に包まっている時間帯。

朝の喧噪さえ始まっていない時間に、俺は家を出る。

見た目そこまで立派とは言えない　むしろ大家には悪いがボロアパートの　二階の一室。

その開閉だけで軋みを上げる扉を、遠慮なしに開ける。

「ひゃゝ寒いッ。いくら冬だからつつつても、今日は一段と寒いな」

穂群原の学生服に身を包み、通学用鞆を右に抱えてアパートの階段を下りる。

この時間ではご近所様は、まだ朝餉の時間ですらないだろう。人の気配も疎らで朝食を作っている音もしなければ匂いもない。8割は眠っていて、1割は早朝出勤、残り1割がようやくお目覚めといったところ。

「毎日朝練に出向いてる時点で、俺って結構真面目だよな」

何故こんな早朝に起き出してまで学園へ向かうのか。

それは先の言葉通り、部活の早朝練習があるためだ。

自他共に認める無頼漢を地で行く奔放な性格だが、日課になってしまっているのだから仕方ない。

「さあて、今日は何人が出て来てくれるのやら」

一応俺は剣道部に所属し、現在の主将・副主将ですら歯が立たないほどの腕前である。

先輩である三年生の元主将ですら、試合で相對してはおおよそ負けることはない。

全国大会にでも出れば表彰台にも上れるのではないか、とも言われているが、自分にも事情があり大会参加だけは辞退していた。

正確に言うならば、早朝練習には出るが、放課後の部活動には週一程度でしか参加していない。

午後にはアルバイトをしており、それは学費や生活費の為に自分としては外せない用事である。

さすがに中学までは雇ってくれるところがないこともあって、曾祖父の財産を削って生活していた。

というより、曾祖父の財産を使えばアルバイトをする必要もないのだが、それは俺自身の考えから却下だ。

俺に遺してくれたモノを消費しながら生きると言うことは、親の脛を齧っているのと変わらない。

やむを得ないときもあるだろうが、日常生活で掛かる費用は最低限自分で面倒を見なくては、自立した生活をしているとは言えないだろう。

「くああ……………あー、眠い」

多少は無理をしてでも、収入が多くなるようにスケジュールを組

んでいる。

一般的な家庭に属する人間と比べれば、近年稀に見る苦学生であるだろう。

普段はチャライ人間に見せているので、そんな事実を知る者は身近には存在しないのだが。

「学校が近いのは利点だけど……あのアパートに備え付けのベッド、寝心地悪いったらないぜ。そろそろ自前での購入も検討しようか……」

軋む身体を捻り、軽いストレッチをしながら通学する。

まあ色々と無理をしても身体は丈夫な方なので、ほとんど怪我をしたことも病気になったこともない。

とまあそんな感じで、黒守黎慈は表向き普通の学生である。

「……………」

穂群原学園剣道場。

大きくはないが狭いわけでもなく、今の部員数なら程よく使える良い部室だ。

そしてその道場の真ん中で、仁王立ちしている俺の姿があった。

「今日は0人……新記録だな。昨日は来てたのに、今日はもう主将

すらも来なくなっただか」

本来は常に道場に顔を出し、部員を教え導かなければならない主将様までもが、今日に至っては影も形もない。

当然である。

特に社交的なわけでもなく、協調性もない自分は何故か毎朝やってくる。

後輩相手ではイジメ、同輩相手では足元に及ばず、先輩相手でも歯が立たない。

必然的に試合相手になるのは一番の実力者である主将となり、主将が潰れれば他の人間が叩かれていく。

結果一人残らず食い尽くされ、本人は涼しい顔でやられた側だけが疲労困憊。

そんなものが毎朝続いたのではたまったものではないし、学生生活にも影響が出てしまう。

部員たちが俺を避けて早朝練習をボイコットするのも仕方ないことではあった。

僅かな可能性として部員全員が家庭の事情により、早朝練習をやむなく休んだということも考えられる。

まあ、そんな可能性は皆無だろう。

「面白くねえなあ……………そうだな、弓道場の方に行ってみよう」

弓道部には、鋼鉄の女丈夫と名高き美綴綾子がいるはずだ。

俺と同じく毎日朝練に出向き、ちよくちよく顔を合わせること



ある。

少なくともここに来るはずもない剣道部員を待っているよりは、そちらに赴いた方がいくらか面白いだろう。

朝練に励む他の学生を見ながら歩き、弓道場前に着いた。着いたはいいのだが、今日は珍しく美綴は誰かと雑談しているようだ。

彼女の声が外にまで漏れ聞こえてくる。

「あはははは！ やったー、重さで三キロ上回ったー！」

突如、何か拳を叩き付けるような音が響き渡った。

下手をすれば、叩きつけられた物は深刻なダメージを負ったのではないだろうか。

「……って、体重で勝っても嬉しくないってのよこのタヌキ！」

何やら騒がしい。

それに彼女が素の態度で誰かと接しているのは珍しい。

余程仲のいい部員が居るのか、親友でも来ているのか。彼女らの憩いを邪魔するのも気が引けるが、こちらも暇な身だ。あわよくば、自分もその雑談に入れてはもらえまいか。

コンコンと、戸をノックする。

さすがに自らの所属でない部活動場所に入るに当たって、土足でズス力と上がり込むような真似は出来ない。

「お客みたいよ、綾子」

「そうらしいね。どなたー？」

返事を聞き、返事をする。

「どおもー。剣道部の黒守ですー」

何の気なしに、気さくに声をかけながら戸を開く。

こんなやり取りで弓道場に来ることも珍しくないため、返事をしながら素で扉を開けてしまった。

（いや待て。今、不吉な不吉な遠坂凜の声が聞こえなかったかね？）

自己に問いかける逡巡も今となっては遅し、すでに戸は開いてしまった。

そこにはやはり、この弓道場を預かる主将、美綴綾子と

「……………」

学園で知らぬ者なきアイドル、遠坂凜が居た。

さて、これは予想外だ。

余人からすれば些細なことかもしれないが、俺にとって美綴一人だけがいる弓道場と、凜がいる弓道場では心構えの仕方が違う。

さらに言うならば、そこに居た遠坂凜は黒守黎慈にとって鬼門ともいえる少女。

苦手な人物であるとか、嫌いな人物であるとか、そういった次元の話ではない。

直接口に出すことはできないが、俺にとっては過度の接触が危ぶまれる相手なのである。

「何立ち呆けてるのさ。わざわざ来たんなら入りなよ、クロ」  
「え……あ、おう」

美綴に招かれるままに足を踏み入れる。

ちなみにクロというのは、一部の人間が使う俺の愛称だったりする。

部活の同部員だったり、中学からの同級生だったり、特に親しい友人だったり。

猫か何かの名前みたいだが、親愛を持ってそう呼ぶのなら俺自身に訂正する気はなかった。

そしてこちらの戸惑いも余所に、凜は茶を啜っている。

俺の忌避の意識は別段彼女のせいというわけではないため、向こうがこちらを意識することはない。

彼女がではなく、こちらが勝手に避けるようにしているだけというか。

備えてある机に対面するように二人は座っていたので、自分も間に入るように座る。

「で、どうしたの。アンタがこっちに来るなんて」

「剣道場は誰も来る気配なかったんで、こつちなら美綴いやがるかなー、とか思ってた来てみた」

「そう。で、私はここにいやがったけど、何か用事でもあるの？」

「何か楽しそうにお喋りしてるっぽかったんで、暇な俺も混ぜてもらえれば僥倖ですーみたいなの？」

「……待て。クロ、あんたさっきの話聞いてたの？」

「どの話？」

「いやほら、だからさ……」

「ああ、美綴が遠坂よりも三キロほどデブだって……」

瞬間、突風と共に眼前数センチの場所に美綴の拳があった。

座った状態からそこまでの速さで拳を繰り出せるのはお見事。

だが如何せん、寸止めでなかったならその一撃で俺の鼻は折れている。

さすがにそれはご勘弁願いたい。

「口には気をつけな、クロ……次は命がないよ？」

「はい、すみません！」

あまりの迫力にチビリそうである。

なまじ美人だけに、怒った顔をされると普通の何倍も怖い。

拳が離れた後、美綴の拳から目線を離した俺は、ゆるりと凜の方を見つめる。

互いに座っている状態ながら、足先から頭の天辺までを視線が往復すること二回。

「うーん……」

「何かしら、黒守君？」

「いや、三キロ違いつつても、それは単に胸の差なんじゃ……」

瞬間、周囲の気温が下がったのは気のせいではない。

いくら風も冷たくなってきたこの季節といえど、こんな急激に寒くなるようなことはないはずだ。

そう……学園のアイドルであるはずの、遠坂凜さんが放つ殺気による錯覚だった。

今すぐに泣いて逃げ出したい。

「黒守くん、ナニカ仰ツイマシテ？」

「い、いえ、何でもありません！ 遠坂さんの美しさに比べればどんな宝石の輝きも霞むことでしょう。今日もお美しくあらせられますです、はい！」

「そう？ ありがとう」

くっそっ、わかっているのに口を突いて出してしまう本音。

弁解する様は腰が低いなどという言葉だけでは表現しきれない。

絶対服従の奴隷といえども、ここまで卑屈にはならないだろう。

寧ろ自分でせっせと墓穴を掘っているのだから、始末に負えない。しかも掘った穴に自分から飛び込んで、後は穴を埋め戻すだけという状況なのだからもはや手遅れだ。

さすがはさすが、学園内で男女問わずの逆らってはいけないリスト、トップ3に入る二名である。

この二人に対してここまで愚かな発言が出来てしまう人間は、学園内で数えても片手で足りるだろう……俺を含めて。

「ところで、何の話をしてたんだ？」

「あなたには関係のないことです。もしかしたら万分の一以下の確率で、あなたにも関係あるかもしれませんが」

「ええー、それはないっしょ」

「??？」

全く意味が分からない。

万分の一以下で関係していると言われても、それはすでに関係ないと言われているようなものだ。

俗に三十二万分の一以下の確率は、ゼロと見なしていいと言われている。

解りやすく言うと、飛行機が墜落する確率がそれである。ゼロとみなしていいと言っている割には、現実には稀によく墜落事故も起きているが。

稀によく。ここ大事。

ちなみに一年以内に全人類が滅んでしまうほどの隕石が降ってくる確率は、 $0.0002\%$ とされています。

つまり百万分の二の確率……約分して五十万分の一というわけである。

三十二万分の一以下の可能性の事象が現実で起きている以上、飛行機やヘリが32回以上墜落したら限りなく高い確率で隕石は落ちてくるということだ。

いやあ、まったく恐ろしい話だぜ。

しかしそう考えると、必ずしも無関係というわけでもないのか。訳の解らん理屈で考え込み始めている俺を尻目に、凜が立ち上がった。

「まあ気にしなくてもいい話ってこと。さて、そろそろ弓道部の部員さんたちも来るでしょうし、私はおいとまさせてもらおうかな」

「何、見て行かないの、射？」

「見ても分らないもの。遠くから眺める分にはいいけど。不心得者が道場にいるわけにはいかないでしょ」

「別に見学ならそこまで気にすることでもないだろ。逆に男子部員は普段より一層気が入るんじゃないかねえの、イイとこ見せようとして理解できんけど」

「あら、失礼ね」

先ほどの剣呑な空気とは違って、今回は互いへの牽制程度だ。

俺との問答をしながら遠坂が席を立つのと、道場に部員がやってくるのは同時だった。

「おはようございます、主将」

「ああ、おはよう間桐。今朝は一人？」

「……はい。力になれず、申し訳ありません」

「ああ、いいっていいって。本人がやらないって言うんなら、無理をさせても仕方がないさ」

入ってきたのは間桐桜。

一年生の間ではそれなりに有名だ。それは遠坂凜と同じベクトルで。

しかしまた凜と同じく、男っ気がない。

いや。彼女の場合はご執心の男子が一人いるという話を、聞いているし知っている。

くそう、あの果報者め。今度問い詰めてやるべきか。

「それじゃ、失礼するわ。また後でね、美綴さん」

「ああ。またね、遠坂」

「……お疲れ様です、遠坂先輩」

「                    ありがと。桜もしっかりね」

それだけ告げて、彼女は出て行った。

間桐は無表情に、されど複雑な空気でその姿を見送っていた。

「……間桐って、遠坂と仲良かったのか？」

「え、何ですか？」

「いや、アイツが苗字じゃなく名前で呼ぶ相手って、結構限られるからな。俺が全部を知ってるってわけでもないから、一概にはそう言えねえんだけど」

少なくともかなり親しい相手、特別な相手でもなければ、彼女は名前で呼ぶことはしないはずだ。

魔術師であるが故に一般の人間とはあまり親交を深めないため、彼女に友人はそう多くないように思う。

彼女がそういう気質なのもあるだろうし、意図的に深く他人と付き合うことを避けているのだろう。

あるいは魔術師繋がりということ、間桐とは特別な親交がある



のかもしれないが、そうだとっても少し不思議ではある。

もしくは彼女たち二人の魔力の波長が似ていることも、関係あるのだろうか　と。

「そんなことはないですよ。私と遠坂先輩じゃ、何もかも違いすぎるし……」

「……んー、間桐はもう少し自分に自信を持った方がいいな。中身は空でも構わないから、私実はいんです！　みたいな振る舞いをしておいたほうがいい」

「……………このあいだ、美綴先輩にも同じようなこと言われました」  
「へ？」

「あー、ダメダメ。この子、何でもかすっごい弱気なんだもん。それよりクロ、あんたも衛宮に言ってやってくれない？　弓道部に戻って来おいって」

「無茶振りすんなよ。通い妻の間桐が話しても無理なんだろ？　そんなら俺が言っただとこで効果ねえよ」

「か、かかか、通い妻だなんて、そんな……………」

### 衛宮士郎。

以前弓道部に所属していた男子生徒で、間桐が毎朝通っている家の主。

射の腕前は一級品、あの武芸百般の美綴をして、弓においては敵わないと云わしめた豪傑な男子。

普段は生徒会長の柳洞一成と行動を共にしていることが多く、いつも誰かに頼まれごとをされているような奴だ。

彼とは同学年であり、バイトで共になったこともあるので面識がある。

というより、先程心中で果報者と言った相手こそが、衛宮士郎その人。

個人的な事情により衛宮は弓道部を退部したのだが、美綴は未だに衛宮の部活復帰を諦めていない。

自分からもアプローチをかけているみたいだが、間桐に対しても言い含めるように伝えてあるのだろう。

その毎朝通い妻となっている間桐を以てしても説き伏せられないのだから、特別深い交友もない俺なんかでは土台無理だった。

「アンタも、剣道に飽きたらこっち来なよ。別に未練があるわけでもないでしょ？」

「そりゃあ……有るか無いかで言えばねえよ？　けど、こっちしんどそうだからなあ」

自分は元々、オールマイティ型の人間である。

穂群原学園の同級生からは、一部分において美綴の男版との評価もあるくらいの。逆もまた然り。

なので剣道でも柔道でも弓道でも、ある程度は並々こなせるのだ。しかし一番の得手は剣術、二番手に棒術であり、そこからそれ以外の武術が入る。

部活動自体は内申書のためが一番の理由なので、俺としては別にどの部活に所属していても良かったのだが……………

「あたしのシゴキ程度じゃ根も上げないくせに、よく言うよ」

「いや、そういう意味じゃなくてだな……………」

その理由も口に出して言うことでもないので誤魔化したかったのだが、バッドタイミングなことにその原因の一つが来てしまった。

弓道場の戸を壊さんばかりに勢いよく開け、間桐慎二がズカズカと入ってくる。

名前からもわかるとおり、間桐桜の兄である。

一応あんなんでも副主将なんて肩書きを持っているので、部外者である自分は何も言えない。

そして弓道場に入ってきた慎二は、やたら機嫌が悪いようだ。

「くそ、遠坂のヤツ……!!」

「何かメチャゴ立腹みたいだぞ、美綴」

「あー、今出て行った遠坂と鉢合わせて、こっぴどくやられたんでしょ」

「なるほど……（ということは、矛先はこっちに考えると考えてOK？）」

「ええ……（面倒なとばっちは、こっちに考えると考えてOK）」

俺と美綴のアイコンタクトは完璧だった。

兄の様子に委縮してしまっている間桐は、ギュッと手を握りしめたまま動かない。

何故か兄に対して完全服従の彼女のその姿勢は、見ていて可哀相になるくらいである。

妹の間桐桜、弓道部主将の美綴、そして俺へと順に視線を移す慎二。

俺を見た瞬間、元から悪かった目つきがさらに細められた。不快に思っている感情がその目を通して見えるくらいに。

「あ？ 何で黒守がここにいるんだよ。部外者は邪魔だから、さっさと出て行ってくれない？」

「言われずとも出て行くさ。遠坂に振られた誰かさんのせいで、空気も悪くなつたし」

「っ……おまえ……！ 誰が遠坂に振られただつて！？ あんな女、こつちから願ひ下げだよ！！」

「うわぁ。全校男子生徒を敵に回すかのようなその発言、さすがは慎二君ですねー。性格はどうか知らんが、見た目だけなら結構お前の好みじゃねえの？」

元々派手好きの面食いである慎二である。見た目だけという条件付けも間違つてはいない。

外見も内面も優等生のお嬢様だと思っている全校男子生徒は、その殆どが基本的に遠坂凜に対して憧れを抱いているだろう。

「ふん、僕は自分を安売りしないんでね。性格も伴ったパーフェクトな女の子にしか興味ないのさ」

「ハ、中身よりもまず見た目からの奴がよく言うぜ。まさに見た目だけで中身がない慎二君の言いそうな言葉だわ」  
「ぶっ」

あまりの発言に美綴が吹き出す。

だが今の言葉は誰がどう聞いても、売り言葉に買い言葉だ。

だからこそ

「黒守……僕に喧嘩売ってるのか？」

プライドの高い慎二が、激昂するのは目に見えていた。  
傍目にはすぐにも喧嘩勃発となりそうな空気だったが、ここで  
殴り合いになるようなことはない。

なぜなら……………

「別にどっちでもいいけど……………本当にやる気が、テメエ？」  
「っ……………」

一昔前、何が原因でそうなったかは記憶にないが、慎二とは凄絶  
な喧嘩をしたことがある。

先に手を出してきたのは慎二だったのは覚えているが、俺はそれ  
を悉く返り討ちにした。

それ以降、慎二は自分から喧嘩を売ってくるような真似はしなく  
なった。

少なくとも自分一人では勝てないことを知っているため、不用意  
に絡んではこない。

「お前のそのプライドの高さは嫌いじゃない。自分に誇りがあるっ  
てことだからな。中身が伴えば、もう少しマシになると思うんだが  
……………」

「……………おまえにそんなことを言われる筋合いはない。用がないなら、  
さっさと消えろよ」

トゲトゲしい雰囲気を少しばかり和らげ、慎二はすれ違うように  
こちらを一瞥して、道場の奥へと歩いて行った。

今はあんな感じたが、中学時代はまだ性格も柔らかく、それなり

に交友関係も築いていた。

ある時期から豹変したように人が変わってしまい、彼の周囲を取り巻く人間関係もガラリと変わった。

思えば喧嘩をしたのもその頃だったか……………

確か俺の知り合いの女の子を誘っているところに出くわして、一人の女の子に対して数人掛かりで囲み、あまりに無理強いをしていたから割り込んだのだ。

何とか場を収めようと説得を試みたが功を奏さず、内の一人が殴りかかってきたのを切っ掛けに全員が俺に襲い掛かってきた。

後ろに女の子を庇って思うように回避が出来ず、やむを得ず本気を出さざるを得なくなった。

喧嘩を超えた戦闘に入ってしまった俺は、気付けば全員を立ち上がれなくなるまでに沈めた。

恐らくは俺への攻撃行動には積極的でなかっただろう慎二をも、俺は敵として暴力の対象にしてしまったのだ

過去へ馳せる回想も一瞬。

俺は道場の入口へと向かう。

「じゃ、美綴。俺もおいとまするわ」

「ああ。気が向いたならまたおいで」

この後で不機嫌な慎二が桜に八つ当たりすることも考えられたが、今は美綴も一緒にいるので大丈夫だろう。

弓道場を出る寸前に目配せで美綴に挨拶を交わした後、俺は自分の教室へと向かった。

昼休みの屋上。この場所には誰もいない。

春夏秋冬には生徒がいることもあるが、冷たい風に晒される真冬には人っ子一人いないのがこの場所の常だ。

いつもここで一人昼食を摂るのが、最近のマイブーム。

たまには教室や学食でクラスメイトと、生徒会室で柳桐や衛宮と絡んでいることもあるが、基本的には一人で過ごしている。

学園にあつてはそれなりに交友関係もあるが、俺は気質的に集団の中にいることが苦手なため、一人になりたがる傾向にあった。

4、5人までならば許容範囲だが、それを超えると煩わしさが勝

ってしまうのだ。

而して、今日は何故か先客がいたりした。

「あら、奇遇ですね」

「……どうやら、今日は縁があるみたいだな、凜」

二人しかいない故に、俺の彼女への呼び方も姓名から名前に変わる。

彼女との付き合いは長い。

この町に住むことになったときに、魔術師として……土地のオーナーとしての彼女と相對した時からの付き合いだ。

俺が元々住んでいた場所は既に霊脈が枯渇していたため、移住を余儀なくされていた。

過去にこの町を選んだ理由は、候補の中で最も移住条件が簡潔な場所を選んだこと。

魔術師として居住地に霊脈が存在する場所を選ぶのは当然だが、そうした土地は代々歴史ある魔術師の家系が管理している。

居住するには法外な対価を要求されることもあり、たとえ相手よりも優れた能力者であっても、魔術師としてそれに逆らうことは暗黙の掟に反する。

当時は年端もいかなない少女だった遠坂凜。



その彼女が霊脈の根ざす土地の管理者であるというのは、同年齢の俺からしてかなり驚嘆すべき事実だった。

実際は後見人らしい男が手続きなどを行っていたが、それとは関係なく同じ年齢である彼女の魔術師としての在り方に、尊敬の念を覚えたことは記憶に残っている。

屋上の風の当たらない角に座って、彼女はサンドイッチなんかを頬張っていた。

手元には紅茶を完備しているあたり、本格的にここで昼休みを過ごす算段なのだろう。

猫を被った態度も健在で、その不自然に完璧すぎる笑顔が逆に背筋を寒くさせる。

「おまえみたいな優等生は、弁当派だと思ってたが」

「いつもはそうですよ。けれど、今日は寝坊してしまったもので」

「は？ あんな朝早くに弓道場に居たのに？」

「あ……コホン。今日は、ご飯を炊き忘れてしまいました」

「ククっ……ま、そういうことにしよう」

恐らく今日はそういう言い訳で、クラスメイトからの誘いをかわしてきたのだろう。

咄嗟に俺にも同じ対応をしてしまったが、今朝は弓道場に一緒にいたことを忘れていたのだ。

こんなうつかりな一面もあつたりするのかと、少し愉快的な面持ちになつてしまふ。

「お隣よろしいですか、遠坂さん？ 生憎と、寒風を凌げるポイントはそのかないものでして」

「ええ、不必要に近寄らないのでしたら」

「そこはご安心ください。お互いにパーソナルスペースもあるでしょうし」

「難しい言葉を知っているのね」

先に居た凜を追い出すことも出来ないので、若干距離を開けつつ隣に座る。

パーソナルスペースというのは個人の快・不快を決める対人距離、云わば縄張り空間のことだ。

心理的な私的空間の事を指すため、自身を中心にいつも確保しておきたい物理的距離を意味する。

分かりやすい例で言うと、人が電車で席に座るとき、通勤ラッシュでもないかぎり密接して座ることは無い。

それぞれに余裕があるときは、隣り合う人間とは若干の距離を開けて座るはずだ。そしてその距離感をパーソナルスペースという。

「雑学好きだね。それに凜みたいな学年トップクラスには及ばずとも、成績も良い方だぜ？ そうじゃないと奨学金を取れないからってただだが」

「そうなんですか。興味が無いから知りませんでした」

「いやー。ほんととストレートに物を言うお嬢だねー」

ここまで直球な発言をする人間はそうはいない。

だが学園での凜の姿は猫被りだと知っているので気にしない。

しばらくは黙々と昼食をとっていたが、俺は最近気になっていたことを彼女に聞いてみることにした。

魔術師でありこの土地の管理者である凜なら、何か知っているかもしれないと思ったからだ。

「なあ凜、最近町の空気が不穏な感じしないか？」

「え？ さあ……………私には分かりませんけど」

いつまで猫被りの態度を続けるのかと一瞬思ったが、まあ気にしないことにしよう。

「こうさ、場所によってはピリピリしてるっていうか。俺的な表現で申し訳ないんだが、喧嘩する直前みたいな緊張感っていうか」

「……………喧嘩などとは無縁なのでよくわかりませんが、そんな風には感じませんね」

いつも毅然としている彼女にしては、返事に間があった。

凜は現在町を包んでいる不穏な空気に関して、何か知っているのだろうか。

クラスメイトに何気なく話題を振ってみても手応えはなかったあたり、魔術師側に関係することなのかもしれない。

曲がりなりにも魔術師ではあるので、その辺りには敏感だ。

「それにしても、何故そんなことを？」

「ん？ 単純にそう感じるっていうのと、最近このペンダントが曇ってきてるからな」

制服の内からゴソゴソと、宝石が詰め込まれたペンダントを取り出す。

いつも首からかけているが、普段は見えないように制服の下に隠している。

派手なアクセサリーは校則違反なのだが、俺にとってこれはお守りであり、両親や曾祖父の形見でもある。

よっぽどのことがない限り、肌身離さず持っていたいものなのだ。

「これ、結構イイお守りでな。何か不吉なことがある時は、煌きが曇り出すんだよ」

「へえ……………っ!？」

「うえッ!？」

急にペンダントに手を伸ばし、人様の首ごと引っ張り上げる凛さま。

そのアイドルにあるまじき蛮行。見たいのならそう言えば貸しもするのに、こうも突然では反応できない。

そして今なお絞められ続ける俺の首は、ギリギリと悲鳴を上げております。

「ちょ、これどこで手に入れたの!？」

「こ、これは、曾爺さんの形見で……………財産以外に俺に残してくれた、唯一の物だ。だからあんまり、手荒には扱わないでもらえるか？」

「え、あ、こ、ごめん!？」

「っ…………ふっ。何だよ、宝石に興味あるのか？ けど、そこまで必

死になることじゃないだろ」

それっぽく聞き返してはいるが、何故彼女がこんなにも過激に反応したのかは分かる。

このペンダントは魔術師にとってみれば、かなりの上等品だ。常に帯びている魔力、積み重ねてきた歴史、内包する概念。

どれをとっても超一級の聖遺物。

これを触媒にすればかなり大がかりな魔術行使も可能だし、儀礼呪法などを行う際の媒体にもなる。

「いや、興味があるっていうのはそうだけど………それ、かなりの値打ちモノよ。値段も歴史も………ね。黎慈はそのペンダントの由来って知ってるの？」

「曾爺さんは金持ちだったから、値段はそうだろうけど………由来は確か、ダーナ神族の人々が太陽神への供物として、自分たちの命を少しずつ注いで作り上げた聖なる光のアミュレット、みたいな感じだったと思うぜ」

ダーナとはケルト神話関連の、ダーナ神話に登場する神の一族のことだ。

ダーナ族は魔術と詩に優れた一族であり、先住民であるフィル・ボルグ族を破ったが、マイリジアン族……アイルランドの祖先にあたる者らとの戦いには敗れてしまった。

そして海の彼方に逃れ、ティル・ナ・ノグ“常若の国”の地下にフェアリー・ランド“妖精の国”を作って、目に見えぬ国土に住む、目に見えない種族となった。

このあたりが、ダーナ神族についての簡単な知識だ。

ダーナ神話に関連して出てくる神や王、武器の類も結構多い。  
有名どころでは戦神ルーに海神マナーン、ダーナ神王である銀  
の腕のヌアザ、フォモールの王にして邪眼のバロール。

武器に関しては、クラウ・ソナスやブリューナク、フラガラック、  
タスラムなどが著名である。

恐らくダーナ神話そのものに詳しくない者でも、何かで聞いたこ  
とのある単語も多いのではないだろうか。

「ふうん……………」  
「う……………」

しかしマズイ。

まさかここまでの反応をされるとは思わなかった。

やはり魔術師である彼女にこれを見せるのは、不用心だっただろ  
うか。

僅かに警戒気味になってしまうものの、特に騒ぐでもなく彼女は  
アミュレットを見つめていた。

「いいわね、黎慈は。そういえばアンタの家って、結構な遺産が残  
ってるって言ってたもんね」

「いや、まあな…………それを自慢するつもりも、浪費しようとも思わ  
ねえけど」

ペンダントを引っ張り上げたあたりから、凜は素の態度になって  
いる。

猫被りという建前を維持できないほど、このペンダントは彼女にとっても凄まじいモノに見えるのか。

「……………」

「つーか、何か困りごとか？ 金以外のことなら相談に乗るぞ？」

このペンダントは本当に大切な物だが、もし貸し与えることで彼女のそれが解決するのならば、一日貸す程度ならば吝かではない。

しかし彼女は、俺の厚意を受ける気はないようだ。

「いいわよ、別に。そんなにホイホイと貸しを作るわけにもいかないわ。それにこれは、選ばれた私自身が解決しなきゃいけないことだもの」

「？ それならいいんだが……」

「貴方もね。他の魔術師に簡単に協力するようなことは控えなさい。十中八九、ロクなことにはならないんだから」

俺だって魔術師なんてものは、原則として信用しないことにしている。

たとえどれだけ善人である者でも、自分にとって好ましい人格者であつてもだ。

自らも魔術師でありながら、勝手な話ではある。

今の俺は人間としての生活と魔術師としての在り方を両立させて自分なりに生きていきたいと思っている。

一人の人間として、独りの魔術師として全てを与えてくれた曾祖父さんには申し訳ないが、今の俺はそんな中途半端な存在だった。

魔術師としては他者を信用しない。

そう言いながらも、凜に対しては昔からの付き合いと個人的な感情から信用してしまっているのだ。

そんな奴、中途半端以外の何物でもないだろう。

「いいんじゃないの、一人くらい例外がいても。俺はお前を気に入ってるし、人としても魔術師としても信用してるしな」

「……………そう。構わないけれど、私は貴方とは違うわ。ええ、その時が来たなら存分に利用してあげる」

一瞬だけ目を見開いて俺を見た後、先程までの空気を一変させ、いつもの態度に戻る凜。

俺の言葉の何が琴線に触れたのかは分からないが、どうやら彼女には何かしらの意味を含んだようだ。

最後の一欠けらのサンドイッチを飲み下し、彼女は俺を残して屋上を跡にする。

「魔術師……………か」

かくいう俺は久しぶりに自分自身が魔術師であると意識したせい  
か、気分が高揚していた。

恐らく

彼女を出て行った扉を見つめる俺の顔は、無

意識のうちに笑みに変わっていただろう。



## Prologue ? (後書き)

二次創作の執筆経験は少々ありますが、まだまだ若輩の域を出ない未熟者です。

更新速度も遅く不定期となり、安定して皆様にお話をご提供できないこともままあるかと思えます。

多くの読者の方に楽しんでもらえるよう精進する所存ですので、更新されているのを見かけて、もしもお時間が許すのであれば、暇潰しにでも皆さまに読んで楽しんで頂けたらと思います。

誤字、脱字や改行ミス等御座いましたら、ご一報くだされば幸いです。

もちろん、ご意見ご感想のほうも心待ちにしております。

?

REMEMBER !! !! !! !! !! !! !!

公には言えないが、俺の家系は魔術師と呼ばれる世界の異端者だ  
つたりする。

父は俺に“普通の人間として生きて欲しい”との願いを持ち、母もそれに賛同したことで、俺は幼少期を一般人として暮らしていた。永く続く魔術師としての自分を捨てるなど、同業の者から見ればあるまじき思考思想であり、何十代とかけて探求を続ける魔術師としては狂っていたとすら言える。

どういう理由かは知らないが、両親は継承を絶やしてまで俺を普通の子として育てようとした。けれどその願いも空しく、魔術師として生きていた頃の因縁、因果から両親はどこかの誰かに殺された。

両親が殺されたその理由、原因が何だったのか。

魔術師間でのそういった事件は、表向き全て事故死として処理される。

表向きとは言ったが、別段魔術師同士にそうした処理の内容が語られるというわけでもないのだが。

そうした慣習のために俺は両親の死の事由を全く知らずに、また

知りたいとも思っていなかった。

父のことも母のことも大好きだった。けれど死んだと認識した時には既に割り切れてしまっていたからだ。

薄情な息子で申し訳ないが、幼いながらも俺は性格や思考からして、彼らよりよほど魔術師としての人格を形成していたのだろう。

両親の愛情と想いを受けながらも、血筋に脈々と受け継がれてきた魔術師としての性が、俺自身の在り方にまで影響を及ぼしていたのか。

両親の死後に引き取られた曾祖父からは、深い憐憫の感情だけは見て取れた。

それが父や母、自分に向けられたものでないことだけは、子供心に理解出来た。

一族の継承を絶やしてまで光に生きる道を選んだというのに……結局は闇よりの使者に迎えを寄越されるとは、皮肉な末路を辿ったものじゃ

ふむ、安心せい。貴様らの子、我が曾孫は、儂が責任を持って預かり受けよう。なに、儂自身そう永らえることはない身じゃ。黒守の血族最後の子には、我が全てをくれてやろう

自身に向けての憐れみ、黒守に対しての哀れみ。

これまで積み上げてきた全てのモノに対して、深い悲しみを抱いていた。

そうして俺は 正と負の両方を合わせた、膨大な遺産を譲り受けることになった。

600年の歴史。魔術師の家系の全て。

正確には623年の歴史だが、正直600年とか言われてもピン

と来ないし、全てという表現では曖昧すぎる。

屋敷や土地、財産などの目に見えるものなら実感も湧くが、魔術師としての遺産など目に見えない。

そう。目に見えないからこそ受け継ぐべき負の遺産。

俺自身にそんな自覚はないし、受け継いでから数年経った今でさえ、そのことを何とも思っていない。

しかしそれを背負ったことだけは、揺るぎようのない事実。

普通では使いきれない財産の他に、曾祖父さんから授かった遺産は二つある。

一つは、いつも首から下げているペンダント……曾祖父より貰い受けた、最上級の聖遺物。

もう一つは、黒守家が積み重ねた血の成果、歴史の結晶。両手首から肩口にまで刻まれた、凄絶なまでの魔術刻印。

黒守の魔術刻印は通常の魔術師が受け継ぐそれとは別に、もう一つの役目を担っている。

魔術刻印を聖遺物と霊的に同調・同化させ、内包された神秘や概念を魔術として行使可能にする。

それ自体は破格の魔導技術であり、魔術協会からしてみれば封印指定一歩手前なのだと曾祖父さんに教わった。

過去には魔術刻印と聖遺物を利用して、根源へと至る道を開こうとした者もいた。

無論その試みは失敗し、愚かな魔術師に対して科せられたのは片手片足の喪失だったらしい。むしろその程度の代償で済んだことは

安かっただろう。

通常の魔術刻印としての役目の他に聖遺物との契約を可能とするそれは、黒守家の秘法と言っても過言ではない。

だからこそ、魔術刻印の移植はあれほどの死痛を伴ったのだろう。

暗い、昏い部屋。冷たい石造りの地下室。

陰気、妖気、瘴気。常ならざる気が淀む。

正常な人間ならば本能的に忌避するであろう異空間。  
そんな魔気に満ちた牢獄で、俺はただ、身を苛む激痛に耐えていた。

手錠で両手を縛られ、鉄鎖で下半身を固定され、拘束魔術で肉体そのものを封縛されている。

両肩には杭を打たれ、両脚には釘を撃ち込まれ、何をしようがどう足掻こうが逃れられない状態に状況。

「うああッ、あ、ぐ、ううつ……うつ、げえ………！！」

叫びと共に胃の内容物を、もはや殆ど血だけのそれを吐き散らす。

嘔吐も吐血も、今ので何十度目なのか。

もはや胃は空っぽで、中には胃液さえも残っていない。

度重なる嘔吐で腸壁は傷つき、そこから流れ出た血が胃に溜まっていく。また溜まった血を吐き出し、その嘔吐でまた傷口が広がって血が流れ出る。

容赦なく続く魔術刻印の移植。

目前には父親の遺体。

その腕から直接霊的手術によって、俺の身体に刻印を移植し彫り込んでいく。

本当なら父が殺された時点で、魔術協会が遺体を回収しに来たらしい。

しかし黒守の魔術を護る為に曾祖父が直接出向き、執行者と回収部隊、十人余りの魔術師との死闘の末に父の遺体を持ち帰ることに成功した。

その代償は決して安くはなく、曾祖父はその時の傷と呪詛によって、余命幾許かの時間をさらに削られ、逃れられない死という運命を与えられた。

いつまでも続く痛獄の連鎖、どこまでも続く痛絶の循環。

「はあっ、はあ、は、うっぐ……！」

肉体を拘束する釘杭、嘔吐による内臓の損傷。

その苦しみもかなりのものだったが、俺にとっての最大の辛苦は別にあつた。

両手首から肩にかけて移植される魔術刻印が、体を、心を、魂を侵蝕していく。

肩から先の感覚はすでに曖昧。それでいて脳に直接叩き込まれるような激痛。

肉を鋏でジヨキジヨキと切り刻み、心を研磨機でガリガリと削られていくかのよう。

「ハああつ、あ……ぐ、うッあ………ああああー！」

どうせ感覚も残っていない両腕ならば、いつそこで切り落してしまいたい。

杭を打ち込むだなんて生易しいことをせず、切り落として移植してまた繋いで、切ってオトシテもどしテ継ぎ接ぎだらけの腕にナツてもかまワナイから今すぐ解放シロ………痛みによって正気を失い、痛みによって正気を取り戻す、その繰り返し。

主の状態など関係なく、両腕に刻まれたモノは俺を侵して、オレを冒して、オレヲ犯シテ　　ひたすらに蝕んでいく。

その過程で何度もフラッシュバックする誰かの記憶。  
その工程で幾度となくブラックアウトする俺の意識。

俺に刻まれていく呪いとも言わなければならない。

あらゆる苦痛を伴ったその作業、79時間もの時間を費やして行われた移植の結果。

最後の最後まで俺が自我を保っていたのは、やはり曾祖父さ

んが最低限の保護を施していたからなのだろう。

魔術師の家系に代々伝わる秘奥にして、一族の後継としての証明。人間としては最悪の負の遺産であり、魔術師としては至上の遺産だ。

見た目は青い刺青のようなもの。

初代から培われてきた全てが集約された、現代までのデータベース。先代らの魔術回路そのものであり、当代に託される黒守の集大成である。

俺に移植されたのは、先代である父が持つ全ての魔術刻印。

刻まれた者の補助的な役目を果たすそれは、同時に受け継いだ者の肉体に過度の負担を掛ける。

本来ならば第二次性徴までの間に段階的に移植するのが望ましいとされる。事実殆どの魔術師の家系はそうやって移植していることだろう。

肉体の成長に合わせてゆっくりと刻印を移して身体に慣らしていく、最終的には全ての魔術刻印を自身で制御できるようにさせる。

だからこそ俺の場合は、魔術刻印の移植としては異例、異常なやり方。

一子相伝であるその刻印は、本来は慎重に移植するべきものだ。最終的には全てを移植するにしても、その過程で後継たる存在が自壊しては元も子もない。



魔術師にとって、自分たちは根源へと到達するための道具。

その考えに基づいた行動でも、それは決して自らを軽く見ていいという意味ではありえない。

歴史を重ねた家系であるほど、血統というものには深い執着がある。

黒守一族は長きに亘って血統操作を行い、血の純潔ではなく力の純化を優先した。

分家こそ持たなかったものの、優れた血を迎え入れることでより力を凝縮し、濃縮するようにしたのだ。

黒守の家系は約600年にも及ぶ一族だ。ただ一つの目的の為に妄執と妄念と妄念で生き抜いてきた存在など、余人には到底理解出来ないだろう。

そしてそれらの引き継ぎが終わった後、まるでそう定められていたかのように曾祖父さんも逝ってしまった。

親兄弟どころか肉親さえ居なくなり、これからは自分の面倒を見られるのは自分しかない。

一人の人間としての全てを無くし、独りの魔術師として全てを得たあの日。

俺は誰にも頼ることなく、一人で生きていくと決めたのだ

# MEMORY OUTPUT

「この屋敷に戻ってくるのも久しぶりだな……」

俺は今、実家とも言つべき黒守本家に帰つてきていた。

冬木からかなり離れた場所にあるこの屋敷は、人の目にはただの  
 廃屋敷に見えるようになっていた。

侵入者探知、侵入者排除の結果も張られており、興味本位の一般人ではなく魔術師が何らかの目的で侵入してきた際には即座に俺に伝わる。

といつても、この屋敷を離れてから結界が反応を示したことは一度もない。

「さて。用件は手早く済ませたいし、地下の工房に向かうか」

普段はただの人間然として生活しているが、別段魔術師としての生き方を辞めたわけではなかった。

良き魔術師である遠坂凜と相対したことで、魔術師としての己を自覚させられた。

故に魔術師としての義務とも言える行いを成すため、工房が備えてある黒守の屋敷へと戻ってきた。

「解除Release、解錠Release、解放Release

「

複雑に術式を組み絡めた、魔術施錠を開いていく。

中身は違うが同じ形式で掛けられた施錠が合計七つあり、そのいちいちを開いていかなければ工房へは辿り着けない。

出て行く時にはまた一つずつ施錠していかなければならないという、何とも面倒極まりない仕掛けである。

面倒だからと言って、施錠を怠るような真似は魔術師として絶対にありえないが。

全ての施錠を解いて、地下室の扉を開く。

本棚がズラリと並び、あらゆる書籍、魔導書の類が納められた部屋。

魔具や薬品、それらの製造施設、簡易儀式が可能な小規模の魔方阵……と、魔術師の工房としては中々のものだと思う。

問題はその工房の主が、一切管理をしていないという点だろう。

「最近の魔具、作ってないなあ……護符ぐらいは作ってみるか。そ

れにそろそろ、魔術薬の勉強もしないとな……………」

アイテム  
ポーション  
魔具の作成は得意だが、魔術薬の作成は不得手だったりする。

道具は術式を仕込んだり呪いを仕込んだりで簡単に作れるのだが、薬に関しては成分の微妙な配分が命取りにもなる。

自分が使うにしても他人が使うにしても気が滅入るため、容易には手を出しづらかったのが理由だ。

しかし今日はそんなことよりも、優先して行すべきことがある。

部屋の中心になる魔方陣の中央に立ち、しばらく運転させていなかった魔術回路を目覚めさせる。

魔術回路を閉じていたわけでもなく、通常の魔力流動や魔力生成は行っていたが、魔術回路を魔術回路として起動するのが久しぶりなのだ。

唱えるのは自己の内側へと働きかける言葉。

俺一人だけのモノである、唯一無二の詠唱。

「set……Ether Drive」

呪文詠唱と共に、魔術回路が起動する。

自身へと働きかける意味合いでは魔術回路を魔術廻炉と言い換えているだけだが、これが結構大事なこともあったりする。

魔術回路と基盤を接続、生成した魔力を基盤へと送達。

いつでも魔術を発動可能な状態へ。誰もが扱うような魔術ではなく、黒守の魔術を行使する。

いくら怠けて鈍ったところで通常の魔術を扱えるのは黒守の魔術師として当然だ。

今大事なのは、自分が黒守の魔術を行使するに足る状態に在るか  
どうか。

本来は聖遺物を媒体にして簡易発動するが、今回は自分の魔術刻  
印を通して聖遺物の力を引き出す。

“An Ancestor attend, Spirit the  
enucleus” CARDINAL SIN”  
Supremacy reach the Origin,  
Supremacy heavens the Fall do  
wn

契約した聖遺物との同調、同化の儀式詠唱は、言葉も意味も初代  
の頃から変わらない。

黒守の母にして初代である黒守朧羽は、聖遺物の神秘・概念を自  
らに実装する術を得て、根源へと至る道を構想した。

黒守の悲願は根源に至る、魔法に至る道への到達。

だというのにそれから600余年の間、誰も根源へと到達でき  
ていないのだ。

始まりが頂点に近かったが故に、後の子孫らは根源へと至れない  
限り、ただ転落していくだけの存在に成り下がった。

“I wish……I wish a revive, I h  
ope heavens to reach again  
one's desire an inordinate am

b i t t i o n , I ' m o n l y k n o w s " S E C R E T  
C O D E " " "

現代にまで積み重ねられてきた希望、絶望、羨望、渴望は、魂にまで刻まれた宿命と化している。

代を重ねるごとに魔術師としての性能は向上し、根源への執着も増していく。

もしかしたら父はそんな黒守の生き方に疲れ、見切りをつけたのだろうか。

これまでと同じく俺もまた根源へは至れず、さらには子孫を残すことさえなく消えていくのかもしれない。

だけど、それでいいのかもしれない。たとえ俺に子供ができたとして、600余年間も継続した狂気を受け継がせたいとは思わない。

そうした点において、俺は両親と同じ考え方をしている。

彼らの愛した子である俺は、結局は黒守の名を受け継いだ。が、そういう意味でなら、あの二人の生と死には……その想いには、意味と意義があったと言えるだろう。

この先いつか、俺は魔術師として生きて魔術師として死ぬ。

たとえそれでも、両親の遺志は確かにここに。

そして曾祖父、さらにその祖先の黒守に誓って、彼ら全員の志を無にはしない。

だから今はまだ、一般の人間と魔術師の狭間で揺れていた。両立できているかもわからない、半端な生き方かもしれないけれど。

曾祖父がくれた黒守で在り、両親が愛してくれた黎慈で在りたいのだ。

「I'm only one's, "INNOCENT GARDEN"

set grave "SPIRITUAL NAME"…… set grave "ORIGINS NAME"……

「!」

己を含めた黒守の意志全てを込め、詠唱を完了する。

同調する聖遺物の波動に魔術刻印が光りだし、刻印に同化していく概念をこの身に魔術として実装する。

完遂した儀式に魔方阵は輝きを弱めていく。

主の目覚めに歓喜するかのように、魔術刻印が鳴動しているように感じる。

魔力の胎動と自身の鼓動が重なる。久しぶりに聖遺物との契約を行使したが、同調率は過去最高域。

どうやら黒守の魔術は、今の俺でも行使可能なようだ。

「……光弾射出 Blitz Shot!!」

手を銃を模した形にし、二本の指先から光弾を作る。

工房内の物を破壊しないよう、出力を極限まで絞りながら魔力で形成された光弾を撃ち出す。

通常出力の威力でゴム弾程度、高出力で人間の身体に穴を穿てる。最大出力においては地を穿つことさえできるが、これは俺の魔術

特性によるもので一般的な魔術レベルには適さない。

この光弾射出の魔術を基本に、聖遺物に内包されている概念を付与する。

ミスディック・デ  
イヴァイナー  
現黒守一族当主、黒守黎慈の固有能力とも言える、聖遺物・概念実装魔術である。

そしてそれだけでなく、自身に可能な通常の魔術も試す。

雷撃、衝散  
「Blitz Wave!!」

自身の掌に魔力を集約させ、雷を拡散させる。

俺の属性は『光』と『雷』と『空』の三元素使いであるため、その属性に応じた魔術を得手とする。  
トリニティ・ルーラー

基本属性が一つもないのだが、その代わりに特殊な属性である『光』と『雷』に、第五架空要素である『空』を持っている。

書物や現存する魔術師について調べてみたが、俺の属性の持ち方はかなり特異なものに分類されるらしい。

基本的な魔術は大体修得しており、得意とする属性においては攻性魔術に特化して訓練をしていた。

他者を傷つける魔術を重点的に学んだのは、魔術師の世界は剣呑とした場所だという曾祖父さんの教育の一環だ。

何れはその場所に身を置く気ではいるが、こうした魔術を日常的に使うような毎日になるのかと思うと今から憂鬱で仕方がない。

「高校卒業と同時に、魔術協会へ入学……か。自分で決めたことと



はいえ、期待半分不安半分って感じだな」

時計塔

ロンドンに存在する魔術協会。

入学に関する手続き等はすでに調べてあり、問い合わせたところ、書類などの送付や必要経費などは心配ないと言われた。

電話の向こうは『あの黒守家のご子息であるならば』などと言っていたが、ウチがあちらにどういう認識を持たれているのか分からない。

協会へも数年に一度程度の出入りしかしていなかったらしいので、黒守についての情報や技術が手に入るなら断る理由もないということか。

そうやすやすとこちらの情報を開示するつもりはないのだが、意地でも開示させられるのだろうか。

自分より高位の術者に取り囲まれている様を想像すると、恐怖と戦慄が背中を走る。

覚悟完了済みのこととはいえ、極力は争いは避けたいところだ。

何よりも自分が面倒くさいことになるのだということを、昔に経験してしまっているから。

そんなことを考えたりしながら、そのまま明日は冬木市には戻らないつもりで工房に籠もることを決めた。

## Prologue ? (後書き)

様子を見ての二話目投稿。

手直しや改稿を行っているので、次回は少し遅めになるかと思ひます。

長詠唱の部分に関しては上手くルビ振れなかったため、この形とします。

## Prologue ? - 1

久方ぶりに帰ってきた屋敷で、魔術刻印の同調、魔術回路の連続運転を行った。

「<sup>Read</sup>読込……魔術刻印より、8番と54番、103番、211番を実行」

腕に走るいくつかのラインが青白く光り、俺の身体と周囲に僅かだけ効果を及ぼす。

魔術刻印も永く黒守の血筋に馴染んできたものなので、違和感を感じるのはほとんどない。

ただ一年に一度の割合で、肉体との同期が上手くいかずに体調を崩すことがある。

歴史の浅い家系であれば刻印を抑制する薬も必要になるほど影響が出るものだが、500年以上も続く家系ならばそれもない。

600年の歴史を持つ黒守の魔術刻印が馴染みきっていないのは、血統の厳選はしていたものの、必要とあらば族外の血をも取り入れていたことによる弊害と言える。

魔術回路も本数で表わすならばメインに20、予備としてサブに10を2つ備えて管理している。

よっぽどのがなければメインだけで事足りる上、俺の魔術特性もあってそうそう魔力を使い尽くすことはない。

そりゃあ大魔術の行使を連続的に休みなく使うようなことでもあ

れば、サブすら総動員させる必要は出てくるかもしれないが。

魔力運用の問題もあるが、いざとなれば魔術刻印も機能を半分閉じることで外付けの魔術回路として使うことも出来る。

その場合は両腕ともを合わせて、凡そ二十本の魔術回路として扱うことが可能だ。

「っ……ふう。痛み自体にはもう何とも思わないが、慣れることもないんだろっな」

魔術師には永劫付きまとうであろう魔術行使の痛みに、ふと感想を漏らす。

通常は人の身には存在し得ない魔術回路を起動させ、自身の肉体を神秘を成す部品とする行為。それを嫌う人間としての肉体が、魔術回路と化した肉体に課す聖痕<sup>いたみ</sup>である。

刻印と回路の調整が終わった後は、ポーション作成に関する魔術書を読み耽っていた。

「魔術薬を専門とする魔術師が少ないのはこういう理由もあるんだろっな。副業ならともかく、こりゃあ確かに割に合わんわ」

日常的に使用できるような薬は魔術をもって作る必要はなく、寧ろ市販されることのない劇薬等を作る方が費用対効果において優れている。

それに効力・効能の差異も、素材の良し悪しや成分量の違いによって細かく上下するらしい。

これまで勉強不足だったが、ポーションについての最低限の知識は蓄えられたように思える。

一段落ついたところで工房を閉めたが、一昼夜通り過ぎて気が付けば陽はすでに昇っており、慌てて始発の電車に乗って冬木市まで帰ってきた。

家に帰った時点ですでに朝練の時間だったため、そのまま朝食だけ済ませて学園に登校することになった。

学園に着いた瞬間

その異状は、あまりにも明らかだった。

「なんだこれ……結界か？　それも普通じゃない……………」

学園内だけが切り取られたかのように、完全に閉じている。

まるで世界からこの場所だけが取り残されたかのように、独立した空間になってしまっていた。

戸惑いつつも歩を進めながら、状況分析を始める。

（魔術的に外界と遮断している……少なくとも防衛が主目的じゃないな。となると、境界隔離による内部の隠蔽、もしくは結界内に入った生物からのライフドレインか？）

発動段階には至っていないが、恐らく後二日もあれば結界は完成するだろう。

誰がやったにしても、学園という場所に結界を張る意味が見出せない。

最近町を包んでいる不穏な空気に関係あるのだろうか？  
凜が何らかの理由で、この結界を張ったのだとしたら？

完成前に感づかれるような代物をアイツが張るとは思えないが……  
この規模の結界を張れる魔術師を、俺は凜以外に知らない。

どうしたものか……と考え始めるが、現状で打てる手はほとんどなく、本格的に事を起こすなら凜と合流してからのほうが効率がいい。

とりあえずは結界の基点か支点を見つけ、これがどういった類の結界かを解析するくらいしか出来ないか。

この規模の結界が基点一つで支えられるわけもないので、学園を包む上で絶対に支点を置かなければならない場所……つまり、屋上を目指す。

そうして屋上に辿りつけば、結界の基点がどこにあるかは丸わかりだった。

近くにいれば感じ取れるというのもあるが、それを差し引いてもこれは

「誰だよ、こんなモン仕掛けた奴………かなり高度な結界だけど、仕掛け方が下手っつーか甘いつつーか。これを設置したのが遠坂って線はないな」

魔術に於いて凜がこのような不手際を残すはずはない。

この結界を張ったのが凜だったのなら話は早かったのだが、どうやら犯人は別の魔術師らしい。

だがこの学園にいる者の中で、遠坂凜以外の魔術師は間桐桜しか知らない。

しかし普段の立ち居振る舞いを見るに、彼女が高位の術者である可能性はほばない。

間桐がこんなことをするようにも思えないし、何より彼女にとっては何のメリットもないはずだ。

つまりこれは、俺や凜が知らない魔術師の仕業。

1年以上ここに通っているというのに発見できなかったのだ。どうやって潜んでいたのかは知らないが大した物である。

結界のレベルだけで判断するのは早計かもしれないが、これまで発見されなかった事実も含めて、それなりの域にある魔術師だろう。

「Decode , Analyze………Interpret………」

解説

解析

説明

……」

魔術回路を起動し、術式解読・構造解析・構成解明の詠唱節を、魔術刻印から読み込んで起動する。

俺が呪文詠唱、魔術行使をするまでもなく、魔術回路に記録されたそれが俺の意志に従って自動的に発動。

結果得られた情報は、俺が想像していたものよりも数段性質の悪い代物だった。

「結界内に存在する生物を溶解させ、自らの養分として吸収する紅血の封域結界……………」

ソウルイーター  
魂喰らい

信じられない。

一体どこのどいつが、ウチの学園にこんなものを仕掛けたというのか。

それも俺には、多分凜にも無効化することのできないレベルの結界だ。

設置された時点で完全に後手であり、発動された時点で完全に手遅れである。

これを仕掛けた魔術師を探し出し、結界を解かせるか魔術師本人を滅するか。



それ以外にこの結界を無力化させるための手段は俺にはない。

現状で今すぐその魔術師を発見することは不可能だ。

ならば応急措置といえども、邪魔をするぐらいはしなければなら  
ない。

「術式解体Systemdown、支点封印Deepfreeze」

循環する魔力の流れを止め、巡る術式を分壊する。

結界の規則に沿って三つの手順を繰り返し、基点を一時的に閉じ  
る。

完全に破壊、無力化できないことに歯噛みする思いだが、何もし  
ないよりはマシだろう。

「チツ……今はこんなもんか………」

「へえ。何がこんなもんなの？」

「」

瞬間、取った行動は完全に反射だった。

屈んだ体勢から脚に強化の魔術を通し、声がしたのとは逆方向に  
飛び退く。

感じ取れた魔力の波長から声の主が凜であることは窺えたが、言  
葉と共に敵意を向けられては平然とはしていられない。

感知できるほどの魔力が漏れている……つまり魔術回路は起動状  
態。

魔術を発動可能な状態から敵意を向けるということは、戦闘も辞さないという意味表示。

故にこちらにもメインの魔術回路を全て起動し、全ての魔術刻印を奔らせる。

「で。貴方はここで、何をしていたのかしら」

臨戦態勢に入ったこちらを気にすることもなく、凜は刺々しい視線をぶつけてくる。

答え如何では戦うことも辞さないのは理解できるが、すぐさま攻撃行動に移らないところを見ると、彼女もまずは現状の疑問を解きたいのだろう。

「別に……性質の悪い結界が仕掛けられてたもんで、解析と基点封じをな」

「ふうん。私としてはアンタが犯人って考えもあるんだけど」

「結構な短絡思考だな。俺ならこんな仕掛け方はしないし、ここでおまえに見つかるへまもしねえよ」

「実際仕掛けてるし、見つかってるじゃない」

「え？ ああー……………」

確かに今の状況だけを見れば、結界の基点がある場所で凜に見つかったという間抜けを晒しているわけで。

いくら結界の方に集中してたとはいえ、屋上に上がってきたのが一般人だったなら事前に気付いたのだから。

恐らく屋上に魔術師の気配を感じた凜は、気配を消しながら近づいてきた故に察知できなかった。

これで俺が犯人だったなら話は解決だが、現実として俺は結界に一切関与していない。

「そういう考え方でいくなら、おまえが犯人って可能性もあるわけだが」

「は？」

「この基点の状態を見に来たとか、基点閉じられたのを感じて邪魔者を排除にきたとかな」

「そんな理屈があるわけ……………いや、そうか。状況証拠だけじゃ決定打にはならないわけね」

そう。決定的な証拠、俺が犯人たる根拠。それを凜が提示できない限り、この場は何も解決しない。

仮に力ずくで俺を排除したとしても、犯人が別に居た場合それは徒労に終わる。

そして罪無き相手を裁いたという事実は、この先ずっと、魔術師としての遠坂凜について回る。

少なくとも彼女は、魔術師にとってはそんな瑣末な出来事を気に病む性格、性質をしているのだ。

「いいわ。でも、一つだけ確認したいことがある」

「……………なんだ？」

「上着を脱いで、袖を捲って見せて」

「」

その発言に目が点になり、息を飲み、絶句する。

えーっと。ついさっきまで魔術師同士が殺し合いになりかねない、シリアス空気じゃありませんでしたっけ。

コイツは今、何と仰いましたか？

「凜さま、もう一度言っただけですか？」

「上着を脱いで、袖を捲りなさい」

まさか、もしかして聞き間違いじゃないのか。  
いやしかし、まだ勘違いの可能性もある。

今度こそ、三度目の正直だ！

「ごめん。もう一回」

「上着を脱ぐ。袖を捲る」

「h a h ? P a r d o n ? 」

「……………」

二度あることは三度ありましたー。

あまりの衝撃に完全に日本語のイントネーションで英語で聞き返してしまった。

そして何やらプルプルしだした遠坂さん。  
あっ、見事に地雷を踏み抜いたっばいぞ。

「いいから脱げつてのよー!!」

「きゃー!? 痴か……痴女ですのー!!」

「あんたっ……言っに事欠いて……!!」

屋上に響き渡る俺の叫び声。

学園のアイドルに脱がされるといふ、ある意味羨まれる構図かもしれない。が、如何せんこんな季節に裸にされてはたまらない。

仕方なしに上着を脱ぎ、袖を肩まで捲って見せた。

「これで俺が犯人じゃないってわかるのか？」

「そういうわけじゃないけど……まあ一つの目安よ」

腕を持ち上げたり、ペタペタ触ってみたり、一体何がしたいのだろうか。

物凄く丁寧に俺の腕を観察していらっしやるが、本当に何がしたいのか皆目見当がつかない。

ただ腕が見たかったって訳じゃないだろうし。

さっきまでの流れからすると、腕を見ることで間接的に結界に關与しているかどうかを確認できる要素がある？

それとも街が不穏な空気に包まれている事に関して、腕に何らかの特徴がある者と結界が結びつく要因がある？

どれもこれも推察の域を出ないため、確証は何も無い。

「んー……うん、もういいわ」

「そうかい。ご満足頂けたようで何より。で、何かわかったのか？」

「私の中で、とある可能性の一つが潰せたわ。実際それがわかっただけでも収穫なんだけど」

「ふうん……深くは聞かないでおこう。それで、俺が犯人かどうかはどうだ？」

「今のところは白に近いグレー。とりあえずは保留」

腕を見せただけでそこまで信用されたなら、安いモンだろう。

ただ俺が犯人ではないとしたところで、事態が一切解決したわけではない。

今後の方針なんかを決めておきたいところ。

「結界はどうする？ もうすぐ予鈴が鳴る頃だが……」

「そうね、一昨日言ったことを実行しましょうか。あなたが本当に犯人じゃないなら、放課後基点潰しに付き合いなさい」

「ああ、なるほど。俺を利用する云々ね。この結界は俺もどうにかしたいところなんで、そこは異論ないぜ」

「なら、後は放課後にね。ちゃんと残っていなさいよ」

「おう」

俺の返事も聞かぬまま、凜は屋上から去っていった。

とはいっても、俺も教室に向かわなきゃならないので、見送っている場合じゃない。

ただ

凜が俺に背を向けたときにほんの一瞬だけ、凜の傍から別の魔力波長の揺らぎが感じられたことに、俺は違和感を覚えていた。

今日の昼食は生徒会室で摂ることにした。

ここにはいつも通り士郎と一成も居て、他愛ない雑談をしながら昼休みを過ごしている。

ところで、時々障害物を見るような眼を向けてくる一成くんは、一体どういう意図があるのでしょうか？

士郎に向けてるような優しい眼差しを僕にもブリーズ。

「そういえば黒守。今日は少し噂になっていたぞ。あの黒守が、今度は遠坂凜をターゲットにしているようだ、と」

「はあ？ どこ情報だよそれ。てゆうか何だよ、『あの黒守』って」「ああ、俺も聞いたぞ。俺の場合は後藤君からの耳打ちだったけど。黎慈って誰とでも仲良いみたいだし、仕方ないんじゃないか？ 俺もおまえが女の子を遊んでるとまでは思わないけどさ」

何やら愉快的な噂が流れているようである。

今日は授業の合間にも打ち合わせできればと思い、凜を探していた。

直接凜の教室まで出向いたり、所在をクラスメイトに聞いたりしたのだが悉く凜は不在で空振っていた。

恐らく、休み時間の間にも一人で、結界の基点探索、基点封じをしていたのだろう。

けれど俺が遠坂を探していたのを知っているのは、凜の教室で話

を聞いた三枝のみ。

しかし彼女はこんな根も葉もない噂を流して、クスクスと面白がるような悪どい性格ではない。

三枝が話のタネに話を蒔寺と氷室にして、それを盗み聴いていた他の生徒が騒いでいる、というのが真相に一番近いのではないだろうか。

「くだらねえ。今回はそんな色恋に関係ねえよ」

「では、あの女怪に何用だ？ ハッキリ言っておくが、アレと付き合うのは不健全極まりないことだぞ」

「女怪って……………いや、ちよつと遠坂に貸してる物があつてな。今日に返す約束だったんだが、アイツ今日不在が多くてさ。どうしたもんかと途方に暮れていただけだよ」

「ほう。おまえは遠坂と物の貸し借りをするような仲だったのか」

「たまたま、そういうことになったっただけだよ。おまえだってクラスメイトが消しゴムを忘れてきてたら、ちよつと貸すくらいはするだろう？」

「……………なるほど」

どうやら簡単に納得してくれたようである。

しかし士郎の場合は、困っている人間が居る。助けなければいけない、みたいな価値観を持つてゐるからなあ。

「俺は士郎ほど人助け大好き人間でもねえしな」

「む。別に、誰でも彼でも助けるわけじゃないぞ」

急に矛先を向けられた上に、自身を揶揄する言葉を聞いてムツとした顔になる士郎。



「俺が誰かを助けるときは、相手が助けを求めたときだけだ」

「だから、その助ける相手の選別は出来てるのかって言ってんだよ。感謝しない相手、お前を利用しようとする相手、救済を受け入れられない相手。」

世の中にはただ手を差し伸べるだけじゃ救えない相手ってのが山ほどいる。そういう奴は、大概死ななきゃ直らねえ馬鹿ばかりだが

自分に可能な範囲でなら結構だが、自身のキャパシティを超えた領域に入るとそれは事態の悪化になりかねない。

大きなお世話、余計なお節介、有難迷惑……衛宮士郎の人助けとは基本的にそういうものであり、たとえそうであっても、士郎自身が満足しているのだから始末に負えない。

善意に対する礼が悪意でも、好意に対する答えが敵意であっても関係ない。

元より見返りを求めた行動ではなく、士郎にとっては人助けをすることこそが目的であり、その後に発生する諸々に対して己を顧みることはない。

一言で言うと、損な性格なのだ。

「黒守、衛宮の良き性質をそのように悪し様に言うのはよせ。おまえの言いたいことも分からないではないが、それが衛宮という人物だ」

「はあ。ま、そりゃそうなんだが。まあおまえのその性質は長所でもあり短所でもある。そういう風に考えておけよ、士郎」

「一応、忠告として受け取っておくよ。実践できるかは分からないけどな」

「それで構わないさ。どれだけ歪に見えても、それを貫き通せるな

「それはそいつの強さだ」

生き方なんて人それぞれ、そこに口出しするなんて傲慢以外の何物でもない。

けれど士郎のそれは確実に、士郎自身が損をする生き方だ。

俺はこいつを友人だと思っている以上、忠告とか心配ぐらいはさせてもらいたい。

それこそ俺が自分で言った、自身のキャパシティを超えた領域にある問題なのかもしれないが……………

「ところでだ、士郎。おまえ復部は考えねえの？」

「唐突な話題変更だな」

これ以上言ってもキリは無いと考え、話題を変える。

唐突だったのは俺がその話題を思い出したのが唐突だったからである。

つい最近も、弓道部と衛宮士郎の問題を聞かされていたのだ。

「いやー、美綴ちゃんに頼まれたってのもあるけど。自分の得意分野投げ捨てるのは勿体無いんじゃないかと思っただけ」

「それは俺も少し思うところがあるぞ、衛宮。おまえは全国を目指せる腕前があるんだろう？」

「俺だって色々考えた上で退部したんだ。それに全国目指せるって言うのなら、黎慈だってそうだろう」

「俺にとつての剣道は内申書と暇潰しのためなんで、全国とか興味ないんだよ」

「全国に興味が無いのは俺も同じさ」

これだよ。参ったね、ホント。

俺が士郎を説得できない理由にはこの事も含まれている。

同じような状況にありながら、自身がやっていないことを他者に強要出来るはずが無い。

彼を復部に向かわせる持ち札もなければ、彼に影響を及ぼせるほどの人間にもなれていない。

仮にここで俺が全国を目指すといっても、それは士郎の心変わりの一因にはならないだろう。

最初から詰んでいるゲームのようである。

「わかったわかった。俺も言ってみただけだつて」

「……そうか」

「ただ美綴も間桐もおまえのことを気に掛けてるし、今は慎二のこともある。ちよくちよく顔見せに行けよ」

「言われなくてもわかってるさ。慎二に関しては俺がどうすることもできないと思うけど」

今はもう、できることは何もないか。

凜も捕まらないし、後は放課後まで待つしかないかね。

## Prologue ? - 1 (後書き)

帰ってから見た感想が嬉しすぎて頑張ってしまった。

Prologue 1は長くなってしまうので、2からは文章量を気をつけているのですが、どうでしょう？

文章量や改行、行間の調整や読みにくさなどありましたら、ご意見くださいな。

## Prologue ? - 2

「よう、お疲れ」

放課後。

帰宅する者、部活に行く者。

人が減って疎らになったところで、俺は凜と合流した。

先の劳いの言葉は、休み時間にさえ動いていた凜のやる気を評してのことだ。

「成果はあったか？」

「とりあえず1/3くらいは、基点がある場所の目星をつけられたわ」

「そうか。なら早速それを潰しに行くか」

「いいえ、まだ見つかっていない基点を先に探しましょう」

「へ？」

それはどうということだろう。

結界を仕掛けた本人の邪魔をする、結界の発動を遅らせるという目的であれば、先に場所が判明している基点を潰しに行ったほうが効率はいいはずだ。

基点を潰した数だけ結界が発動する可能性は減っていくわけで、基点潰しで時間稼ぎをしながら地道に一つずつ処理していくのが一番だと思うのだが……

「黎慈はアルバイトがあるでしょ？ まだ何処にあるかわからない基点を見つけられれば後は私がやっておくから、貴方はちゃんと仕事に行きなさい」

「……………了解、それは助かる」

「土曜の放課後とは言っても、今はまだ人も多いしね。人氣が無くなる頃合を見て順に処理しておく。処理し切れなかったら、また力を借りるかもしれないけど」

「ああ。俺も基点潰しが終わるまではきっちり手伝うよ」

そうだ。凜のこういうところが、俺が彼女を気に入っている所以だ。

以前は貴方のコトなんて興味ないから知らない、なんて言っておきながら、実際はこうしてこちらのことを理解した上で気を遣ってくれる。

しかも彼女からしてみれば、こんなものは気を遣っているうちに入らない。

事実凜はこちらに気を遣ったつもりはないだろう。何故なら彼女にとって、これは当然の行動であるのだから。

それに利用すると言っておいて、この程度の扱いでは甘すぎる。そこまで言うのなら、もっと俺をコキ使えばいいのと思う。

基点探しは全部俺、もしくは基点潰しは全部俺にやらせるとか。

別に人助け大好きでもないしマゾでもないが、こちらが協力する

と言っている以上、向こうがどういってもりだろうと関係ない。

信頼関係であろうと利害が一致しただけの関係であろうと、出来る限り相手を利用するのは同じはずなのだから。

だからこそ、やはり遠坂凜は良き人間だ。

一成は女怪だなんだと言っていたがそんなことはない。

魔術師同士というしがらみがなければ、本当は普通に人付き合いしたい相手である。

将来彼女を伴侶とする男も、自分がどれほどイイ女に巡り会えたかと思うはずだ。

付き合っていく難易度は高いヤツだが、そこは男の甲斐性で何とかするモンだろう。

……などと俺が遠坂凜の人物評を改めている間にも、彼女は先に進んで行っていた。

「次は何処だ、一成」

「リストによると、放送室の機材の一つが体調不良とのことだ」

「む。精密機械とかだと、安易には触れないぞ」

「そんな重要機器は置いてはいまい。他の物とは勝手が違うかも知れんが、一応診てやってくれ」

「了解。直らなくても怒るなよ」

今日は授業終わりからずっと、一成と一緒に学校の備品修理だ。

昨日はアルバイトを優先してしまったので、今日は生徒会からの頼まれごとを優先しただけではあるが。

生徒会に届いた整備不良な備品をリストアップした紙を眺めながら、俺と一成は校舎内の教室を順々に巡っていた。

廊下を歩きながら、何とはなしに窓から外を眺めた。

「ん？ あれは……」

ふと、校庭の隅に見えた人影に気を取られた。

体操着を着て部活動を行っている生徒が溢れているグラウンドで、遠目に見えるその二人は通常の学生服で明らかに目立っている。

「どうした、衛宮」

「いや、あれって黎慈と遠坂じゃないのかって」

「ふむ。確かに、黒守と遠坂のようだな」

一体何をしているのだろうか。

何かを探しているようにも見えるが、さすがにここからでは何をしているのかはわからない。



昼休みに黎慈が遠坂を探していたという話を聞いたこともあつてか、なぜか無性に二人のことが気になっていた。

「やれやれ。昼には気のないことを言っておきながら、やはり黒守も遠坂狙いであつたか」

「何バ力なこと言ってるんだよ。二人が一緒に居るっただけで、そうと決まつたわけじゃないだろ」

「衛宮こそ何を言っている。普段あれほど男っ気のない遠坂が、男連れで歩いているのだぞ。もはやそうであるとしか思えんだろ」  
「いや、それは……」

ゆつくりと校庭を周っている二人。

談笑も交えながら歩くその姿は、客観的に見ても楽しそうだ。

だからといって二人がそういう関係だと決め付けるのはどうか。黎慈もそんなつもりはないとキツパリ言っていたのだし。

「ふつ、冗談だ。あの二人の仲が良いのは、今に始まつたことではない」

「え？」

それはどういう意味だろう？

俺からしても先ほどの言い分には反論しづらかったのに、自分から冗談だったと言うということは、二人のことについて一成は何か知っているのだろうか。

というか、何故俺は二人のことをこんなに気にしているのか。

「二人は中学からの同級生だ。黒守は一年時の半ばに転入してきたのだがな」

「そっか、一成は遠坂や黎慈と同じ中学だったっけ」

「うむ。奴も当時から社交性のある人間であつたが、何故か遠坂とはよく話していたのを覚えている。というより、元から知り合いだったようだな」

「なるほど。もしかしたら、幼馴染みたいなものなのかもな」

「遠坂はそうでもなさそうだったが。そしてその頃からの印象からして、あの二人が付き合うのはありえん。

もしもその可能性があつたのなら、とうの昔に付き合っていただろう」

「そういえば黎慈は女の子のこととかあまり話したりはしなかったな。慎二は新しい彼女作るたびに逐一言いに來てたけど」

「奴らしいことだ。しかし黒守の交友関係の広さは驚嘆に値するな。衛宮や慎二とも、その頃から付き合いがあつたのだろう？」

「そうだな。出会い方は普通じゃなかったけど」

確かいつものように慎二が持ってきた厄介事に巻き込まれたときだったか。

何かと目立ってしまった俺と慎二は他校の上級生に絡まれていて、それを黎慈がわざわざ止めにくたのが馴れ初めだ。

当時は若気の至りというもので、俺たちも上級生たちも互いに話し合いなんかで止まるような利口さはなかった。

黎慈は最初は言葉で止めに来た割に喧嘩が始まるやいなや、持っていた竹刀をぶん回して鬼のような強さで相手を叩き伏せていた。

正直あの時は味方で良かったと安堵した。

後になって竹刀を使ったことを咎めたが、当人は『武器使ったほうが手っ取り早いし、これなら打撲程度で済む』と言って飄々としていた。

それから何故か慎二と黎慈は意気投合して、次の時からは三人で集まるようになっていた。

色々とも問題もあったが、あの頃は楽しかった。

「どうした衛宮、遠い目をして」

「いやあ……あの頃は三人とも、先のこと考えず無茶してたな」

「今も無茶をしているがな、慎二は。条件付きで衛宮もか」

「はは、そうかもな」

だというのに。

俺たちはいつから、この少し離れた距離を維持するような関係になっちゃったのか。

恐らく。あの日に慎二が変わってしまったときに、何かが崩れてしまったのだろう。

俺と慎二の間で一悶着以上の出来事があったし、黎慈と慎二にも何かしらの揉め事があった。

今でも俺は二人を友人だと思っているが、俺たち三人を結びつけた時、そこに友人関係が残っているのかは定かではない。

「まあ、今となってはどうしようもないか」

在りし日の思い出に浸りながら、一成との備品修理を続けることにした。

## Interlude Out

「なあ、りんりん」

「気持ちの悪い呼び方はやめて。鳥肌が立つでしょ」

「でもこの呼び方可愛くないか？ パンダみたいじゃん」

「アンタ、ふざけたこと言ってる和张つ倒すわよ」

「中国拳法を極めし者、その名もパンダししょ……うばあっ!？」

見事な攪打頂肘ですっ……  
カクダチヨウチュウ

こんな雑談をしながら、仲睦まじく？結界の基点探しを始めては  
や3時間。

こうして愛のあるスキンシップ鉄拳制裁が取られたのも一度や二度ではな  
い。

そうだなあ、10回を越えたあたりからもう数えてないや。

「ちょっと、真面目に探す気あるの？」

「いやいや真面目に探してるでしょうよ。もうほとんどは見つけら  
れたんじゃないか？」

基点の数は正確にはわからないため、結界の規模から推測するし

かないが、最低限の数は探し当てたと思う。

これまでに見つけた基点全てを閉じれば、少なくとも結界の効力はかなり減少する。

せっかく仕掛けた結界の効力が下がったまま発動するとは思えないし、たとえ発動されても対処さえ早く済ませれば事は大きくならないはずだ。

あと数箇所残っていたとしても、それほど問題はないだろう。

「でもねー。邪魔されたことに怒った相手が、ポロッと発動しちゃう可能性だってあるじゃない」

「そりゃないとは言いい切れないが……このレベルの結界を張れる魔術師が、んな短絡的な行動に走るとは思えないけどなあ」

そんな魔術師は三流どころか素人である。

限りなく低い可能性まで見過ごせないのは解るが、それは魔術師として効率的ではない。

ゆえに、これは遠坂凜の完璧主義による弊害だ。

それ以外にも自分の領域で勝手をされたこと、そこで無関係な他者を巻き込むかもしれないことを彼女が嫌っているのも解る。

魔術師としては余分なモノを持っているとも言えるかもしれない。

何とか折り合いをつけて納得してもらいたいが、残念ながら俺のタイムリミットが迫っていた。

「凜。そろそろ制限時間だ」

「え、あ、もうそんな時間になっちゃった？」

実はアルバイトのシフトに間に合う時間から、既に1時間ほど過ぎている。

ちゃんと同僚にメールで遅刻する旨は伝えてある。

中途半端なままで終わらせられないのは、俺も同じだったから。

「そう。じゃあ、今日はここまでね」

「この後もおまえは残るだろ？ 今日中に納得いくところまでいかなかったら、また付き合うよ。明日は昼間のシフトだから、夜からなら空いてる」

「わかった。それじゃあね」

さっと切り上げて、凜と別れる。

凜一人に押し付けることに後ろ髪引かれる思いだが、ここは彼女に任せよう。

「……行っただわね。はあ。助かったって言えば助かってるんだけど」

（面白い男だったな。魔術師としては優れているのかそうでないのか、よくわからなかったが）

「黎慈は優秀よ。傍にはそうは思わせないけど。実際、あなたに氣付いてる節があつたしね」

（それについては同意しよう。探知、感知、異状の知覚に集中していたからかもしれないが、結界の基点だけではなく何度か私にも目を向けていた）

本当に、油断ならない。

古馴染みだからこそあんな大それた確認の仕方をしてしまったけれど、彼がマスターでないことにほんの少しだけ安堵している。

魔術師同士、そこそこに付き合いのある相手だからか、無意識のうちに敵対したくない存在だと、本能的に感じ取っているのか。

どちらにしても、彼は此度の聖杯戦争には関与していない。

令呪もなければその兆しも一切無かつたし、彼がマスターだったなら屋上であんなことはさせないだろう。

黒守黎慈は無関係。それがわかつただけでも、私にとっては僥倖だ。

（しかし愉快的な時間だった。よもや君のあんな一面が見られるとはね）

「うるっさいわね。だから私はあいつが苦手なのよ！」

（そうか？ 君との相性は良さそうだったが）

「……………どういう意味よ」

（君の性質や能力についてこれるという意味だよ。君にとってそういう手合いは、中々貴重なものだろう？）

なるほど、そういうことか。

何においても私とタメを張れる相手なんて、そうそう居るものじ

やない。

昔からの付き合いだし、黎慈の性格もあつて考えたこともなかったが、競争相手としては面白い相手かもしれない。

互いに魔術師として全力で、真正面からぶつかつてみたい。  
ともすれば、彼がマスターでないことを少しだけ惜しくも思う。

（それに君は相手に優位を取られると、ペースを握られるところがある。少なくとも彼にとって、君は相性の良い相手だろう）

人が真面目に考えていれば、一体何を言っているのかコイツは。

服従の令呪が足りなかつただろうか？  
だがこれ以上、大切な令呪を浪費するわけには行かない。

「ふん、言つてなさい。まだ結界の基点を全て見つけたわけじゃないんだから、さっさと続きに戻るわよ！」

（くく。了解、マスター）

笑いを漏らしながら追従するアーチャー。

そんな彼の態度に私はまた小言を呟きながら、まだ行っていない場所へと基点探しに向かった。



「はあ……さつむいなあ。夜中になると冷え込むんだ」

新都でのバイトを終え、帰路に着く。

遅刻の罰としていつも上がる時間には帰してもらえず、閉店時間まで仕事をさせられていた。

トボトボと歩く、その道中。

閑静街方面とは違い、新都はこの時間帯になっても人が減ることは無い。

むしろ夜はこれからだとばかりに、青春只中な若者も仕事帰りの中年も、夜の街へと繰り出している。

道行く人の声、車のエンジン音、店の呼び込み、広告ラジオの大音響。

人々の営みがたてるその騒音を煩わしく思い、路地裏に入りながらいつもは通らない道で帰ることにした。

そうして通りがかったのは

整備されないまま放置されている、荒涼とした公園だった。

明らかに何かが欠如してしまっている、そんな印象を抱く場所。  
この場所には昼の日中にさえ、人が立ち寄ることが無い。

ここで十年前に起きた大火災。

この公園がそうなってしまったのは、その事件が起きたときからだ。

無数の死者と負傷者を出したその事件は、今でもその傷跡を残している。

俺がこの町を知り移住することを決める、きっかけになった事件でもあった。

調べた結果として、霊脈があることも分かって居住には文句の無い土地ではあったが。

そもそもの始まり、最初にこの街に興味を抱いた因果はなんだったのか。

何故か目に止まり、何故か惹かれた。

物事など所詮はそんなものなのかもしれないが、そこに理由を求めるのは悪いことだろうか。

たとえば。

そうすることが、そうなることが。

自分の運命だったなんて、そんなロマン溢れる幻想も

らしくもない感傷、物思いに耽っていたその瞬間。

一瞬にして血の気が引いた。

寒気だとか悪寒だとかそんなレベルではない。

もっと明確な、身の毛のよだつ恐怖を抱かせるような何かが……

……

「そこにいるのは……なんだ？」

すぐ背後の暗闇に、そう呼びかける。

姿は見えない。音は聞こえない。だが確実にそこに何かがいる。まるで茂みから、肉食獣がこちらを狙っているかのような感覚。

明らかに尋常な事態ではない。

身体に備わった魔術回路が自然と開く。

魔術刻印が、主の危機に呼応して起動する。

身体で感じる危機感。意識が軋むような恐怖感。

そして本能的に感じる敵意と殺意が、相手の存在感を嫌というほど知らせてくれる。

硬直したその状態のまま、どれほどの時間が経っただろうか。

数時間にも感じられたその時の中、相手は自ら姿を現した。

黒装束、眼帯拘束具。大蛇を思わせるほどに長い、長すぎる紫髪。獲物の肉を食い決るためにあるであろう、両手に握られた釘のような鉄鎖。

暗闇の中、無骨な衣装など関係なく、それすらも引き立て役に過ぎぬといわぬばかりの美貌の人型。

人の形をした、何か。

そう、何かだ。

アレは決して人間でない。人間の形をしているだけの何かなのだ。

そしてソレが姿を現してからまた、幾許かの時間。

ゆつくりと、動き始める。

両腕を地面につき、前傾姿勢のような状態。

直感だった

知識や経験ではなく、本能が生き残るために教えてくれた事実。

相手のこの体勢は、獣が獲物を狩る臨戦態勢と同一であるという

ことを  
！！

そうして。

黒守黎慈の、長い夜は幕を開けた。

## Prologue ? - 2 (後書き)

今回でPrologueは終了の予定です。次回から本編に入ると  
思います。

ちよくちよく原作キャラ出てきたり、絡んだりしてますがどうでしょう。

あまりにかけ離れていると修正しますが、少しの違和感を目をつぶ  
ってください(涙)

少し展開を急いだ感もあります。テンポよく、もしくは描写に力を  
割いてなど、ご意見ありましたらどうぞ。

それではまた次回。今後もよろしく願います。

## 第一章 舞い降りる運命の夜

それは既に、肉食獣の捕食行為だった。

人型の化け物が暗闇に躍らせる鉄杭を、ただ必死に避け続ける。

自身の肉体強化。拳や関節部の硬化。

身体機動の加速までしてようやく防衛するのがやっとだ。

「ぐツ、はあッ、はあ……ッ」

腕を掠めただけなのに、血が流れ落ちる。

襲われるがまま僅かな抵抗すら出来ていない現状は戦闘などではない。

俺と相手との性能差がありすぎて、戦闘として成立させる事自体が不可能だ。

これと遭遇してから十数分、何もしなかったわけではない。

いくつかの攻性魔術を撃ち込んでみた。

行使可能な属性全て、干渉魔術すら試してみたものの、全てが悉く無為に終わる。

避けられたとか防がれたとか、そういう話じゃない。

この相手には、何故かどんな魔術も届かないのだ。

触れる寸前に全ての魔術が霧消し、こちらはただ魔力を消費した

だけ。

どという原理でそのような現象が起こっているのかは解らないが、今相対しているこの相手には一工程、三小節以下の魔術は無効化される。

となると二節詠唱魔術も無効化されると想定して、三節詠唱から成る儀礼呪法が大魔術の発動が必要になってくるが……………

生憎と事前準備もなしに、そんなものをポンポンと発動することなど出来ない。

威力だけなら魔術特性によって大魔術レベルにも跳ね上がるのだが、それではこの相手には通用しないことがわかっている。

俺の魔術特性は「共振」という珍しいものだ。

通常、魔術回路は魔力を通す擬似神経のことであるが、俺のそれは特殊な構造になっていて、魔力の共振回路として機能する。

一度通した魔力を放出せずに再度循環させ、その流動の中で固有振動を誘発。

回路内で振動する魔力を爆発的に増幅、増大することで、相乗作用を得て魔力を放出。

50の魔力を使用した場合、凡そ200弱の魔力を生み出すことが出来る。

消耗する魔力はそのままに、本来の数倍の魔力を放出することが可能なのだ。

出力の限界はあるため無限に増幅できるわけではないが、俺はこ



の魔術特性のおかげで魔力切れとはほぼ無縁だ。

その共振を利用して威力を引き上げた魔術を相手にぶつけたのだが、通常時の魔術も魔力増幅した魔術も全く効く様子が見られない。<sup>ブースト</sup>

それはつまり、相手がこちらの魔術を無効化している条件は、単純な威力による判定ではないということ。

普通の魔術を大魔術レベルに威力だけを引き上げても、魔術として元々働きかける意味合いが異なるため、魔術を通すことがないのだろう。

「シッ……はあ!!」

場所を変えながら逃げ回る。少しずつだが傷を負い、血が失われていく。

だがそんなことに頓着している余裕はない。流れるものは流れてしまえ。

指先から光弾を放ち、闇の中で光の反射を見つけ、鉄杭の軌道を読みながら回避する。

眼帯をしているせいで眼眩ましも何もなく、どうせ無効化されるならと光弾射出の魔術を乱射した際に、偶然発見した鉄杭の回避方法だ。

この夜闇の中では視認の難しい速度で飛んでくる鉄杭だが、あらかじめ飛んでくる方向が分かっていたれば避けることは容易である。

躲し切れないものは蹴りで攻撃を逸らす。

靴自体に強化を施しているし、靴底に硬化も施しているため、相

手の鉄杭を弾くだけならまだ保つだろう。

一つ注意しなければならぬのは、鉄杭に付随する鎖に足を絡め取られた場合、その時点で決着がついてしまうこと。

決着とは即ち、黒守黎慈の絶命だ。

而して、解せないのは相手の目的である。

俺を殺すことが目的ならば、この化け物はいつでも俺を殺すことができるはずだ。

獲物をいたぶるような真似をせず、鉄杭を飛ばしながら掴みかかるなり格闘を挑んでくるなりすれば、俺は対処し切れずに敗北するだろう。

いたぶることそのものが目的か？

だがもしも狩りに愉悦を見出しているのなら、こんな無機質な表情のまま機械的に行動しているのは不可解すぎる。

分かっているのは自分では敵わない化け物であり、相手がどういうつもりであっても現状での俺の生殺与奪は彼女の手にあるということだ。

「くそ、はあっ、はあっ……………え？」

200手以上は凌いだだろう後、二つの牙が作り出す嵐は止んでいた。

鉄杭が風を切る音、鎖の擦れる鈍い音がなくなり、夜の静寂が場を満たす。

蛇がじつと観察するように、彼女は俺を見つめている。

いや、眼帯をしているので眼は確認できないのだが、確実に彼女は俺のことを見据えていると感じ取れる。

凡そ三十分ぶりに止まることを許された俺は、緊張感と警戒はそのままだに少しずつ呼吸を整えていた。

先ほどからの出血は酷くはないが、放置していい傷でもない。しかし今はまだ、血は流すままにしておく。

またいつ動き出すかわからない。

一挙手一投足を見逃さぬよう、俯瞰で相手を捉える。

数分か、もしくは数十秒だったか。

気付けば鉄杭は手元から消え、そのことに疑問を覚えた瞬間

「がっ!？」

俺は数メートル離れた場所まで蹴り飛ばされていた。

地面を滑りながらその勢いを利用して後ろに飛び起きる。

着地とともに前を見れば、俺を追撃せんと地を駆ける紫の大蛇。

「チイツ!!」

怯むことなく、俺は応戦した。

何故素手での格闘に移行したのかは知らないが、こちらにとっては好都合。

武器もない状態で延々と中距離から痛めつけられるくらいなら殴り合いの方がマシだ。

問題なのは、化け物じみた彼女の脅力だ。  
頭蓋を吹き飛ばしかねない威力、急所にもらえば即行動不能に陥るだろう。

それさえも踏まえて、まだ格闘戦の方が勝機はある。

まがりなりにも、俺は武術を修めてきた人間だ。

どうやら彼女の格闘術は武道ではなく、本能に任せただの暴力。

型もなにもないその攻撃を。

躲し、捌き、いなし、受け流す。

時折打ち込む攻撃に怯みもしない彼女に勝機などまるで見えないが、まだ絶望し諦めるには早すぎる。

逆転の布石は既に打ってある。

最初にして最期の策は、もう少して完成だ。

成功確率がとんでもなく低い一か八かの賭けになるが、ここにいたってはそんな賭けも悪くない。

どうせここを凌げなければ、俺に明日はないのだから。

故に、あとは俺が今の状態で持ちこたえられるか。

残った布石を打ち、策を完成させられるかに掛かっている。

（呼吸も乱さずに余裕かましやがって……）

先ほどから続く攻防も、俺が防戦一方だ。  
それでも鉄杭攻めのときに比べれば戦闘の体裁は保っているほうで、正直遊ばれている感が否めない。

一定のリズムで続く攻撃。

俺がその呼吸に慣れ始めてしまった頃に、彼女の攻撃が急激に速度を上げた。

一瞬無防備になってしまった胴体を見逃さず、蛇がその身を捻転させながら牙のような蹴りを穿つ

！

「う、ぐ！」

刹那の判断。

腹に強化と硬化、対物障壁に耐圧障壁を集中、さらに自ら後ろへ跳ぶことで衝撃を緩和させる。

体勢の立て直しも体軸の制御も出来ず、背中から地面に落ちる。  
腹と背中への痛みも呼吸困難さえも無視して、俺は敵手の存在に気を配る。

「へっ……必殺の一撃が決まって浸ってんのか？」

蹴りを放った体勢からゆっくりと身体を戻し、こちらを見据える。  
相も変わらず余裕の素振りだが、残念ながらこっちの手札は揃ってしまっただよ。

俺は胸内から己が聖遺物、光のアミュレットを取り出した。

「Blood lust《我が血を欲せ》」  
「ッ!？」

奴も今までとは違う詠唱に気付くももう遅い。  
既に発動した呪血の縛鎖に囚われた彼女は、この詠唱が終わるまでは抜け出せない。

血に濡れた手でアミュレットを強く握り締め、黒守の最大魔術…  
…聖遺物を触媒にした概念魔術の詠唱を始める。

「Blood alliance《血の盟約を果たせ》」

この場所には霊脈が走っている。

というより、冬木市自体にいくつかの霊脈が存在しているのだ。

それを知っていたからこそその作戦である。

「know Name wise《其は我が名を識るもの》」

ここに至るまでに流した多量の血液。

公園の中央部を囲むように外円点に六箇所、内円点に六箇所の、  
自身の血で作り上げた魔力溜まりを解放する。

「set grave Origins Name」《ならばその真  
名を世界に刻め》」

六芒星、ヘキサグラムを象る、己が血で描いた魔血方陣。

儀礼呪法など比較にもならない、聖遺物に秘められた概念魔術の  
極大解放。

「Lugh, bestow bless……《陽神よ、汝が光賜  
らば……》」

Lugh, eternal zero……《我その至宝、久遠  
の鎖に繋ぎ止めん……》」

ここで局面を開きなければ、俺にはもう本当に打つ手がない。

黒守に伝わりし600年の秘奥よ

ここに奇跡を起こしてくれ。

おまえが600年もの間、黒守を見守ってきたというのなら。

一度くらい、俺のことだって、助けてくれてもいいだろう？

「Falias Liath Fail《北に運命の石を》、

Findias Claiomh Solais《東に白銀の剣  
を》。

Gorias Ibur Brionac《西に灼熱の槍を》、

Murias Dagda《南に再生の大釜を》」

違う。俺は俺の力で生き抜く。

自分自身の手で奇跡を起こしてみせる。

おまえはその手助けをしてくれりゃあいい。

さあ                      それじゃあ始めようか。

「Tuatha De Danann Mystic Diviner《我が系譜はダーナの御霊を汲む者なり》！！」

詠唱終了と同時に、極光が公園を覆った。

魔術を発動させた俺自身目を開いていられないくらいの強烈な光。



儀式完了によって呪縛が解かれたあいつは、この光に警戒して一気に距離を取った。

「ど、どうなった……？」

秘められた概念を解放する黒守の魔術。  
攻性魔術が発動したか？ 防護魔術が備わったのか？

何であろうと頼むから、俺を救うものであってくれ。

「……………」

光の中心部を睨み続ける大蛇。

徐々に閃光は収まっていき、周囲が淡い灯光に包まれた。

そうして、その光の中から現れたものは。

紫紺の外套を身に纏う、儚げな銀色の少女だった。

「え……？」

俺自身、驚きを隠せない。

感じられる気配からして、彼女はあの紫蛇の人型と同種の存在だ。

概念魔術のはずが、俺は召喚術でも発動したのか？

だが召喚術であれば、自身より下位のモノを呼び出すだけのはずだ。

明らかにアレは、俺の魔術師としてのキャパシティを優に超えた存在だ。

「ねえ、貴方」

「あ、え？」

「貴方、私のマスターかしら」

「え……つと、たぶん……」

「本当に？」

「はい……おそらく……きっと……そう、だといいなあ……なんて」

突然襲われたあたりから蓄積していた混乱がピークに達した。

しどろもどろな受け答えは最早謎であり、少女も要領を得ないといったふうだ。

だってさあ、どうしろっていうの？

「ん、貴方とパスが繋がってる……」

選定されし者の令呪あかしはないみたいだけど、貴方がマスターで間違いないよね

「あれ……ほんとだ」

確かに彼女の言うとおり、俺と彼女との間にラインがある。

ということはつまり、俺たちは何らかの契約関係にあるということ

とだ。

さつきまで俺を襲っていたヤツと彼女は同種の存在だが、彼女からは黒い方とは違い、良くないモノの気配は微塵も感じられない。

契約のこともあるし、状況次第では彼女は自分の味方ではないのか？

「あなたは……セイバーですか？」  
「っ！？」

黒装束の女が喋るのを初めて聞いた衝撃に息が詰まる。  
俺を襲っていたとき印象の声ではなく、見た目通りの静かな声だ。

それに、セイバー？ 聞きなれない単語だ。  
剣？ 騎士？ 銀の少女の正体に関するものだろうか。

「さあ、なんでしょうね」

少女は返答を濁す。  
答えるのは不利益なことなのだろうか。

情報整理、状況整理、色々必要なことがありすぎてついていけない。

「いいでしょう。確認するまでです」  
「あら、お相手してくださるの？」

黒装束の女がどこからか、再びあの鉄杭を取り出す。

得物を取り出し、俺の時には一切感じなかった殺気を向けられているというのに。

少女はいつまでも徒手空拳のまま、涼しげな顔で黒装束の女を見続けている。

埒が明かぬと判断したか、黒装束の女は俺の時の数倍の速度で鉄杭を飛来させた。

第三者の視点から見えているからこそ分かる。

アレは無理だ。

今から武器を構えるのでは遅すぎるし、素手で迎撃できるものでもない。

全てがスローモーションになって見える。

停滞していく時の中で、俺は串刺しになる少女の姿を幻視し、そして

「ッ!？」

「うん？ 今、何かしたかしら」

鉄杭が甲高い音を立てて弾かれる、その音で現実に戻された。

「……………」

黒装束の女の驚きはもつともだ。

傍目に見ていた俺でさえも何が起こったのかわからなかったのだから、攻撃を仕掛けた本人である彼女の困惑は俺よりも上だろう。

少女の手には、銀光。

「何か、持ってる？」

何かを覆い隠すように揺らめく光が、少女の手から伸びている。不可視の武装を持っているのか。ならば先の一撃を防いだのはそれ？

正確なことはわからないが、未だ少女が謎に満ちた存在であることに変わりはなかった。

「その握り方……剣ですか」

「さあね、そこは想像に任せるわ。女は秘密が多いのよ」

「戯言を。ですが新たなサーヴァントが出現したのなら、今夜はここで引きましょ」

黒装束の女が離脱する。かなりの速度で駆けていく。それに追従するように、追撃のためか銀の少女も駆けていった。

「え、ちょ、待てよ！」

公園に敷いていた防音と認識阻害の結界を解く。

こちらとしては尋常じゃないくらい消耗してるんだが、このまま放置というわけにも行かないだろう。

傷口の組織閉鎖と共に治癒魔術を掛け、追いつけるとも思えない彼女らを追いかけることにした。

「ちえ、逃げられちゃったか」

新都から町に入ったところで、少女は黒装束の女を見失った。  
純粋な素の速度で負けているため、距離を離されてから気配を断  
たれたのだ。

マスターも置いてきたし、どうしようかと思考する。

「……」

迎えに行ったほうが良いだろうか。

いやしかし、自分のマスターであるならそれくらいはどうにかし  
てもらわないと。

「……」

そうだ。むしろ迎えに来るぐらいの度量がなくてどうするのだ。

仮にも自分呼び出した魔術師なのだから、泣き言なんて聞きま  
せん。

「……………」

そうだなー、散歩でもしようかなー。

現代の情報は刷り込まれてるし、いくつか不思議な点はあるけど、それは今のところは保留ということだ。

よし、そうと決まればその辺からぶらぶらと

「ぜえ……待ち、たまえよ……ぜえ……」

「ひゃあ!？」

後ろから肩を鷲掴みにする。

かなり前から居たのだが、息切れが激しくて声を出せなかったのだ。

少女は本当に気付いていなかったようで、可愛い声を上げていた。

「あ、マスター。いたの?」

「いたの、じゃねえよ……仮にも、契約関係なら……その契約相手を、置いていく、んじゃねえよ………」  
「だって……」

よしだいぶ息も整ってきた。

「ところで……マスターを置いて、どこに散歩に行こうというのかね?」

「え?」

先ほどまで内心で考えていたであろうことを、ズバッと指摘して

やる。

不満そうな顔つきだったのが、見る間に気まずそうな表情に変わる。

「あの、なんで知ってるの？」

「ラインから精神感応でダダ漏れでしたが、何か？」

追跡のためにラインから少女側に感知やら干渉やら仕掛けてたんだが、想像以上に面白いことになっていた。

登場シーンからの雰囲気とは違い、意外と中身にギャップがあるこの少女。

黒装束の女のやり取りと、少女の心の中から漏れていた情報を繋ぎ合わせて何とか現状理解に務める。

サーヴァント。

人間以上の存在で、自分の魔術師のキャパシティすら越えた存在。この少女も、俺を襲った黒装束の女も、そのサーヴァントというモノらしい。

サーヴァントにはマスターとなる魔術師が居て、となるとあの黒装束の女はどこかの魔術師からの刺客だったのだろうか？

セイバーという言葉に関しても、あれは幾人が居るサーヴァントに与えられる名のようなものらしい。

あの黒いサーヴァントにも銀の少女にも、そうした呼び名があるのだろう。



などと人が全力疾走しながら、一生懸命に状況把握に努めていたというのに！

「個人的には肩ではなく、そこから下の豊かな膨らみを驚掴みにしてやつても良かったんだがね。

そこはそれ、仏のような懐の広さで許してやろつともさ」

「は、はい」

「ただし三度目までだからな！」

ここまで走らされた怨念を込めて言い放つ。

正直まだまだ謎は多い。

こんなことを言いつつも少女がその気になれば俺を殺せるだろうし、何故格下の存在である自分に従う意思を見せるのか？

サーヴァントとは何なのか、何のために呼び出されているのか。襲ってきたサーヴァント、マスターとなる魔術師の存在、ここ最近街を包んでいた不穏な空気、学園に仕掛けられた結果。

全ての答えを得られるかは分からないが、この少女から情報を引き出せるだけ引き出しておかないと、また今夜のような無様を晒す気がしてならない。

「なあ、あんた……」

「ん、マスター。ここから少し離れた場所にサーヴァントがいるわ」

「あ、え？ はあ！？ まだあんな化けモンがいるってのか！？」

「気配は二つ……三つ？ 何だか揺らいでる。マスターもそこに二人居るね」

「気配三つって……嘘だろ……」

これで合計五人か？

まだ増えそうな気はするが、今はとりあえずどうするかを決めなくては。

俺に報告したということは、そこに行けということだろう。

最低でもその場所に赴いて様子を見るくらいはしないとまらないか。

逃げるのは簡単だ。けれどそれでは何も解決しない。

少女は今は敵ではなく、俺と離れるつもりもないらしい。

ならこの子から情報を聞き出すのはまた後でもいいだろう。

先にサーヴァントが居るという場所に行って、可能な限りの情報収集を行うのが最善だ。

俺も魔術による知覚領域を広げて、その場所を確認する。

「ふう      あ、れ？      これって凜の気配か？」

全てのサーヴァントとマスターが一箇所に居るわけではないようだが、かなり近い場所に集まってきている。

その中の一つに、よく見知った気配を感じ取れたのだ。

「こりゃ、行くしかないか」

「そう、腑抜けたマスターじゃなくて嬉しいわ。それじゃあ、行き

ましようか  
「

この長い夜は、まだ幕を下ろすことはない。

そして。

「ほんつとどついつととよー」

「俺にそう言われてもなあ」

「あの、二人とも……お茶でも出そうか？」

三人のマスターと三騎のサーヴァントが、運命の夜に邂逅する。

## 第一章 舞い降りる運命の夜（後書き）

本編突入しました！。

書き溜めとネタ帳が薄くなってきたので、ここから少し更新遅めになるかもしれませんが。

詠唱に関してはルビが触れなかった、でも意味を伝えたい。

ということでも《》で括りました。英語だけ、日本語だけでいいなどのご意見ありましたらどうぞ。

ネットの翻訳などは使わず（笑）自分のセンスだけで詠唱作りしましたよ。うん。

みなさん、感想ありがとうございます。

感想が作者の生きる糧となります。

それではまた次回、お会いしましょう。

## 第二章 マスターとサーヴァント、そして聖杯戦争

魔術師の気配を感知した場所。

赴いてみればそこには士郎と凜、蒼と赤のサーヴァントが存在した。

三つあったはずのサーヴァントの気配。

内の一つは俺たちがここに辿り着く少し前に、急速離脱したらしい。

戦闘の気配はなかったので近づいてみたのだが、やはり向こうもこちらには気付いたらしく、仕方なく姿を見せるハメに。

その後、数分。

何が何だかわからないといった顔の士郎。  
士郎が魔術師だったという事実に驚く俺。  
俺たちをジト目で睨み続ける遠坂凜さん。

正直、困惑どころじゃない。

そんな俺たちの傍でも、同じような状況が続いていた。

「……………」

「……………」

「……………」

蒼碧、赤銅、紫紺をイメージさせる格好をしたサーヴァントたち。

己のマスターを守るように互いへ警戒する。

こちらに関しては知り合いでもなければ敵対関係にあるようなので、自発的な事態の解決は望めない。

解決するとしたら、戦闘が始まる前提だ。

傍目からすれば異様な三つ巴状態。

俺は事情もよく知らないため、下手なことを口走れない。

「衛宮くんが魔術師だったのには驚いたけど……貴方がマスターだったことのほうが驚きよ」

「え？ いや、俺としては不本意な契約だったといつかなんというか……」

でも契約できなきゃさつき死んでたんだけども。

未だに概念解放の魔術が召喚になったことは理解不能のままだ。

「望んだクラスじゃなかったってこと？ いえ、それより昼間のアレは演技？ 令呪もどうやって隠してたのかしら？」

「いや、結界は俺が仕掛けたものじゃないし、令呪なんてものも知らないぞ」

「とぼける気？」

「お、おい、遠坂……」

「衛宮くんは今黙ってて！」

「あ、はい……」

黙らされる士郎。

いかん、凜と致命的なまでに話が噛み合わない。

このままでは勘違いが勘違いを呼ぶ壮大なスペクタクルが始まってしまう。

信じてもらえるかはわからんが、素直に事情がわかりませんといったほうがいいだろうか？

この普通じゃない状況で、自身の不利を明確に話すことには抵抗がある。

無知を晒せば利用されるのが世の常であり、更に言えば相手は魔術師だ。

故にここは、ただ相手を信じられるかということに尽きる。

魔術師の遠坂凜。人としての遠坂凜。

相手が遠坂凜であるならば、俺の答えは明確だった。

「凜。俺は今ここで何が起きているのか、よく解っていない」「は？」

「これまでに俺が知り得た情報は、サーヴァントの存在、サーヴァントと契約する魔術師<sup>マスター</sup>の存在。

この町で何かが起こっている、もしくは起きようとしている。それくらいだ」

「それを、信じろとも？」

「……ちよつと、いいかしら？」

平行線を辿る俺と凜の話に、銀の少女が割って入る。

二人のサーヴァントに対する警戒はそのままに、目線だけをこちらに向ける。



まさかの助け舟である。

「マスターが言っていることは本当よ。私は私自身の役割を理解しているけど、彼は何故私が、私達が呼ばれたのかわかっていない」

「聖杯戦争を知っていて、自主的に参加したわけじゃないってこと？」

「ええ、召喚された経緯から考えてもそう。そして彼は令呪も持っていない。現に今の私は契約関係にはあっても、令呪に縛られてはいないもの」

「え……！？」

驚愕は何に対してか。

彼女が言い放ったことに対して驚いたのは凜だけでなく、二人のサーヴァントもだ。

全体の反応を見るに、現状では俺と士郎だけが置いてけぼりを食らっているらしい。

「黎慈。貴方、令呪がないって本当なの？」

「いや、だからそもそも令呪が何なのか知らなくてだな……」  
「これ」

凜が袖を少したくし上げ、手の甲をこちらに見せる。  
そこには薄ぼんやりと、赤い刻印が光を湛えていた。

合計して三画の魔術刻印。

「衛宮くん、貴方も令呪はあるでしょう。出して見せて」

「え？」

突然話を振られた士郎が、思わず両手を確認する。  
左手の甲に、剣を模したような刻印が光っていた。

なるほど。その令呪が何かしらの証になっているわけか。

先ほどの令呪に縛られるという言葉から推測すると、あれは魔術師がサーヴァントを律するためのもので、そのままマスターの証であるのだろう。

ああ、ようやく頭が回ってきた。

「これが令呪。聖杯戦争に参加したマスターに与えられる、サーヴァントに対する絶対命令権」

「ふむ。凜の刻印の一画が光っていないのは、何か意味があるのか？」

「それは………いいわ、何かもう腹立ってきたし。アーチャー、しばらく霊体になっててもらえる？」

「それは構わないが。君はどういうつもりなのかね」

「この何もわかってないバカ二人に、現状を思い知らせてあげるのよ。それまで貴方の出番はないから消えていて。いつまでも膠着状態でにらめっこしても仕方ないでしょ」

「それはそうだが……難儀なものだな。一つ忠告すると、君は余分なことをしようとしているぞ」

それだけ言うと、アーチャーと呼ばれた男は陽炎のように消え去った。

今ので少しだが理解した。

サーヴァントはそういう存在なのか。

マスターの命令を聞いて霊体化したのは、この場合は指示に従い武器を収めるという意味表示。

となると、凜との交渉の余地が生まれたのに、俺のサーヴァントらしい彼女に武器を持たせたままではダメだろう。

「なあ銀髪っ子。おまえも霊体になれるのか？」

「ええ、出来るわよ」

「なら霊体になっていてくれないか。凜が話を聞いてくれる気になったみたいだし、このままだと埒が明かないだろ」

「そうねえ……」

少し思案する素振りを見せ、ふと蒼の少女を見やる。

「ねえ。あなたも一時休戦ってことでいいの？」

「なに？」

「お互いマスターが知識不足で困っているみたいだし、ここはその魔術師に話を聞かせてもらったほうがいいでしょう？」

「セイバー、俺からも頼む。ここは退いてくれないか」

「……あなた方がどういふつもりかは知りませんが、私のマスターに危害を加えない間は剣を納めましょう」

セイバーと呼ばれた少女は、武装していた何がしかの武器を納める。

それを見てこちらのサーヴァントも、持っていた何かを消したようだ。

とりあえずは、状況が前に進みつつあることに安堵した。

「……………いや、早く霊体化しろよ」

ようやく話が出来そうな空気なのに、霊体化してくれない彼女に目を向ける。

「え、だってセイバーも武器は納めても、実体化したままじゃない。私もマスターの万事に備えて、一応傍に控えてるわ」

「……とのことなんだが、それでもいいか？」

凜、士郎、セイバーの順に、窺うように目を向ける。

セイバーは元より反論できる立場でもないからか、無言で士郎の意に従う姿勢を見せている。

「いいわよ、別に。セイバーもそうみたいだし、アーチャーだって別に霊体化しただけで傍に控えてるもの」

「ああ、俺も構わない。というか、俺も今の状況が良く解ってな…」

「…ちょ、遠坂どこ行くんだ!？」

「こんなところで話しててもしょうがないでしょ。無知なあなたたちに現状を叩き込んであげるから、早く中に入りましょ」

すぐそこにある武家屋敷の門へと歩を進める凜。

反応からすると、そこが士郎の家なのか。

初めて士郎の家を見たが、中々いい処に住んでいる。

しかし人の家にズカズカと入っていけるあたり、凜の神経の太さを物語っている。

「ほら士郎、中に入ろうや。戸惑うのも解るが、時には素直に事態を受け入れないと寿命を縮めるぞ」

「う           それはそうだけど」

「今夜はお互い大変だったみたいだが、ようやく一息つけるんだ。説明してくれるってんだから、ありがたくご拝聴しようぜ」

「……そうだな」

ほう。存外に状況適応は早いな。

俺にしても、これが今の状況を知る唯一の機会になるかもしれない。

何やら魔術師同士の厄介ごとに巻き込まれてる、というか首突っ込んじまったみたいだが、魔術師であるなら疾うに覚悟は出来ていよう。

先頭に凜、続く俺と士郎。そしてその後ろには金髪少女と銀髪少女。

何か異次元に迷い込んだような様相を呈しているが、五人連れ立って居間に入る。

士郎は考え込む仕草を見せたり、後ろのセイバーを覗き見たりと挙動不審だが、これは彼なりに状況を飲み込もうと必死なのだろう。

そして電気をつけながら、居間に入った瞬間

「うわ寒っ！　なによ、窓ガラス全壊してるじゃない」

「うお寒ッ！　なんだよ、窓ガラスぶっ壊れてんじゃん」

見事に凜と反応が被りました。

お互い顔を見合わせ、微妙な表情をしている。

にらめっこしている俺たちを見かねた……わけでもないだろうが、士郎がポツポツと話し出す。

「仕方ないだろ、ランサーってヤツに襲われたんだ。形振りかまっていられなかったんだよ」

「あ、そういうこと。じゃあセイバーを呼び出すまで、一人でアイツとやりあったの？」

「やりあってなんかない。ただ一方的にやられただけだ」

無言で士郎に手を差し出す俺。

今夜全く同じような目に遭っている友を見つけたが故の握手だった。

訳もわからないだろうに、士郎はおずおずと手を握り返してくれた。

なんだろう、この複雑な感情。

凜はといえば、士郎の反応を嬉しそうに見ながら、窓ガラスの方へと近寄っていく。

恐らく、このままでは屋内に入った意味がないので、ガラスの修

復をするのだろう。

俺も昔、硝子の扱いはやらされたことがある。  
と言っても、硝子は魔力が通りやすいので、扱うことは簡単だ。

「M i n i t u n v o r S c h w e i e n」

ザラザラと擦れる音をたてながら、窓ガラスは数秒掛からず元通り。

この程度の魔術、彼女にとっては呼吸をするに等しいだろう。

いや。凜に限らず、魔術師にとってコレは初級テストみたいなものの。

だからこそ、続いて出た土郎の発言は俺からすればドン引きだった。

「すごいぞ遠坂。俺はそんな事できないからな。直してくれて感謝してる」

「……ちょっと待って。じゃあなに、衛宮くんは自分の工房の管理も出来ない半人前ってこと？」

「……？ いや、工房なんて持ってないぞ俺」

「は？ オイ待て土郎。おまえまさか五大元素の扱いとかパスの作り方を知らないとか言わないよな。な？」

「五大元素とパスがなんなのかは知ってるけど、扱うとか作るとかは出来ないかな」

「」

俺、絶句。

言いたくはないがあえて言おう。

コイツ、マジか。

「なに。じゃあ貴方、素人？」

「そんなことないぞ。一応、強化の魔術ぐらいは使える」

素直すぎる回答に思わず涙が出そうになる……が。

「わかった。わかったからそれ以上墓穴掘る前にやめるんだ士郎」

「え？」

「……………」

「あ」

ようやく気付いたのだろう。

遠坂凜が衛宮士郎を見る目の冷たさに。

別段見下しているということではなく、呆れ返り果てたという意味で。

「　　はあ。なんだってこんなヤツにセイバーが呼び出されるのよ、まったく」

「む」

不満そうに口を噤む。

そりゃ士郎だって今まで遊んできたわけじゃないだろうし、魔術師として凄く、ものすごく未熟だとしても、それとこれとは話が別だ。

とは言っても、魔術師人生エリートコースまっしぐらな凜からす



れば、珍生物でも見たような心境だろう。

「あ、はい質問。そのセイバーとかアーチャーとかって、サーヴァントの名称……なのか？」

「そうね。そのあたりも踏まえて話しましょうか」

凜が腰を下ろす。

そうしてやっと始まる状況説明。

ここまで来るのに紆余曲折、山あり谷ありだったが、ようやく今自身が置かれている状態を把握できる。

「まず。貴方たち、自分がどんな立場にあるかわかってないでしょ」

「「」

コクン、と同時に頷く。

「率直に言うと、貴方たちはマスターに選ばれたの。衛宮くんは左手に聖痕があるでしょ。黎慈にはないみたいだけど、一応はそれがマスターである証」

「マスターの証がないんだったら、俺がマスターだって証明できないんじゃないのか？」

「普通はそうね。でも貴方のサーヴァントが貴方をマスターとみなしているなら、貴方はマスターであるはずよ。」

「……そうか、聞いておかなきゃね。黎慈、貴方のサーヴァントはいつ召喚した何のクラスのサーヴァント？」

「え、っと……ついさっき召喚した、謎のサーヴァントです」

「何ですって？」

うわ怖っ。

いや、だってロクに会話してねえし情報交換してねえし、そういや名前さえ聞いてねえよ。

この銀の少女について解ってることと言えば、俺と契約関係にあつて、不可視の武装（たぶん剣？）を持ってる、てことぐらいだ。

ああ、本人に聞けば早いんじゃないのか？

「なあ、おまえ何のクラス？」

「さあね。セイバーでもアーチャーでもランサーでも、好きに呼んでくれて構わないわ」

「いや、その三人は既にいるらしいんで……………わかった。仮にフエンサー、つてことにしよう」

「違うわ黎慈、問題はそこじゃない。この聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントは七騎のはずなの」

「はい？」

今巻き込まれてるらしい聖杯戦争。

魔術師が聖杯を求めて殺し合う儀式。俺と士郎はそれに巻き込まれたらしい。

その戦争とやらに召喚されるサーヴァントは七騎。ならば必然的にマスターも七人。

ここで凜がその呼び出される最大数を告げたということは、俺のサーヴァントは八騎目に該当するということか。

「私は貴方が初期の段階で既に召喚してたものだと思ってたんだけど……………なるほど、だからあなたには令呪がないのね」

「令呪もきっかり七人分しかないってことか？」

「ええ、そうよ。聖杯戦争に選ばれるマスターは七人、その七人にはマスターの証として聖痕が現れ、七騎のサーヴァントが召喚される。一度の聖杯戦争に現れる令呪は計二十一画。三画ずつがそれぞれマスターに割り振られ、サーヴァントを律することが出来る」  
「待てよ遠坂。黎慈に令呪はないしマスターでもないとしても、ここに八騎目のサーヴァントがいるのは事実だぞ」

そう、どうあってもその事実は覆らない。

サーヴァントが聖杯戦争によって呼び出されるモノなのだしたら、彼女　フェンサーは間違いなく聖杯戦争に関係している。

加えて、俺をマスターと認識し、実際に俺たちの間にはパスが形成されている。

二人が契約関係にあることは明確で、ならばサーヴァントに主人と認識されている俺は、必然的にマスターであることになってしま

う。

正に逆説的証明、鵜が先か卵が先かという状態だ。

「確かに聖杯戦争には例外がある。定められたクラスが毎回ちゃんと呼び出されるわけでもないし、魔術師でないものがマスターになったりもする……………」

それでも原則のルールとして、八騎目のサーヴァントが存在したなんて例は過去に一度もない」

「過去に一度もないからって起きないわけじゃないかもしれないだろ？　俺のが初めての例だって可能性もある」

「そんな簡単な話じゃないわ。サーヴァントは聖杯が与えてくれるもの。英霊を呼び出すまでがマスターの役割で、後の実体化やらは聖杯がやってくれる。」

つまりマスターを選ぶのが聖杯なら、サーヴァントを選ぶのも聖

杯よ。なら、そんな不手際があるはずもない」

「うーん……………セイバーはどう思う？」

考えが行き詰まったためか、いきなりセイバーに話題を振る士郎。

突然意見を求められた蒼の少女は、少し俯きながら思索し言葉を紡ぐ。

「私の召喚は正規の手順で行われなかった。シロウには私を実体化させる魔力もないため霊体になることができず、また魔力の回復も難しい状況です。」

私とシロウの契約に不備が不具合が生じた可能性も考えられます」  
「……驚いた。そこまで酷い状況だったこともだけど、貴方がそんな不利なことを正直に話してくれるとも思わなかった」

「私の状態を貴方に伝えることで、シロウには現状を深く理解してもらったほうがいい。それに八騎目のサーヴァントの存在について、原因を究明する手がかりになるのならよいでしょう」

「おい、フェンサーの意見は？」

お喋りなイメージがあっただが、必要がなければだんまりのフェンサー。

俺が聞かなければずっと黙ったままδειそうだったので、意見を求めることにした。

「そうね……………私のほうも正規の召喚方法ではなかったみたいだけど、セイバーのような不都合はないわ。」

時間的に私とセイバーが召喚されたのはほぼ同時みたいだったけど、そのあたりでなにか不具合が起きたんじゃないかしら」

「ふうむ……………正規手順ではない召喚で二体同時に呼び出されたから、二体とも実体化させちゃいました、みたいなの？」

「聖杯ってそんな適当な代物なのか？」

「あゝもうっ、埒が明かない！ あんたたち、いくわよ！」

突如立ち上がったかと思うと、出発進行宣言をする凜。

聖杯とかマスターとかサーヴァントとか、俺と士郎は凜に比べて理解度に差があるのだからそんな簡単に諦めてもらっても困るのだが……………

というか、こんな真夜中に一体どこへ行こうというのか？

「聖杯戦争をよく知ってるヤツに会いに行くのよ。聖杯戦争がなんなのか、その理由も教えてくれるし、今回の八騎目のサーヴァントについても何かわかるかもしれない」

「知りたいのは山々だけど、何処だよそれ。こんな時間なんだし、あんまり遅いのは」

「大丈夫、隣町だから急げば夜明けまでには帰ってこられるわよ」

「いや、そういう問題じゃなくて」

「なに、行かないの？ …… まあ衛宮くんがそう言うんならいいけど、セイバーは？」

隣町ということは、まさか言峰教会か？

聖杯がああ聖杯だしたら聖堂教会が関わってくるのは当然だろうし、魔術協会にも片足突っ込んでるあの神父さんならありえる。初めて会ったのはこの地に移住するときに凜の後見人として手続きを取ってもらった時だが、それを含めても数回程度しか面識はない。

ここ数年は教会に行く用事なんてなかったしな。

「シロウ、私は彼女に賛成です。貴方はマスターとしての知識がなさすぎる。貴方と契約したサーヴァントとして、シロウには強くなってもらわねば困ります」

士郎は凜とセイバーに言い包められている。

まあ元々行かないという選択肢はなかったが、何やら俺にとっても耳の痛い言葉が聞こえてきた。

思うところはセイバーと同じなのか、フェンサーは半眼で俺を見つめている。

「わかったわかった。ほら士郎、グダグダ言っても仕方ねえんだ。行くならさっさと行って帰って来ようぜ」

「……そうだな。わかった、案内してくれ、遠坂」

隣町まで一時間、教会までで約一時間強か。

何事もなければ三時間ほどで帰ってこれるが……さて、どうなることやら。

## 第二章 マスターとサーヴァント、そして聖杯戦争（後書き）

一つの章に書く文章量が多くなってしまったので、切り上げて早めに投稿しました。

教会から帰るところまでは書こうと思っていたのですが。

今回は説明回ということで、地の文少な目、凜喋りすぎな回になるかな？

通常時や戦闘時は普通に戻ると思いますので、今回は多めに見てくださいm(\_\_\_\_\_)m

元々もう少し先まで書く予定だったので、自分的に中身が少し薄くなってしまった感があるので、後々に加筆修正も視野に入れていきます。

### 第三章 手にする資格・イレギュラー・

冬木の町から橋を渡った先の隣町。

新都方面に属するこちら側は、一見オフィス街や立ち並ぶビル群などの開発が進む都会のイメージがある。

だが、主要駅各線から外れてみれば、昔ながらの閑静な街並みが残っている。

郊外などその最たるものだ。

なだらかに続く坂、海を望む高台、教会へ続く丘の斜面途中には外人墓地がある。

そんな街並みを眺めながら高台を登りきれば、そこには整えられた花壇が左右を敷き詰める広場、そしてその奥に目的地である教会が聳えていた。

今は先に、士郎と凜が教会の中に居る。

あれだけ士郎にくつついていたセイバーは外で待機していた。

その理由には何となく察しがつくので、俺としては士郎が選択を誤らないことを祈るのみ。

恐らく士郎は聖杯戦争について、そしてそれが行われる理由、参加する際に戦うための覚悟を己に問うため、など色々と思惑があるだろう。

俺が共に教会へ入らなかったのは、一度に押しかけても仕方ないだろうということと、俺と士郎の最終目的が違うからだ。

聖杯戦争について、俺は参加する前提でここに来ている。



聖杯が本当に世に伝わる聖杯であるなら手に入れない理由はない。しかしたとえソレが偽者であつても別段構わなかった。

俺は　優れた魔術師同士の争いというものに、いたく高揚感を覚えていた。

今まで魔術師としての覚悟が鈍ったことはない。されど、人としての生活に慣れ親しんでいた俺には、まだ魔術師としての完成度が足りていなかったのだろう。

切った張ったのやんちゃはしてきたが、これまで命のやり取りをしたことはない。

魔術師の世界は殺伐としたもの。それは曾祖父さんから言い聞かされていたし、殺し合いというものを知識の上では知っていた。命のやり取りをするということに特別な価値観を見出せなかった。だからこそ、それが日常となる魔術社会に俺は辟易していた。

それは俺が、本当の戦いを経験したことがなかったから。  
今夜、あの黒いサーヴァントに襲われた時に　それを理解してしまった。

剣道だのなんだのと、そんなスポーツでは味わえないあの高揚感。今まで自分と並ぶ者がいなかったが故に、己の生に充実感を感じられないという、一種の感覚麻痺。

磨き、鍛え、競い合い、高め合い、自分と互角以上の相手と自らの矜持を賭けて戦うということの意味を。

ああ、何故もつと早く気付かなかったのか。  
殺し合いに狂しているわけではない。ただ魔術師同士での争いは、ほぼ終わりが相手の死でしかないというだけ。

普通と何が違うかといえば、その戦いの結果が自らの死だとしても厭わないというだけ。

全力を尽くせる戦いであればそれでよし、それが命を賭けるほどの相手であればそれ以上のことはない。

「……フェンサー」

「なあに？」

「俺はおまえのマスターとして相応しいか？」

フェンサーへの問いは同時に、自己に対する問いでもあった。

聖杯戦争に参加するマスターは、各々の理由と覚悟を胸に秘めているはずだ。

凜とて聖杯が欲しくてこの戦いに身を投じるわけではないだろう。ならばそれとは別に、命を賭けて戦うに値する何かを持っているのだ。

そしてそれは、他6人のマスターも同じこと。

ならば俺の聖杯戦争に参加する理由……ただ戦いたいからという手段と目的が入れ替わったような動機が、不純なものに思えてならなかった。

先ほどまでの俺の考えも、ラインを通じてある程度伝わっているだろう。

ならばこそ、自分のパートナーとなる少女に己の価値を問いたいと思ったのだ。

「……マスターがね、どういふつもりで私をフェンサーと呼ぶこと

にしたのかはわからないけれど」

「?」

フェンサー マスター フェンサー

「戦士の主人が戦う者であることは、そんなにおかしなことかしら」

「……………そうか」

その答えで、胸の内にある靄が晴れた。

彼女をフェンサーと呼ぶことにしたのは、クラスが分からないだとか象徴となる武器が分からない等といった理由ではなく。

彼女にとって、自身に誇りを預ける対象が剣や弓や槍などの武器ではなく、自身の戦う意志そのものにあると感じ取れたから。

「サーヴァントっていうのはね。触媒の関係もあるけど、大抵は相性の問題から似たもの同士が呼ばれるものなの」

「呼び出されたサーヴァントが相性劣悪な相手じゃ、聖杯戦争では不利になるからか」

「ええ。ランダムで呼び出すよりは、自身と相性の好い相手を引き当てられるよう、最初にこのシステムを組んだ者がそうしたんでしょね。」

そうすれば少なくとも、自分が不利になる状況は確実に避けられる。効率の問題……魔術師が考えそうなことよね」

つまり、俺とフェンサーの相性自体はそんなに悪いものではないということか。

本来なら令呪がない時点でマスター失格と思われるそうなのだが、それでも彼女は俺をマスターと認識してくれている。

この現世に留まるための媒体というだけでなく、俺に呼び出されたことには意味があるし、マスターが俺であることにも理由がある。

ただそれが、俺たちの与り知らぬモノであるというだけで。

「それにね。私とマスターの関係はまだ始まってもない。ここで正式にマスターだと認められたのなら、ようやく私たちの聖杯戦争が始まるのよ」

「ああ……そのスタートラインに立つ為に、ここに来たんだ」

そうして幾らかの時間が過ぎた頃。

教会の扉を開き、士郎が戻ってきた。

「よう。どうだった、士郎？」

本当は聞くまでもないことだった。

教会から出てきた士郎の目は、別人のようにその色を変えていた。

間違いなく、あれは何かを決意し覚悟した人間の目だ。

「ああ。事情はイヤっていうほど理解したよ。聖杯戦争についてもマスターについても」

「シロウ」

「……セイバー」

身をずい、と乗り出してセイバーが士郎の前に立つ。

当然だろう。サーヴァントである彼女からすれば、士郎がどういふ決断をしたかは他人事ではないのだから。

だが心配することはないだろう。

仮にも魔術師であるのなら、その判断を間違うことはないはずだ。

「マスターとして、聖杯戦争を戦うことにしたよ。半人前な男で悪いんだけど、俺がマスターって事で納得してくれるか、セイバー」

「納得するも何もありません。貴方は初めから私のマスターです。この身は、貴方の剣となると誓ったではないですか」

なんか割り込めない空気です。

あーあ、握手なんかしちゃってるよ、この人ら。

こつちが気を使うまでもなく、彼らには彼らの信頼関係が築かれているのだろう。

戦うことになれば敵同士、過度の感情移入は禁物だ。

「士郎。今度は俺たちが中に入るが、おまえらはどうする。用は済んだんだから、先に帰っててもいいが」

「え……そうだな……黎慈が出てくるのを待つよ。ここまで一緒に来て一人で帰るわけにもいかないだろ。あ、遠坂は中で待ってるぞ」

慌てて握手を解きながら取り繕う。

我に返って恥ずかしがることなら初めからしなければいいものを。

溜息をつきながら背を向ける。

「まあ邪魔はしないから、好きなだけ親交を温めてくれ。次はハグか？」

「う、うるさいっ！ さつさと行けよ！」

照れて顔を真っ赤にしている士郎を後ろに、フェンサーを引き連れて教会へと向かう。

セイバーと違ってフェンサーを連れて行くのは、八騎目のサーヴァントの存在証明のためだ。

聖杯戦争に関わることでなく、あの神父さんに会うことに少し緊張しながら、俺は教会の扉を開いた。

「ようこそ、黒守の。こうして会うのは何年ぶりだったかな」

「土地契約の更新以来だから、3年ぶりくらいじゃないですか」

俺は、神父さん 言峰綺礼に出会った瞬間に、僅かに鳥肌が立った。

どんな人物ともそれなりのコミュニケーションを取る自信がある俺だが、この人だけにだけは苦手意識がある。

それは彼を嫌っているだとか、人格に問題があるだとか、生理的に受け付けないなんて空想じみた話でもない。

人にはそもそも備わっている性さがというモノがあると思うが、俺は

この人のそういう性質を苦手としているだけ。

長く話しているととにかく懺悔でもしているような心持ちにさせられ、時には思い出したくもない過去を思い出させられたりする。

「君には、聖杯戦争についての説明は不要かな？」

「ああ、おおよそはもう理解してるつもりだ」

俺は会話から相手の好みや性格、パーソナルスペース心的距離感を把握して、不快に思われず、されど他人よりも深い部分に潜り込む。

そうすることであらゆる人間との対人関係を円滑にし、自身の生活に不測の事態など起きないように上手いこと生きてきた。

そのため会話していればいるほど、こちらの裡を暴かれるような気分させられるこの人とは、文字通り相性が悪いのだろう。

「それで。彼女が八騎目のサーヴァントかね」

「そういうこと。聖杯戦争の監督役として、この状況をどう判断するのかしら」

「ふむ。マスター不在の八騎目のサーヴァントか。これは過去にも例がないな」

その発言はわざとなのか。

こうしてここに俺が居ることの意味と、フェンサーが俺をマスターと見なしていることは凜から聞いているはずだろうに。

それとも聖杯戦争の監督としては、令呪を持たない俺をマスターと認めることは出来ないということを暗に示しているのか？

「黒守よ。二、三尋ねたい。彼女、フェンサーは君が召喚した。それは間違いないか」

「ああ。召喚しようとしてしたわけじゃないが、俺はフェンサーが召喚されるのを見ていたし、実際に彼女とのパスも形成されている」

「それではもう一つ。フェンサーを召喚した場所は？」

「新都郊外から少し離れた場所にある、荒地のままになってる公園だよ。十年前に、大火災があつたあの公園だ」

「

」

その場所が、彼にとってそういう意味を持つ場所だったのか。

少しの驚きと愉悦を噛み締めたような表情を浮かべながら、言峰綺礼は俺の言った事を反芻していた。

「それではフェンサー。おまえの主は黒守黎慈……それで良いか？」

「どういう意味かしら？」

「パスが形成されているのなら契約関係は本物だろう。しかし、おまえとの令呪を持つマスターが他にいる可能性もある」

……なるほど。それは盲点だった。

呼び出しや召喚自体は俺を経由してやったように見せて、本当のマスターとサーヴァントの関係を持つ魔術師は他にいるという説。そうなるにあの黒いサーヴァントもグルだった可能性もあるし、聖杯戦争において自身の存在を偽装できるならそれは優れた手段だろう。

実際にそんなことが出来るのかはわからないが、中々面白い着眼点だと思う。

その言葉に、最も強く反論したのは他ならぬフェンサーだった。



「私のマスターは後にも先にもレイジだけよ。他にマスターがいたのならそんな契約は破棄してあげるし、必要ならそのマスターを私が殺すわ」

「ク……そうかそうか」

この神父さんは何が面白いんだろう。

彼なりに考えた結果であろう可能性を簡単に否定された割に、彼は元からそうなるだろうと思っていたかのようだ。

「まず、召喚場所となった公園だが。あそこは前回の聖杯戦争の決着の地でな。そういう意味では、聖杯の影響を受けやすい場所といえる。」

そして今回の聖杯戦争におかしな点が多いとするならば、それは前回の決着時から既に不具合があったのだよ」

「決着時の不具合……？」

「聖杯は現れた。しかしそれを手にした者は資格持たなかった。触れた者がどのような願いを持っていたかは知らぬが、その結果がある大火災であり、聖杯はその中身を一部残したまま再び眠りについた」

「本来なら40年〜60年周期で行われる聖杯戦争が、今回に限ってこんなに早く始まったのもそのせいなのよ。」

前回使われなかった魔力があったから、溜まるまでが早かったんでしょうね」

聖杯戦争  
前回の起動時に正常な終了手順を取らなかったせいで、次の起動戦争  
時に不具合が起きている、ということか。

呼び出すサーヴァントの数が前後しているのかもしれないし、聖杯に余分な魔力があったせいで余分に呼び出したことも考えられる。

マスターの選定基準にも狂いが生じているのかもしれないし、令呪の割り振りがうまくいっていないことだってありえるかもしれない。

「それじゃあ、俺がマスターだって証明はできないし、逆に俺がマスターでも問題ないんじゃないのか」

「そうね。今さらなかったことになって出来ないし、私にとっては倒すべき敵が一人増えただけの話よ」

「君とサーヴァントにその意志があるのなら、聖杯戦争への参加を認めよう。しかし、一つ受けてもらいたいことがある」

「なんだ？」

「なに、霊媒手術で擬似的に聖痕を刻み、そこに令呪を移植してみるだけの話だ」

「はあ！？ ちょっと綺礼」

なんだそりゃ、願ってもないことじゃないか。

というより、そんな簡単に令呪って扱えるものなのか。

「何も悪い話ではあるまい。聖痕を刻むのは少し痛むだろうが、移植そのものは簡単だ。そして令呪は、マスターが持たなければ効力を発揮しない。」

令呪が機能すればマスターの証となり、仮に機能せずともサーヴァントが居るのならば、マスターとして振舞うことに異議は唱えまい」

「それはそうだけど……………」

「令呪はサーヴァントを律する他に、強力な魔術を行使するための刻印でもある。彼が令呪無しで聖杯戦争に参加するのは勝手だが、その時点で相応の不利を」

「いいよ、神父さん。是非やってくれよ。フェンサーも異論ないよ」

な」

「ええ。どちらにしても、レイジがマスターであることに変わりはないもの」

飛び入り参加を認められても、正式な参加資格というものはやはり欲しい。

例外だからといって何もかも例外で済ませてしまつては、他の正規参加者に申し訳ないだろう。

そもそも敵が増えることを喜ぶやつはいないので、俺が参加することに対して他の参加者に引け目を感じる必要はないのだが、そこはケジメだ。

一つ返事で承諾した俺に不思議な視線を向ける凜。

何か言いたいことがあるならいつものように言えばいいのに、こんな時に限って何を遠慮しているのか。

「もう、勝手にしなさいよ！ どうなつても知らないんだからね！  
」

俺の鼻先に指を突きつけながら宣言し、凜は大腿で教会を出て行った。

一体何が言いたかつたのだろう。

普段は要領よく言ってくれるくせに、肝心な時に要領を得ない。

「それでは、奥までついてきたまえ。こんな場所で霊媒手術を行うわけにもいくまい」

「ああ、わかつた」

促されるまま、俺は言峰綺礼の後についていった。

「なあ、遠坂。まだ待つのか？　かれこれ一時間は経ってるけど……」

「衛宮くんは別に帰ってもいいのよ？　私はアイツが敵として前に立つのかどうか、この目で見届けなきゃならないの」

教会前の広場で佇む、士郎、凜、セイバー。

セイバーは元より士郎の意志に従うのみなので問題ないが、他の二人はどうなのか。

士郎もさすがにセイバーをずっと待たせるのは悪いと思っているが、彼女の言うとおり黒守黎慈を放っていけない気持ちもある。

令呪の移植手術を行っていると言き及んでいるが、それがどれほどのものであるか。

現実にある手術のように大掛かりなものではないだろう。けれども、楽観的な気分で待っていていいものでもないような気がする。

どれくらいの時間が掛かるのかも分からないため、ただ待っているのもどうかと思っているのだが……

「シロウ、出てきたようです」  
「あつ」

凜が出てきてから一時間強。

右腕に包帯を巻きつけた少年と、それに付き従う白銀のサーヴァントが教会から出てきた。

「いや悲鳴の一つも上げんとは、大したものだ」

手術終了後、令呪を移植した右腕に思いっきり包帯を巻きつけながら言峰神父はそう言った。

「あんた……………少し痛む程度って……………言っただよな」

実際、痛いなんてもんじゃなかった。

腕を刻まれる痛み慣れているのと、痛覚をコントロールすることで何とか耐えたが、あれは常人だと間違いなくショック死するレベル。

令呪は魔術回路と一体化しているものなので、まず神経節の上か

ら霊的なメスで切り込みを入れる。

まずこれを聞いただけで、想像力豊かな人は手が痛くなってくるだろう。

これまでの聖杯戦争で使われなかった令呪は回収されているらしく、次はその残っている令呪の形に沿って聖痕を刻む。

ワンセットの令呪なら形も決まっているのでそこまでではなかったのかもしれない。

だがこの神父さん、何の嫌がらせか三種類の令呪から一画ずつ持ってきて、適当に組み合わせた型に俺の手を彫りやがった。

上手く想像できないなら、手に彫刻刀で図形を描くようなものと思えばいい。

てか何に一番文句言いたいかつて、痛みを制御するのに必死で見ていなかったが、手術中の痛みを堪える俺を見て絶対にこの神父さん笑ってやがりました。

人の不幸は蜜の味？ 度があるだろ。鬼か、悪魔か、言峰か。

「しばらくは痛むだろうが、馴染めばそれもじきに治まる。喜ばしいことではないか、令呪はおまえをマスターだと認めたらしい」  
「……………そうですかい」

右手に光る魔術刻印。

過去の代表的な英霊三騎、セイバー、アーチャー、ランサーのモを一画ずつ刻まれた令呪が、俺の右手で赤い光を湛えていた。

「それではこれで、正式に聖杯戦争の始まりだ。今後、この教会に足を運ぶことは許されない。許されるとしたらそれは」  
「

「敗北し自らのサーヴァントを失ったときのみ。それ以外にここを頼ることがあれば、マスターとして減点対象ってことだな」

聖杯戦争中、この教会の役割は敗北したマスターを保護することのみ。

不測の事態が起こった際にも監督役が居るこの場所は頼みになるが、それをしたマスターは聖杯に相応しいかどうかの採点でマイナス点を受けるということだ。

「一応礼は言っておくよ。世話になったな、神父さん。次に会うときは俺が勝ち残った時か、死体になったときだな」

暗に、何があるうとおまえなんか頼んねえぞという意思表示。

別れの言葉だけ告げて、俺は教会を跡にした。

（これで俺は、正式におまえのマスターだ。よろしくな、フェンサー）  
（ええ、よろしく）

ラインでの精神感応による呼びかけ。

士郎とは違い、信頼を明確な形で示す必要もない。  
令呪もなしに俺をマスターと認めてくれていた彼女を俺は信頼しているし、彼女の方も今さら信頼を揺らがせることはないだろう。

広場へと歩を進めながら、徐々に見えてきた人影に目を向ける。

士郎、凜、セイバーだ。

一時間以上は掛かったはずだが、わざわざ待っていてくれたのか。今日という日が終われば敵同士であるというのに、律儀なことだ。

「黎慈、移植は上手くいったのか？」  
「当然だろ」

右手の甲を見せながら答えた。

おお、と我がごとのように安堵した表情を見せる。

コイツは、俺たちが敵同士である自覚はあるんだろうか。

会話はそこそこに、次は凜のほうへと顔を向ける。

「凜……………」  
「黎慈。これで、貴方と私は」  
「ああ………… お揃いの令呪だね、りんりん」  
「……………」

あ、なんか怒ってるっぽい。なんでだ？

右手同士でペアシールみたいだと思ったんだが、なんか間違っただろうか。

「ふん、その分だと大丈夫そうね」  
「ちよっと痛いけどな。まあ予想以上に遅くなったし、今日は帰ろ



「うや」

「そうだな」

三者三様の装いで、俺たちは帰途についた。

「いい？ サービスは今日いっぱいで終了、明日から私達は敵同士なんだからね」

「わかってるよ、遠坂。何回目だよ、その話」

「アルツハイマーになるのは早いぞー、りん……ぶっ！」

言い終わらないうちに頭をはたかれる。

くそう、ネタを最期まで言わせないと芸人殺しだ。

いやそれより、マスターが攻撃を受けたんだから守れよサーヴァント。

（え？ 今のはボケとツツコミだから邪魔しちゃダメでしょ？）

ジーザス。

この世にボケとツツコミを理解するサーヴァントが存在したのか。

だが万が一ツツコミの振りして魔術叩き込まれてたらどうしてくれるのか。

（魔力の流れでわかるもの）

（さようでございますか）

もうフェンサーには何も期待しないことにする。

「教会まで連れて行ったのは私だから、帰りまでは面倒見てあげ

」

「どうした、凜？」

「いえ。悪いけどここからは各自で帰って。あなたたちにかまけて忘れてたけど、私だって暇じゃないの。」

せつかく新都にいるんだから、捜し物の一つでもしてから帰るわ」

なるほど、他のマスターの搜索か。

舞台が冬木市といえど、たった七人のマスターを探し出すには十分広い。

マスター同士、サーヴァント同士、互いの存在を感知できるとはいえ、人を一人見つけるといえるのは容易ではない。

サーヴァントは霊体化していると感知しにくくなるし、マスターも魔術師であるなら住処の隠匿や己が身の隠形には手を尽くしているだろう。

「なら俺もここで別れるかな。ウチのサーヴァントにはまだ地理を把握させてないし、今日のことですら少し思いついたこともあるし」

言って俺も来た道を引き返すように進路を変える。

だが  
俺と凜はありえないモノを見たかのように、その動きを停止した。

「ねえ、お話は終わり？」

その歌声のような可憐な声は、紛れもなく少女のものだろう。

声がした方向、俺と凜が見つめる方へと士郎も目を向けた。

空には白く輝く月。

その月明かりが作り出す影は、まるでこの辺り一帯を影絵のように切り出してみせる。

その蜃気楼の悪夢のような空間に、なお異様な存在があった。

「バーサーカー」

「……へえ。アレもサーヴァントか、やっぱり」

初めて見た黒いサーヴァント、フェンサー、アーチャー、セイバー、それら全てを凌ぐ異質の巨人。

彼らとは同じ存在とは思えないほどに、あのサーヴァントは度外れている。

その化け物を背に従え、無邪気な声質で微笑みながら少女は俺たちに敵意を向けていた。

「驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

凜が呟く間にも、臨戦態勢へと入る。

ラインを全開にし、魔術回路から共振させて増幅した魔力をフェンサーへ送達する。

本来の存在維持に必要な魔力の数倍、その過剰ともいえる魔力供給に、フェンサーの基本能力値が底上げされる。

今日一日でそれなりの魔力消費をしたし、精神も疲弊しているが、メインだけでなくサブの回路も総動員して俺は強く意識を研ぎ澄ます。

この状態、いつ戦闘に入ってもおかしくない。

凜の傍からアーチャーの気配が消えた。

恐らくアーチャーという名が示すとおり、本来の戦い方である遠距離狙撃を元に戦術を組み立てる気だろう。

ならば前衛はセイバーに任せるか。

俺は未だに、フェンサーの能力についてその多くを知らない。

彼女に任せてしまってもいいが、それで士郎や凜に余計な情報を与えては後々に厄介なことになる可能性がある。

（フェンサー、前衛よりの中距離支援、いけるか？）

（それがマスターのご命令とあらば）

よし、ならこちらの方針はそれで行こう。

「衛宮君。逃げるかどうかは貴方の自由よ……けど、出来るならなんとか逃げなさい」

「まあ、攻撃範囲内に居られても迷惑だしな。セイバーに指示できる距離内で待機してることだ」

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

軽やかな笑い声。

少女は行儀良くスカートの裾を持ち上げて、とんでもなくこの場に不釣り合いなお辞儀をする。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン」

フォン・アインツベルンの家系といえば、1000年にも及ぶ歴史を誇る魔術師貴族の大家だ。

一族の情報は外に漏れることなく、時計塔ですらその存在の詳細を知ることの出来る資料はほとんどないといわれている。

「お兄ちゃんとリンは知ってるけど……そっちの人は？」

「……お目に掛かれて光栄です、レディ・アインツベルン。黒守黎慈と申します。御身の尊き血に比べれば、歴史の浅い末端の魔術師ですが」

「これはご丁寧に。クロガミ……聞いたことはあるわね。先代で一族の血は途絶えたと聞いていたけど」

「ええ、自分がその最後の血族ですよ」

明確に格式上で自身より優れた家系であるため、自然と丁寧な語り口になる。

これは両親と曾祖父さんの教育の賜物で、目上の人間に対して相手を敬う姿勢は身体に染み付いたものである。

そんな穏やかなやり取りもすぐに終わる。

元より白の少女は、話をするためなどに来たのではないのだから。

「そう。なら、今夜でその血は途絶えるわ。」

「じゃあ、殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

それは天使の虐殺命令だった。

数メートルはあるだろう巨体が、坂の上からここまで数十メートルはある距離を一足飛びで落下してくる

！！

「シロウ、下がって……！」

「レイジ、下がって……！」

全く同時に前へと躍り出る二人のサーヴァント。

その行動を見越していたかのように、流星の如く飛来する何条もの弾丸が、落下してくるバーサーカーをつるべ打ちにする……！

正確無比とはこのことか。

落下してその位置を定まらせないバーサーカーを射抜く銀光は、一本たりとて急所以外の場所を射抜くことはない。

矢を越えて弾丸と化したそれは、一軒や二軒程度の家屋なら蜂の巣にするほどの威力を秘めている。

それを八連　　全てをその身に受け、而してバーサーカーは微塵もその速度を落とさない。

息を飲む凜。

それはそうだろう。己がサーヴァントの攻撃が一切の効果をもたないのだから。

その後に打ち合う剣と剣。

全ての矢を無効化しながら落下してきたバーサーカーと、それを迎え撃つ二体のサーヴァントが激突する……！

火花が散る。

金属同士が摩擦し合う熱火と、纏う魔力の炸光が夜の闇を照らし出す。

闇に走る二対の銀光。互いに不可視の剣を持って巨人と切り結ぶ。バーサーカーの斧剣に圧されながらも、その剣戟は緩まることがない。

暴風の塊を叩きつけられるに等しい一撃を受けながらも、セイバ―は受け流し、弾き飛ばし、真正面から切り崩していく。

その二人の隙間を縫うようにフェンサーが斬撃を繰り返す。

二人に力で劣る彼女は直接斬り合うことは避け、その代わりにセイバーとの攻防で生まれた隙に剣を叩き込む。

一瞬、攻め手が止んだ瞬間に再び流れ落ちる銀光。  
バーサーカーの眉間、こめかみ、首の根を撃ち抜く。

戦車砲に匹敵するその矢を受けて、無事に済むはずはない。  
必殺の勝機にセイバーとフェンサーが間髪入れずに不可視の剣を  
薙ぎ払うがしかし、それはあまりにも凶悪な一撃によって、  
体ごと弾き返された。

「ぐっ……!!」

吹き飛ばされ、アスファルトを滑る二人。

追撃に奔る狂風。

それを阻止せんとさらに銀光が落ちる。

だが効かない。

正確に巨人の顔面を撃ち抜いた五本の矢は、またしても巨人の頑強さに敗れ去る。

「……………」

巨人は止まらない。

振りかぶられた大剣を、セイバーが受け止めようとしたその時。

「どきなさい、セイバー」



全ての音を無視して耳に届いた清廉なる声。

そして。

「！！？」

爆裂する魔力の奔流と共に、信じられない規模の大魔術が迸った

何が起きたかすら分らない。  
ただ、目の前に炸裂した閃光が開けたその先には。

「！」

左足を黒く焦がした、巨人の姿だけがあった。

「あら、Aランクの魔術は届くのね」

それが然も何でもないことのように、フェンサーは魔術を放った  
であろう右手をチロリと舌で舐める。

その光景に驚愕したのは、フェンサーを除く全員だ。

キャスターでもないサーヴァントが、Aランク相当の魔術を事も

無げに放ったという事実。

彼女はそんな周りの反応など知る由もなく。

大した魔力の消耗すら見せず、紫紺の外套を纏う銀のサーヴァントはその異質さを最大限に発揮していた。

「いいわ、前衛はセイバーがしてくれるでしょうし……………貴方には、魔力が続く限りありったけの魔術を叩き込んであげる」

次の魔術を身に備えながら。

銀のサーヴァントは、最強の狂戦士<sup>サーヴァント</sup>に宣戦布告した。

運命の夜、最終戦闘。狂戦士vs剣騎、弓騎、戦騎の闘い。

その決着は、如何に

### 第三章 手にする資格・イレギュラー・（後書き）

はははは、徹夜上げですよー。

前話の書き残しがあったのでキリのいいところまで書こうと思ったら、こんなことになったんだよ！

書きあがったので投稿します。

ここまでは8割方原作なぞってる感じでしたけど、ここからちよつとずつ分岐する、たぶん。

ワクワクするところで話を切り、読者様方をヤキモキさせる作者はDSだ（by友人）

サーヴァントのステータスが更新されました。

## 第四章 運命の夜、閉幕

月夜の戦い。

剣も矢も効かぬ相手に魔術でダメージを通したフェンサー。

過去の英雄であつたなら、刀剣での戦いの他に魔術を識る者もいただろう。

神話に語られる時代、指先一つ動かすだけで地形を変えるほどの魔術を扱う魔者も存在したのだから。

しかし彼女が放った魔術は明らかに異常だ。

現代の魔術師でも行使可能なレベルではある。が、それを一工程と一小節、ただの一言の詠唱と腕の一振りで発動させるなど常軌を逸している。

だがそんな傷などなかったかのように、バーサーカーは大剣を振るい続ける。

フェンサーも異常といえは異常だが、この狂戦士の頑強さは度を越している。

家一軒吹き飛ばすどころか地を穿ちかねない大魔術に晒されながら、片脚を火傷した程度で済んでいるのだ。

恐らく、バーサーカーを守っているのは己が肉体の強度ではなく、桁違いの魔力で編まれた『法則』による不死身性。

初めて出会ったあの黒いサーヴァントにほとんどの魔術が雲散霧消したように、この黒い巨人も何らかの概念によって保護されている……！

「矢は無視しなさい。どうせリンとアーチャーじゃ貴方の宝具を越えられないんだから。先にセイバーとフェンサーを潰しましょう」

ダメージは確かに通っているが、それは相手にとって軽傷でしかない。

戦闘続行に支障がなければ、痛みを恐れない狂戦士が止まるはずもなかった。

「Blitz Shot, Phalanx Ignition!!」

雷撃

殲滅射撃

一斉掃射

「

バーサーカーを周囲まるごと焼き払うかのように雷撃を見舞うが、やはりまるで意に介さない。

凜が放つBランクに匹敵する宝石魔術も功を奏さず、もはやマスター側からの援護は無意味に等しかった。

「

!!」

雄叫びを上げながら狂風が吹き荒れる。

セイバーと切り結びながら、十三合目を数えた剣撃の後、俺の雷撃に紛れて接近したフェンサーがバーサーカーの側面を取った。

「Zerstörung」

碎ける

再び一工程一小節で放たれる極大魔術。

景色が歪んで見えるほどの超高熱を一瞬で発生させ、その炎塊をバーサーカーに直撃させた。

その熱量は計り知れず、直撃を受けたバーサーカーの足元のアスファルトは赤熱し溶解し始めている。

さすがに無視できないダメージと爆裂時の衝撃に圧され、あの巨人が一瞬の硬直を見せた。

その隙を見逃さず、セイバーの斬撃が打ち込まれる。

電柱も軽く斬り飛ばすであろう剣を三度その身に受けて、未だバーサーカーは健在。

核さえ耐え切りそんな防御性能にも驚きだが、真に恐るべきは既にフェンサーの初撃に受けた傷が回復し始めていること。

こちらの動きや攻撃手段も徐々に学習されるだろうことを鑑みれば、この鉄壁の巨人との戦闘を長引かせるのは得策ではない。

だが短期決戦に持ち込もうにも、その頑強さゆえに勝機すら見出せないのが現状だ。

今のところ、唯一有効な攻撃手段を持つのはフェンサー。

セイバーやアーチャーにも巨人に通じる攻撃手段はあるだろうが、それが彼らにとっての切り札ならば、こんな序盤戦で開帳するのは本意ではないはずだ。

どうしたものかと思案する中、もっとも正しいと思われる意見を述べたのは、意外にも士郎だった。

「なあ、ここは一時的にでも撤退したほうがよくないか？」

「まだ逃げてなかったの？ て今はそんなこと言ってる場合じゃないか……」

そうね。戦況も悪ければ場所も悪い。アレとやりあうなら、それなりの下準備と場所選びが必要だわ」

「加えてまだ戦争は始まったばかりだ。お互い、ここで手の内晒しまくるわけにもいかなえもんな」

マスターの意見は満場一致だが、不服そうなサーヴァントたち。

「反対ですシロウ、敵に背を向けるなどと。それに背中を見せてそう易々と逃がしてくれる相手とも思えません」

「まあ退却するにしても一度相手を行動不能にするか、誰か殿を残さないと追いつかれるでしょうね」

溶けたアスファルトさえ踏み越えて進撃してくるバーサーカーを迎え撃ちながら、二人のサーヴァントは意見を述べる。

彼女らの意見は実に正しいのだが、そうすると誰か一人は切り札級の技を見せないといけないわけで。

思惑を理解しているであろう凜と目配せをしながら、「おまえやれよ」「あんたやりなさいよ」なんて目だけで話し合う。

息を呑みながらサーヴァントの戦いを見つめる士郎は、逃げるなんて言っておきながらその方法なんて考えちゃいないだろう。

「少なくとも場所は変えようぜ。向こうが追ってきてくれるなら、こっちにとっちゃ好都合だろ」

「セイバー、いけるか？」

「それではここより少し離れた場所にある墓地へ。あの場所なら、地の利を活かすことが出来る」

「OK、それじゃ……………」



再び凜とのアイコンタクト。

魔術回路をフル回転させ、魔力を共振増幅しながら機会を待つ。

（フェンサー、次、いけるか？）

（いいわ、いつでも）

打ち合うセイバーとバーサーカーの間合いを計りながら、それが一番有利な距離となった瞬間

「今よ、アーチャー……！！」

降り注ぐ銀光。

今度の矢砲は尽きることなく、絶え間なくバーサーカーへと打ち付ける。

流星群のようなそれは美しいとも形容できる有様だが、それら全ては急所と関節部を狙った死の雨だ。

「Shadow, Ash to Ash Be coffin!  
黒き者よ 灰より出でて 死の束縛を

そこに架空元素による影の束縛。

矢によって一瞬だけ上空へと意識が逸れたのを確認し、足元から虚数によって編まれた負の呪縛を展開する。

どれほどの効果があるかはわからないが、サーヴァント同士の戦いにおいて刹那でも停止することは致命的な隙となる。

矢と影を確認した瞬間、即時離脱するセイバー。

その離脱を確認した後、二つの大魔術が夜の闇に爆ぜた。

「我これを欲したもう Deus Valt , 出でよ Donne 蒼き雷 Schlag! !」  
「吹き荒べ Sturm Wind」

フェンサーが放った魔術による爆風が、凜の撃ち出した轟雷を乗せてバーサーカーへと殺到する……！

それはまさに、局所的な暴嵐と言って差し支えない。  
全てを無に帰す肉体を持つバーサーカーであっても、数瞬はその身を抑えつけられるほどである。

あれだけの大魔術二つを一身に浴びながら、数瞬押し留められるだけで済むアレは本当に化け物だが

「よしッ、全員走りなさい!!」

一気に坂道を駆け下りる。

セイバーが言っていたのが道中にある外人墓地のことなら、走ればここから数分で辿り着くだろう。

だがその数分は、バーサーカーにとってどれほどの猶予であるだろうか。

僅かに足止めされたとはいえ、そもその歩幅と速度の違いから先に走り出した優位性は無きに等しい。

人間の足で逃げ果せるようなものではなく、その斧剣を以つてすれば俺たちなんて数分間で十度は殺されるだろう。

けれど、それはこちらも解っている……………！

「いくぞ、フェンサー！ 雷撃 Blitz Shot, Halberd  
一斉掃射 Ignition！！」  
撃ち「durchstechen 徹せ！！」

砲雷の弾雨を巨人に浴びせる。

何人かのサーヴァントに備わっている対魔力。

特定ランク以下の魔術を無効化するそれは、魔術師にとって脅威となる。

だがバーサーカーには対魔力ではなく、それでもなおこちらの魔術を通さないのは、肉体そのものに備わっている防護の概念故だ。

『法則』そのものに守られたその身はなるほど、確かに強靱な防御性能を発揮するだろう。

しかしそれは、魔術を霧消させるのではなく無効にしているだけ。

たとえ効かないのだとしても、その身は一度魔術を浴びる。

ならば威力や効力そのものは無効化出来ても、その際に生じる衝撃までは無いものにするなどできまい！

「はあ、はあ……つく！」

砲撃に等しい魔術の連続発動。

低ランクながら威力を最大限まで高めたそれは、巨人を一瞬ずつでも押し留めるに足る。

後押ししてくれるフェンサーの魔術も、かなりの効果を発揮してくれていた。

「くそ、俺は何も出来ないで……!!」

「今は何も考えないことよ衛宮くん。セイバーが居ることは助かってるし、それは貴方が居るからこそでしょ。」

素直に撤退戦を思いついたのも貴方だし」

「ああ……」

納得いかない顔をしながらも、士郎は走り続ける。

ここで問題なのは、連戦続きで疲弊し始めている俺自身だ。

黒いサーヴァントとの防衛戦、フェンサーの召喚によって持っていかれた大半の魔力。

走って深山町に戻り、教会まで徒歩で向かい、移植手術による精神消耗からここにきてさらに連続魔術行使。

今まで魔力切れになどなったことのない俺が、遂に自分の限界を感じ始めている。

「ちょっと、こんなところで倒れないでよ、黎慈？」

「ふう、ふう………だったら、ちゅーして魔力分けてくれよ、りんりん」

「……いいからさっさと走れ、このバカ！」

軽口が叩けるだけマシか。

凜にバシン、と背中を叩かれる。

今ので少し、気力が戻った。

そうだ、こんなところで限界感じてる場合じゃねえ。

まだ聖杯戦争は始まったばかりだろう、気合入れるよ黒守黎慈！

「コイツでラストだ……！」  
雷撃  
一斉掃射  
d Ignition!!」  
直列砲

誰かが限界は自分で作り出すものだと言ったがそれは違っだろう。

限界は自分とは関係の無い者が決めるもの。

己に限界などない。

先へ、先へ、さらにその先へ。

最果てへと行き着いて力尽きた時、その無様を見て他人が嗤いながら決め付けるモンだ。

自分の道の先を決着点と見るか、終着点と見るか。  
そこが自分にとってのゴールだったのなら、その道のりに誇りがあるのなら、誰に笑われたって構わないだろう。

誰かと命を競い合いながらそういう生き方が出来るならと、俺は聖杯戦争に参加したのだ。

「よし、バラける散開するぞ……！」

これより墓地は主戦場となる。中に入り込むわけには行かない。  
マスター三人は端の端へ。蒼と銀のサーヴァントは墓石の隙間を縫うように中へと滑り込む。

「……………」

ちょこまかと逃げられてイラついているのか。  
一際大きな叫びを上げながら、黒い巨人が侵入してくる。

「鬼ごっこはもう終わり？　なら、やっちゃえ。バーサーカー！」

墓地に脚を踏み入れた瞬間に暴れ狂い出す巨人を、二人のサーヴ  
アントが再び迎え撃つ。

狂戦士は斧剣を振り回し敵手を薙ぎ払おうとするも、今回はその  
相手を捉えることができない。

ドンドンと音を立てながら墓石が砕け散る。何の変哲も無い石で  
出来た石など、この巨人にとっては無きに等しい。

だがその差は決してゼロでは無い。

巨人に比べれば小柄な少女二人が駆け回る中、この墓石は間合い  
と照準を狂わせるに十分な意味を持っている。

「はぁッ……！！」

その間合いを外した攻撃を避けた後に、不可視の剣を叩き込むセ  
イバー。

相変わらずその攻撃が効く様子は見られないが、直接打ち合うリ  
スクを減らせただけでも大きいのだ。

普通であれば実力差の天秤は狂戦士の方に傾くだろう。  
だがそれも、セイバー側に地の利が加わっただけでその天秤は拮  
抗し揺れている。

「あの調子じゃセイバーは負けないだろうけど………」

「ああ、障害物のせいでフェンサーの魔術も撃ちにくくなったな。アーチャーの援護も意味ねえし、このままだと夜明けまでこのままだぞ」

結局は時間稼ぎに過ぎない。

まともにセイバーやフェンサーの一撃が入ったとして、あのバーサーカーにまともにダメージを入れられるのか。

両者拮抗のまま、戦闘を続ける二人。

そのうちに、フェンサーがセイバーに耳打ちをした後、こちらへと一時離脱する。

「ねえ、アーチャーのマスター。貴方のサーヴァントに、一撃でもバーサーカーの防御を打ち抜けるような攻撃が出来るか、聞いてもらえる？」

「え、ちよつと待って……………うん、いける？ ……わかった。一度でも完全な隙を作ってくれば、可能だって」

「そう、それなら」

言つて、フェンサーは戦場へと舞い戻る。

直接の打ち合いへは参加せず、隙を窺うようにセイバーに追従する。

「セイバー……………」

見守るしか出来ないシロウも、歯痒い思いをしているだろう。

凜は訪れるであろう一度の機会に、指示を間違わないように気を張り続ける。

そのまま数分が経ち、そのチャンスはやってきた。

今まで一度も体勢を崩さなかったバーサーカーの巨体がぐらりと揺れる。

苦し紛れに薙ぎ払われる狂風の大剣。

余裕を持つて後ろに大きく跳ぶことでセイバーがそれを躲した後  
に

「Freisetzung

概念

解放

Ungultig

防護貫衝

何か、異様な魔力流を発生させ、フェンサーが魔術を発動させる。

「durchstechen!

撃ち

徹せ

先刻放ったモノと同じ、砲雷の一撃をバーサーカーへと撃ち放つ。

少々の傷を負おうが防ぐ必要もないと判断した狂戦士はしかし。

その判断速度を越える肉体の反射によって、身を捻るようにして  
衝撃をずらした。



戦士の勘によつて、本能的にその危険を察知したのはさすがだ。だが避け切れることは出来ず、さらにフェンサーが放った魔術は当たりさえすればそれでよく。

後は赤き弓騎がトドメの一撃を

「セイバー                    つ！！！」

「え、ちょ、待つ            ！？」

凜の制止など間に合わない。

アーチャーによる追撃が行われるであろうその瞬間に、あることとか士郎はその攻撃の中心へと駆け出した。

そんな士郎の姿に俺自身も眩暈を覚え、呆れるも次の瞬間。

（……っ！？    フェンサー、下がれ！！！）

（えっ！？    り、了解マスター！！）

フェンサーをその場から離脱させる。

この不吉な予感の間違つていない。

士郎も手段こそおかしいが、己のサーヴァントを避難させようというその指示は的確以外の何物でもない。

眼球を強化し、視覚を絞り拡大してから遠方を睨む。

そこには凡そ数百m先の家屋の上から、こちらに存在する敵を射

抜こうとするアーチャーの姿。

歪む口元。不敵に嗤う眼。

引き絞られた弓は、敵の存在を撃ち貫くために限界まで撓りをあげる。

そう、確かにアーチャーは。

こちらに存在する敵すべてに攻撃を仕掛けようとしていた。

“矢”が、放たれる

今まで一度も通じなかったアーチャーの矢。

今さらそんなものなど、と視線をその矢へと向けたバーサーカーは、その狂ったままの理性で、己の死を理解した。

体勢を崩し、概念を付加された大魔術を受け、防ぐことも躲すこともままならない。

そうして            全ての音が消し飛んだ。

凜はもとよりフェンサーも踏み止まる姿勢を取り、セイバーは士郎が庇い伏せている。

聴覚を侵犯する音の奔流。

大気が爆発したかのような衝撃、その熱と烈風を感じながら、閃光が収まるのを待った。

墓地を大炎上させ、地にクレーターを穿つほどの破壊を巻き起こしたアーチャー。

その中心地に立つバーサーカーは、胴体の左半分上を吹き飛ばされ、確実に絶命していた。

あらゆる防御の概念を貫通させる概念魔術をその身に受けた後、Aランクに匹敵する宝具の一撃を受けたのだ。

かのバーサーカーといえど、無事に済むはずがなかった。

「へえ……バーサーカーを殺すなんて。やるじゃない、貴方たちのサーヴァント」

少女は面白い玩具を見つけた子供のように無邪気な笑みを浮かべながら呟く。

己のサーヴァントが死んだことになど目もくれず、気にもせず、ただそれを成し得た相手のサーヴァントとマスターを褒め称えていた。

そして、その背後に。

「詰みだ」  
チエック

共振させた魔力を漲らせ、魔術を発動寸前にした腕を翳しながら、俺はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンに勝利宣言をしていた。

「……あら、気付かなかったわ」

「え、黎慈、いつの間に!？」

誰にも気付かせることなく、俺はイリヤスフィールの背後を取っていた。

戦況を俯瞰していた凜やイリヤスフィールですら気付くことがなかったのだから、この場に俺が隠密行動をしていたことを知る者は、フエンサーしかないだろう。

作戦を開始したあたりから、俺が言葉を発さなかったのはそのために。

全員の緊張がピークに達するときを待ち、必殺の一撃が撃たれた直後の隙にこそ付け入る隙が生まれる。

剣道などでも同じで、試合開始から決着の一撃を放つ瞬間までは集中力は高まり続けるが、それが終わった瞬間にこそその集中は解ける。

どれほどの武人であろうと、一刹那たりとも集中が解けることのない者などいないのだ。

「セイバーはどうでもいいけど……リンとレイジのサーヴァントには興味が湧いたわ。今はまだ生かしておいてあげる」

「なに……？ おまえ、自分の状況がわかって」

言おうとしたそのときだった。

「……………」

「え、いいっ!？」

言葉ですらない狂える雄叫びと共に、絶命したはずのバーサーカーが蘇生した。

こつちも言葉にならない悲鳴を上げ、思わず準備していた魔術を解いてしまつ。

それを武器を収める意味合いと取ったのか、イリヤスフィールは軽くお辞儀をした。

「今夜は踊って下さつてありがとうございます。それでは、またお会いしましょう」

その姿に面食らつた俺は、戦闘意識を完全に喪失した。

バーサーカーが霊体化し、消える。

墓地で未だ燃えている大気。

火が空気を燃烧させる影響が、強い一陣の風が吹いた。

「きゃっ……」

「おっと」

風で飛んできた帽子をキャッチする。

白い少女とお互いに見合つたまま固まつてしまつ。

なんだろう。今まで会つたことのある誰かと、同じ印象を感じ受けた。

容姿が似ているからか？ それとも魔力の波長が似ているからか？

何が似ているのかも判断できないまま、俺は少女を見つめていた。

ふと我に返り、帽子を盗むわけにもいかないので、彼女の頭に被せる。

「失礼しますよ……っと。もう少し深くかぶったほうがいいぞ」  
「う、うん……」

戸惑う少女の姿。

当然だろう。

平気な振りをしているがこちらかなり戸惑っている。

つい先ほどまで敵同士だったにもかかわらず、なにゆえにその敵の少女とこんなやり取りをしているのか。

「……それでは、ごきげんよう」

俺の隣を素通りし、少女は夜の闇へと姿を消した。

本当に長かった運命の夜は、ようやく終幕を迎えたのだった。

サーバントのステータスと情報が更新されました

## 第四章 運命の夜、閉幕（後書き）

序盤の序盤、終了です。

主人公とフェンサーの強さにはだいぶ調整を掛けたつもりですが、いかがだったでしょう。

本当はもつと素で強いイメージで設定した2キャラなのですが、原作やってバーサーカーとの戦闘シーン見てから書き出してみると、実際こんなもんになりました。

まあまだ宝具も出してませんね。多数のサーヴァントに対応できるフェンサーですが、相性上勝てないサーヴァントが幾人か。

ウチのイリヤはお姫様属性を強化しているので、違和感があつたらそのせいです。

（以下、酔っ払っている作者の戯言）

なんかりんりんが人気です。

プロットには会話文は書いてないので、キャラに好きに動いてもらった結果なんです、嬉しいです。

フェンサーは中盤前後からどんでん返しを見せてくれるだろうか。

ヒロインについてなのですが、幾人か候補がいます。

メイン1・豊かなおっぱい      メイン2・りんりん

サブ 1・ロリヤスフィール      サブ 2・みつづりーじょん

1番のルート、2番のルート、どちらにしようか迷ってますが、現状は1番ルートですね。

1番ルートがトゥルーエンド、2番ルートがハッピーエンドのイメ



ージです。

バッドエンド？ そんなの作る余裕ないよ（T T）

最近はみなさんの感想のおかげで、りんりんもお話に深く関わってもらおうかと思ってます。 黎慈の漫才相手として最適なの。

作者「ヒロインどうしよっかなあ……」

友人「全員行けよ、男だろ」

作者「無茶言うなよwww」

## 第五章 狂躁の夜を越えて（1）

そこは雪と氷に閉ざされた、万年氷獄の世界。

周囲数十キロ圏内にわたっても、町や村は一つも無い。

ただひっそりと、されど荘厳に、一つの城が存在しているだけだ。

生命の息吹が聞こえない、白銀の牢獄。

不夜城と喻えられるその場所は、その地に住まう者と住まわざる外者を何よりも隔てる。

そんな城の中庭で、一人の青年と一人の少女が稽古試合をしていた。

青年は目元が隠れる程度まで伸びた髪、襟足は首が隠れる程度。黒装束に蒼槍、右腕には衣装と同じ漆黒の鎖を巻いた、黒い騎士のような姿。

少女は月光で染めたような白銀の髪、腰下まで伸びるそれを二束に分けて結び、末端のほうで一つに纏めている。

紫紺の外套に腕鎧ガントレットとグリーンヴ、胴部にはスケイルアーマーを装備している。

青年と少女は、互いの得物を持って相對していた。

「ふっ、てえいつ！」

「踏み込みが甘いぞ」

少女の繰り出す攻撃を青年は容易に捌く。

所々での確な助言を出しつつ、二人は得物を振り合う。

「はっ、はぁ！」

「ほい、ほいっ」と

動作に無駄があるものの、少女のスジは悪くない。

ただ青年は恐らく、踏んできた場数や経験が違うのだろう。

懸命に頑張る少女の姿とは裏腹に、青年はじゃれて遊んでいる面持ちだ。

「ふっ、せっ！」

「足元がお留守だな」

「っ！」

「あと上もな」

「痛っ！？」

足運びの疎かさを指摘されたことに意識が足元へと移り、その隙に生まれた上半身の硬直を青年は見逃さない。

その一瞬の空隙に槍をぐるんと反転させ、柄の部分で少女の後頭部を打つ。

全く威力はない。せいぜい小突かれた程度。

しかし練習用の武具とはいえそこその硬度の武器であるため、目の前に白い火花を散らせながら少女は地面に倒れた。

「うう……今のはずるい！」

「ははは、そんなに怒るなよ」

涙目になって頬を赤く染めながら怒る少女に、青年は穏やかな微笑で返す。

実戦であればずるいや卑怯などといった訴えなど、無力に等しい叫びだと少女は理解している。

そしてそれを理解した上で少女がそんなことを言っているのだということを、青年もまた理解していた。

本当は直接的な戦闘には向かない少女。

これは無理にお願いをして稽古をつけてもらっているのだが、先ほどの言葉は少女の青年に対する信頼からくる甘えである。

その信頼と甘えを、同じく信頼と甘やかすことで青年は柔らかく受け止める。

「少しずつ動きは良くなってるよ。けど、やっぱり経験不足だな」

「まだ実戦に出られる実力がついてない？」

「ああ。もつと自分と相手を俯瞰で捉えるんだ。どこかに意識が偏ると、どこかに意識の隙間が出来る」

この稽古が始まってからどれくらい経つのだろう。

数年前まで、とある事情から少女には命の期限が迫っていた。

そんな小さな命を救うために、青年は独り、世界を駆け回っていた。

少女の友人や家族は、彼女を救うために必要なモノを手に入られる確率に、諦観の念を抱く者がほとんど。

たった一人諦めなかった青年のおかげで無事に生還した少女は、

青年に感謝しながら、彼と同じく世界を巡りたいと言い出したのだ。

「剣だからって剣の戦い方をする必要はないぞ。殴ってもいいし蹴ってもいい。身体全体を使え。感情を高ぶらせたり、熱くなってもダメだ」

だが青年は別に、遊びで世界を周っているわけではない。

初めは少女を救うモノを探しに行く旅だったが、訳あって青年はその後世界巡りをする事になっていた。

その理由を、青年は決して語らない。

「感情は出力を高めるが、その分無駄な力も掛かる。適切な力の使い方をするなら、基本的に感情は表に出さないことだ」

「気を張って感情を乗せたほうが、力が強くなる気がするけど？」  
「それはそういう気がするだけ。怒りや憎しみ、感情のままに力を振るうより、ただ躊躇いをなくした無感動な力の方が強いんだ」

少女にとって大事なものや人はいくつかあるしいるが、自分を抑えきれないほどに愛しいと思うのはこの青年だけだった。

たった一人、自分を救うために命を懸けた青年。

家族も友人も諦めた自分の命を諦めなかった彼に、どれほどの感謝をしても足りない。

「そつかあ。魔術なら負けないんだけどなあ」

「おいおい、勘弁してくれよ。魔術戦なんてしようもんなら、3秒で負ける自信があるぞ」

「ふふー。そこらの魔術師が百人で来ても余裕なんだから」

「何故そうなるかって過程を理解してないのに、工程も詠唱もすっ飛ばして結果を作り出すとかもう魔術じゃないだろ……………」

少女が持つ特異性。

全身が魔術回路であるといってもいいほどの魔力の塊である少女。

『秘蹟』と呼ばれるその業<sup>わざ</sup>は、少女の魔力で理論上可能なモノであれば、過程を無視して結果を作り出すという、聖人が持つ『奇蹟』の力に近い能力だ。

まだ幼かった頃は力の使い方を理解していなかったために扱えなかったが、その能力をフルに扱える今では、人間の魔術師で彼女に敵うものは居ないだろう。

他愛なく話をしつつ、思い出したように少女は青年に問いかけた。

「…………ね、あとどれくらい、ここに居るつもりなの？」

青年の顔を覗き込むようにして訊ねる。

前回の旅から青年が帰ってきてから既に三ヶ月。

しばらくはゆっくりすると言っていた彼を、無理やり城に迎えて押し込んではあるが、本当に出発しなくてはならない日が来れば、彼は迷うことなく城を跡にする。

だからそれまでには、彼の背中を守れるくらいには強くなりたい。

そうなればきつと、いつものように、私を置いていくことはしないだろう。

「そうだなあ、ざっと三ヶ月くらいか」

「え、もうそんなに時間ないの!？」

「そりゃあね。半年も休めば十分だろう。だからそれまでに、もう心配しないでいくらいにはなってくれよ？」

「うー……頑張る……」

思ったより短かった制限時間に頂垂れる。

服に纏わりついた粉雪をさっと払い、少女は剣を仕舞う。

「うん、今日はもうご飯にしょ！」

「わかった、それじゃあ稽古は終いだな」

「何が食べたい？」

「そーだなあ……って、作るの俺だろ」

「ふふふ、そうだよー？」

屈託無い笑顔を見せる。

戦士として優秀で、魔術にも長けていて、料理も出来る。

少女から見れば、彼ほどの男は世界に二人と居ない。

愛しさを感じつつ、少女はいつものように青年にリクエストをする。

「私あれが食べたい、ほら、えーと……ビースト、ガノン？」

「なんだその魔獣みたいな名前。ビーストロガノフだろ？」

「そう、それ！」

「ほんとアレ好きだなあ。一週間に一回は食べてるぞ」

ばやきながらも少女の言うことをそのまま聞き入れる。

少女も甘えすぎではあるが、青年も甘やかしすぎだろう。

青年の左腕に、少女は思い切り抱きつく。

「おい、当たってるぞ」

「当たってるのよ」

仲睦まじく話しながら、二人は城の中へと戻る。

きつとこの幸せは、永く続くだろう。

少女はそう信じて疑っていなかった。

共に旅に出て、いつしか二人が決別することになる数年後のこと。

青年が彼女に稽古をつけていた理由。

それがいつの日か、世界に仇為す魔者となる自分を。

少女の手で、殺してもらったためだったと知るまでは



(ん……夢か……?)

言い知れない虚脱感から目覚める。

どこか別の時代、遠い異国の出来事。  
見たことのある銀色の少女と、黒い青年の儚い夢物語。

周囲に幸福を振り撒くような仲睦まじさ。  
嫉妬すら覚える幸せの形を見せられながら、二人が城に入るところで目が覚めてしまった。

(なんだろう、あの夢……いや、あれ?)

確か俺はバーサーカーと戦って、傷を負った士郎を家まで運んで  
遂に限界が来て、気絶するように眠ったはずだが……

(……なんだ、逆さまになった山が二つ?)

霞がかった視界。

瞼を擦りながらゆっくりと目を凝らす。

降り注ぐ陽光を遮るように、視界を塞ぐ二つのお山。

頭の下には何やら柔らかい感触。

寝そべる俺の身体には、紫紺色の上着が掛けられていた。

（ああ……そういうことか）

事態を把握して、あくまで冷静に分析する。

外套の上からでもそこそこ大きいことはわかっていたが、まさかその上でさらに着痩せするタイプだったとは。

Eか？ Fか？ 俺の経験値的にDは小さすぎるように思うが…

……何の経験値かは置いといて。

下から持ち上げたりして、たゆんたゆんと弄びたい衝動に駆られるが、それを鋼の精神で抑えつける。

ついでに下腹部のほうで鋼になりそうなモノも抑え付ける。

朝の生理現象の影響もあって、簡単に硬化の魔術がかかってしま  
うのだ。

そう、男の子は誰だってみんな、硬化の魔術の使い手なのである。

……………朝っばらから何考えてんだ、俺。誰が上手いこと言えっ  
て言っただよ。

こんなことで自分のサーヴァントに殺されたりしたら、聖杯戦争

の歴史に新たな伝説を打ち立てることになる。

そんな末代までの恥を、こんなところでよしとするわけにはいかない。

太ももの感触を惜しみながらも、俺は沸々と湧き上がる欲望に負けじと、勢い良く起き上がった。

……………下の方は起き上がってませんよー？

「よっ、と」

「あ、起きたのね、マスター」

呼びかける麗声にビクツとする。

先ほどまでの不純な思考を振り払って、彼女の方へ向き直った。

フェンサーも必要最低限の機能を残して仮眠していたのだろう。

携帯やパソコンで言う、省エネモードみたいなもんか。

眠ってしまったてからの状況を知らないので、フェンサーに確認を取る。

「あれからどうなった？」

「特に何も無かったわよ。シロウはまだ寝てるだろうし、リンはその看病。セイバーはマスターの手当てが出来ないからって、道場の方に行ったわね」

「そうか……………」

「ここは、居間か？」

ここなら周り見通せるし、何かあっても即座に対応できるからか。

一応屋敷自体にも結界があるみたいだな。  
侵入者探知の結果……機能自体はシンプルだが、中々優秀な結果だ。

時間は……昼前か。

アルバイトに間に合うかどうか　　というより、アルバイトなんてしてられる状況じゃなかった。

とりあえずポケットに手をつ込み、携帯が壊れていないことに安堵しつつバイト先に休みの電話を掛ける。

家族が危篤なので、1、2週間ほど出られないと伝えた。

正直家族なんて一人も居ないが、店長には暗示をかけてあるので心配は無いだろう。

さらに昨日　時間的には今日だが　思いついたことを実行するために、もう一箇所に電話を掛ける。

「うつす、おっちゃん。アレさあ、今日取りに行こうと思うんだけど、調子どう？」

『おお黒守の坊主か。パーツも輸入して改造も終わってっから、あとはチューニングすればいつでも出せるぜ』

「おお、サンキュー。昼過ぎにそっち行くから、チューニングしてよ」

『よしよし。2時間くらいで終わるだろうから、それくらいに来てくれ』

「了解」

プツ、と電話を切る。

楽しそうに電話していたからか、フェンサーが怪訝な目で俺を見

ている。

「誰と電話してたの？」

「新都にある、外国産二輪自動車専門店」

「？ バイク買いに行くの？」

「いや、ずっと前に予約済みのヤツがあるんだよ。昨日走りまわされたおかげで、足が必要だと思ってな」

本当なら自分への卒業祝いとして、ロンドンに一緒に持って行くかと思ってたんだが。

正直乗り回したい欲求がずっと燦っていたのでこれもいい機会だ。街案内という名の地理把握に、きつとご活躍してくれることだろう。

「くう……あ」

大きく伸びをしながら、自身の状態を確認する。

魔力は3割、4割程度まで回復。肉体の外部損傷はもう治っている。

身体機能に異常もなし、魔力は今日一日何事もなければ完全に回復するはずだ。

フェンサーの方は………

「フェンサー、何か問題はあるか？」

「ん、余分な魔力供給はカットしてあるけど、それ以外は至って普通よ」

「そうか。魔力供給はいつでも調節できるし、今のところ問題無しだ

な」

ラインである程度確認できるが、本人が隠そうと思っていることまでは把握できない。

こちら側にしてもそうでなければ、プライベートも何もないのでそれは構わないのだが。

マスターとサーヴァントの、お互いが必要とする情報の優先度が同じだとは限らない。

少しの負傷でも知っておきたいと思う側と、自身の性能が劣化しない程度の傷なら構わないと判断する側。

どちらがどちらでも同じだが、この状態の時に相手に伝える必要は無いとしている場合、自分には相手の正確なパラメータが伝わらない。

信頼関係があればそのようなことはないだろうが、確認を取っておくにこしたことはないだろう。

「そういえば……なあ、フェンサーの真名ってなんだ？」

「……またいきなりな質問ね。それじゃあ……貴方は誰だと思う？」

「わかんねえよ。銀光の剣に魔術に造詣の深い英雄……しかも女性……どっかの聖人？」

てかその剣がまず聖剣なのか魔剣なのかもわかんねえし」

「この剣は神造兵装じゃないからそんな上等な武器じゃないわよ。受けてる加護や内包する力はそれらに劣らずだけど」

あれ、神造兵装じゃないのか。

神話や伝承に語られる英雄が扱う武器のほとんどは、人ならざる

モノが作り出したものだ。

武器防具に限らず、そういった武装を神造兵装と呼ぶ。

超常の力によって奇跡を起こし、その英雄と生涯戦場を共にした  
武具。

それこそが英霊たちの持つ英雄としての自身の象徴であり、宝具  
と呼ばれる物質化した奇跡だ。

その宝具を真名と共に解放することで、サーヴァントはその真価  
を発揮する。

たとえ基本能力値において劣る相手であろうと、所持する宝具が  
強力であるのは警戒するに値する。

サーヴァント同士の総合的な能力だけで優劣が決まるわけではな  
いのが、聖杯戦争を苛烈な戦いにしている要因だろう。

未だ真名解放をした宝具の一撃を見たことは無いが、想像を絶す  
る威力を秘めているであろうことは容易に理解できる。

英霊の真価であるその宝具を正しく知るために、英霊自身の真名  
を知るのは重要なことだ。

過去、その英霊が何を得意として、どのような戦術のもとに戦い  
どのような戦術のもとに敗北したのか。

死した原因そのものは英霊となった彼らの弱点そのものでもあり、  
得手不得手を知るのは聖杯戦争を攻略する上で必須だ。

「真名は……教えられないかな」

「は？　なんで？」

「私の英霊としての事情故……かな。それ以外のステータスは意識

を集中してみれば、レイジにも把握することが出来ると思うけど」  
「うん？ …………… おお、こんな風になってるのか。聖杯戦争のシステムは良く出来てるなあ」

これもマスターに対する聖杯のバックアップの影響か、フェンサーだけでなく出会ったサーヴァントの基本情報が頭の中に浮かび上がる。

最初に出会った黒いサーヴァント……あれ、ライダーだったのか。乗り物なんて乗ってなかったからイメージが違う。

恐らくその乗り物自体が宝具なのだろう。つまりライダーに宝具を出されたら轢殺されるわけか。ゾツとしないな。

セイバー、アーチャーの基本情報もあるが、外見上から見て取れる程度の情報しかまだ無い。

バーサーカーについては……いや、おかしいだろ。スペックが反則とか言うレベルじゃないんだけど。

不死身性を備える頑強さと、絶命した後に自動で蘇生したことを考えれば、護りと生存に特化した宝具なのだろう。

ということは、パラメータ自体は素であるの能力値であるということか。

マスターであるイリヤスフィールの能力もあるだろうが、元々高い能力を狂化までしているのだから、化け物じみた力も納得である。

で、肝心のフェンサーなんだけど……基本情報は、まあわかる。けどその他のステータスがほとんど？ になってるんだけど、どうしてくれるのか。



能力値はセイバーよりワンランク劣る形だが、平均的で優秀だ。魔力が尋常じゃないくらい高いが、昨日の魔術を見れば納得せざるを得ない。

無属性のクラスで呼び出されたからか、クラススキルは何も無い。クラス固有の優位を持っていないのは俺の召喚のせいなので、そこはホント申し訳ない。

ただ元来備わっている技能は失われてないようなので、そこは安心。

そして戦略の要となる宝具なのだが……なんだ、これ。

該当項目が三つ？ てことは、フェンサー宝具三つも持ってるの？ 何それ、反則じゃないの？

「英霊一人に宝具が一個だなんて決まりも制限も無いわよ？」

ラインから素で俺の心を読むのはやめてくれまいか。

「え、複数宝具持つてるサーヴァントって居るのか？ ならそれだけで有利じゃん」

「単純に考えればね。でも、宝具の使用は凄まじい魔力を消費する。併用なんて出来ないものがほとんどだし、連続使用だって難しいもの」

「あ、そうか。魔力も無限ってわけじゃないもんな」

「だから相手の能力と状況を見極めて、適切な宝具を使用するのが重要よ。無駄撃ちに終わったりしたら、それだけで戦況がひっくり返ることだってある」

「でも複数所持してるってことは、様々な状況に適した宝具を備えてるってことだろ？ 判断さえ誤らなければ、やっぱり有利だろ」

この相手にこの武器だと相性が悪いから、こっちの武器に装備し直し、みたいなことが出来るわけだ。

一つの事に特化したモノはその分野では無類の強さを発揮するが、それは他の分野では適応できずに十全な力を発揮できないことになる。

「そうとも限らないわ。宝具を一つしか持っていないってことはね、その英霊は生前、その武装一つだけで戦場を勝ち残って生き抜いてきたってことよ。

何が出来て何が出来ないかを正確に把握し、時にはどんな不利な戦況でさえ覆せるほどの威力を秘めた宝具ってことになる」

「ああ、なるほど。その宝具が比類なくらい強力であるのかもしれないし、その英霊が宝具一つのみで様々な戦況に対応できる力を秘めていることにもなるのか」

やはり戦いというものは奥が深い。

ゲームなどとは違って、決まった必勝法などない。不利な条件、有利な条件、勝利条件や敗北条件が毎回異なるのだから、その戦いに毎回勝利するというのは容易いことではないだろう。

だからこそ燃える。

相手より能力が優れているから勝てるとも限らないし、相手より能力が劣っているからと言って負けるとも限らない。

競い合いとはそうあるべきだろう。誰にも勝利の可能性があるからこそ、努力する意味があるし価値がある。

やばい、楽しくなってきた。

「で、何の宝具持ってた？」

「……秘密」

「おい、ふざけんなよ。真名も宝具もわかんないや、戦略も立てられねえだろ」

「そこは申し訳無いけど、納得してもらうしかない。ごめんなさい」  
「え、あ、うん」

くそ、そんなふうに素直に頭下げられたら何も言えなくなる。

主従関係ではあるが、彼女は下僕でも奴隷でもなく、大事なパートナーだ。

使い魔として扱うとか道具として扱うとか、色々線引きは考えなきゃいけないけど、少なくともそんなに扱いでいいものではない。

なまじ人型だけに、そういったモノとしての合理的な扱いが出来ないでいた。

（甘いなあ、俺）

（甘いなあ、マスター）

主従揃って、考えていることは同じだった。

「まあいいさ。おまえが優秀なのは解る。信頼もしてる。戦術や戦略はこつちで考えるから、その場での判断はおまえがすればいい」  
「ありがとう、レイジ」

無邪気な笑顔で答えるフェンサー！。

もうだめだ。それで本当に何も言えなくなった。

彼女を召喚した時から、俺に対する信頼は伝わってきている。  
そんな笑顔をされたなら、やっぱり俺も信じるしかないだろう。

基本的な能力は把握している。

指示もちゃんと聞いてくれるのは昨日でわかっているし、ここぞ  
というときに切り札を解放する判断は、彼女に任せておこう。

士郎が目覚めたのか、何やら奥の部屋で騒いでる二人のもとに向  
かいながら、これから本格的に始まるだろう戦いに思いを馳せてい  
た。

サーヴァントのステータスと情報が更新されました。



## 第五章 狂躁の夜を越えて（1）（後書き）

後書き長くなってます。作品の余韻を壊したくない方は注意

おはこんにちばんわー。

前回酔いのままに後書きしたヒロインに関する内情の吐露に関して、ここまで反響があったことにビビッてしばらく（リアルに）小躍りしていた作者です。

そして更新の度に感想しか見てなくて、気付いたらお気に入り登録が500突破。

（。。。）ハア？ 俺が投稿して3日目ぐらいに見たときは80くらいだったよ？ この一週間で何がどうなってんの、ガクブル。

今回感想が25通も届きまして大変ありがたいことなのですが、この度は返信を簡潔にさせて頂いております。

返信開始時間と最後の時間を見て頂ければ解ると思うのですが、返信を簡潔化した上で30分以上かかっております。返信内容を考えていた時間も合わせるとざっと……………

そのあたりも鑑みまして、ご容赦下さればと思います。

けれども感想は何よりも執筆の意欲、力となりますので、是非ともよろしく願います。

余裕がある限り、内容も込めまして返信していきたいと思います。

独り言のつもりがいつの間にかヒロインアンケートになってたw  
みつづりーじよんの元ネタわかる人いたんだろうか。  
てか俺の酔っ払った後書きのせいなんだが、豊かなおっぱいwフェ  
ンサー、遠坂凜wりんりんになってるのは吹いたw

とりあえず面白そうなので統計とってみました。

厳正なる審査の結果……………（作者の友人三人含む）

フェンサー： 9 票

凜： 15 票

イリヤ： 9 票

美綴： 5 票

ハーレム： 5 票（作者の友人三人）

特別枠

セイバー： 2 票

ライダー： 1 票

実際のところ、自分の気持ちに素直なよい子の読者様が多くて、厳  
正なる（笑）審査の結果（キリッ）になってるんですけども…………w

凜が一人だけ頭飛び出てワロタw 次に同率二位でイリヤ、フェ  
ンサーですね。フェンサーがここまで来るのは面白い結果だ。

美綴は後半人気でしたが、やはり裏世界と関わりが無いこともあつ  
てヒロインには向いてないと思われる様子。

ただ黎慈が日常に還ることを選んだ時のヒロインとして考えてるん  
ですよ。

二人のヒロインの間で黎慈の取り合いが見たいというご意見が多かったです（笑）

みなさんにシヨックかもしれない裏話をしますと、初期構想ではルートに入らなかったほうのメインヒロインは死亡する予定です。だって聖杯戦争だもん。

ですが現在、黎慈との組み合わせキャラそれぞれに人気が出てきて、どうしようかと考えています。

キャラクターが死んでしまうのは私も嫌ですし、人死に出る世界観だとキャラを殺さなきゃ面白い作品に出来ないか？と言われれば、ノー、と答えられます。

セイバーとライダーのご意見があったのですが、ここから二人ヒロイン化しようと思ったら、士郎と桜には死んでもらわないと困ることに……その後にフェンサーも。

ただセイバールートに関しては今の話取っ払ってザクツと構想立ててみた（執筆時間削ったりしてないよー？（笑））。

要点まとめ。

- 1．その場合は士郎は聖杯戦争不参加、又は割と初期に死亡。
- 2．とある出来事からヘブンスフィール・アナザールート突入。
- 3．そして最終的にセイバーオルタがヒロインに。
- 4．こちらだと分岐でライダーもイケます。

どんな構想立てたんだよ（笑）とか言わないでー。私なりに斬新かつ面白いだろうストーリーを練ったんだよー。書くかはわからない。執筆確率、今のところ3%。

今ですと2つルート書くのはしんどいかなーと思ってるんですが、



執筆終了した時には正式にアンケートとるかもしれないです。

現在はもう一つのルート、hollow世界観の短編、セイバール  
ート、別ジャンルで新作、引退と選択肢があります。

長々と後書きしましたが、感想のついでにでもご意見いただければ  
と思います。

ルート分岐、ヒロインの生死、二つ目執筆の内容などなど。

それでは、また次回にお会いしましょう。

## 第六章 狂躁の夜を越えて（2）

居間を出て廊下を歩きながら、二人の声がする方　屋敷の奥の部屋へと足を運ぶ。

なにやら不毛な言い合いをしているようで、マスターは人だと思  
うな、手段を選ばず倒せ、と言う凜に対し、じゃあ何で自分を殺さ  
なかったのか、という土郎の問い。

気が乗らない、興が削がれたというのもわからないでもないが、  
目標遂行に私情を挟むのは戦闘者としてどうかという話だろう。

凜がボケているのなら土郎は抜けている。

「楽しそうだな、おまえら」

「「え？ ……っ!？」」

俺の存在に気付かなかったのか、正座して向き合った状態から跳  
んで後ずさる。

後ろにはフェンサーが控えている。

別段敵意を放っているわけではないが、予期せぬ第三者の介入に  
二人は目を白黒させていた。

「な、なんだ、黎慈か…… おまえも大丈夫だったんだな」

「こっちの台詞だよ。背中に穴開けてたわりに、随分元気そうじゃ  
ねえか」

「衛宮くんの傷ならもうバッチリ塞がってるわよ」

「あの傷がか？ そりゃすげえな」

骨には達していないが、結構深い傷だったはずだ。強力な自然治癒の呪いでも備えていたのだろうか。

いや、ロクに魔術も使えない士郎がそんなこと出来るはずもない。たぶんその治癒能力は、サーヴァントと契約した特典か何かだろう。

「で。そっちは話終わったのか？ 何やら不毛な言い争いが聞こえてたが」

「いや、遠坂が矛盾したと言うからさ」

「うるさいわね。そうよ、衛宮くんなんて取るに足りない相手だつて、私が油断した結果よ。ま、言うなれば心の贅肉ね」

「あ、それ前にも聞いたことあるな。遠坂が太ってるってことか？」

「ふふふふ。面白いこと言うのね、衛宮くんは」

凜の背後がメラメラと燃える。

それはもう極上の笑顔で、あかいあくまは怒っていた。

無意識に、士郎が半歩後ずさる。

「でもこれからは余計な言動は控えたほうがいいわよ。軽率な行動は死を招くだけだから」

「」

あまりの恐怖に士郎は沈黙する。

二度目はないと本能的に理解しているのか、必死に首を振って頷いていた。

そんな中、俺は無言で凜に近寄って

「ほい」

「きゃんっ!？」

凜の脇腹を無造作に掴む。

その可愛らしい悲鳴を無視してムニユムニユ。

程良い掴み心地。ほう……まあこのくらいなら普通に許容範囲。  
必要以上に肉を削ぎ落とす女子が多い昨今、このくらいの肉付きの方が男は好みなのではないだろうか。

細ければいいというものではないし、ぽっちゃりなんて言い訳も認めない。

凜の場合、この肉感がとある一部分にも必要かもしれないが……

……

「うん、女の子として気にするほどのお肉はついてな　ぐげっ!  
!？」

途端、強烈な衝撃が顎を打ち上げた。

危つく舌を噛みかけたがセーフ。

というか、今気にするべきは舌ではなく、俺の顎骨が砕けていないかどうかだ。

膝をつき、顔下半分を押さえながら蹲る。

「……い、いいか士郎。これ……これが軽率な行動ってヤツだ……」

「あ、ああ、わかった。だけどそんな身を以て実践しなくても……」

……」

士郎の言い分はごもつとも。

親の仇を見るような修羅の眼光を俺に向ける凜さんは、未だかつてないほどに恐ろしい気を放っております。

なんだろう、俺の確認行動はそんなにいけないことだったでしょうか？

「ほんと、この男共は……！」

「痛え……ちよー痛え……」

（今は……レイジが悪いと思う）

自分の信頼するサーヴァントにも見放された。

泣きたい。

「……ふん。私の話はそれだけよ。後は貴方たちでサーヴァントと話し合って勝手に訊きなさい」

「……………」

「何よ、黎慈。文句あるの？」

若干イラッとした素振りを見せながら俺を睨む。

無言の抗議を含めて目を向ける。

そんな俺の視線は、凜の一部分とフェンサーの一部分を行ったり来たり。

それに気付いた凜が、むっとした表情でこちらを見据えた瞬間

「……へっ」

「っ……………ねえ、黒守くん。今もしかして鼻で笑った？ 笑ったわよね？ 笑ったんでしょ！？ いいわよ、あんたがそうならこっちにも考えってモンが……………！！」

「ちよっ、やめる遠坂！ 頼むから家で魔術をぶっ放すのだけはやめてくれー！」

あまりの怒りに魔術刻印が起動する凜さま。

わー、きゃー、と喚き立てながら、呆れたフェンサーと駆けつけたセイバーが止めるまでこの騒ぎは続いたのである。

一頻り騒いだ後、衛宮家を跡にして遠坂と共に帰路につく。

サーヴァントは目立つので、さすがにお互い霊体化させている。

ちなみにこういう形で騒ぎが収まったかと言うと、凜が俺と士郎

を気が治まるまでボカした拳句、土下座する方向で事なきを得ました。

いやね、俺だって殴られるのは本意じゃないんですよ？

とりあえず現在誰に一番謝りたいかと言うと、侮辱いたしました凧さまではなく、迷惑を掛けた己がサーヴァントでもなく、見事なとぼっちりを受けた士郎にです。

本当に申し訳ありませんでした。

「痛いよう……朝から打ち身だらけとか……聞いてるか、凧？」

「……………」

「もう、拗ねるなよー。凧ー？」

「……………」

「勇気りんりん、私パンダししょ　うぎゃあっ!？」

痛い痛い痛い!？

「打撲傷の上からつねらないで、お願い！」

「あんたほんと昔から懲りないわよねー」

「自分で言うのもなんだけど……これがボクの持ち味なんです……」

抓られた部分を必死にさすりながら答える。

ああ確かに、昔からこうやって絡んでは、軽くあしらわれていたような気がする。

魔術師は普通一般人を遠ざけるし、同業者であつても心を許し合うような関係には至らない。

それは遠坂凜も例外ではなかった。

知り合った当初に同じ中学に編入してから、そんな暗黙の了解などお構い無しに俺は迷惑そうにしている凜に話しかけていた。

そういうルールや掟なんても、俺にはよくわからなかったし、どうでもよかったから。

実際に俺自身が他者に対して線引きを始めたのは中学を卒業してからで、これまでと変わらない黎慈を演じつつ、内側では冷たい黒守が潜むようになった。

俺は基本的に誰のことでも好きなのだが……というより、俺は人間自体が好きなようで、誰とでも仲良くなれるのは同時に誰のこともどうでもいいからだとか。

昔にそれを神父さんに指摘されて、その本質を知ったときは少しショックだった。

曰く、ヒトを好ましいと思うのではなく、人を愛しいと感じるようにならない限り俺はこのまんまらしい。

ただそんな自分を気に入ってもいるので、生き方の一部となったこれを今さらどうこうしようとは思わない。

「そっぴや、学校の基点はどうするんだ？ 今日からアルバイトはしばらく休むから、付き合えってなら付き合うけど」

「うーん……今日はいいいわ。昨日のうちに半分以上は潰したし、今日は日曜日だもの。わざわざ人がいない時に発動はしないでしょっしね」

おや、意外。



昨日は全部潰さなきゃ気が済みそうになかったのに、どういう心境の変化だろうか。

結界の主目的はライフドレインだろうが、他にもマスターを閉じ込める意味も持っているはずだ。

前者は今日だと人が居なさ過ぎて達成できず、後者も俺や凜が学校に居ない時点で意味は無くなる。

魔術師として考えるなら、日曜日に発動するのはどう考えても効率が悪い。

「じゃあ俺はこれから家に帰ってから新都に向かうけど……凜はどうする？」

「私は家に戻ったら一度眠るわ。昨日から一睡もしていないし。夜にはまた出かけるでしょうけど」

「そうか。それと明日からのことなんだけど、学校に居る間は戦闘無しにしないか？」

「え？」

いや、そんな間の抜けた顔をされても。

「俺としては学校には出席しておきたいし、結界のことも気になる。だから学校に居る間だけ、不戦条約」

「いいわよ、別に。でも放課後とかに意味も無く残っていたりしたら、容赦なく背中から撃つわよ？」

「こっちもその首落としてやるよ。出来れば、おまえとの戦いは最後まで取っておきたいもんだが」

お楽しみは最後までお預けがいい。

どれほどのマスターとサーヴァントが居ようと、凜なら生き残る

はずだ。

ライダーは言うに及ばず、キャスターやアサシンでも彼女とアーチャーには勝てまい。

最優のサーヴァントと謳われるセイバーも、マスターがあれほど未熟では不利な戦闘を強いられるだろう。

唯一例外を挙げるならバーサーカーだが、アレに関してはこちらとしても追々対抗策を練らなければならない。

「なに、メインは最後まで取っておくタイプ？」

「そうだよ。どんな奴らが相手だろうと、おまえ以上の魔術師なんているはずがない」

「え……あ、う」

真っ直ぐに目を見据えて宣戦布告する。

俺にとって、遠坂凜以上の敵手は存在しないと。

だっていうのに、何やら言葉に詰まっている凜。

そんなにおかしなことを言っただつもりは無いんだが……………

「ふ、ふん。私も貴方との戦いは楽しみにしておくわ」

凜からの宣戦布告も耳にして、俺たちは別れた。

坂道を上っていく彼女の背を見送る。

背中が粒ほどにも見えなくなってから、俺は自分のアパートへと歩き出した。

「何これ……………犬小屋？」

そうして俺の部屋を見たフェンサーの第一声がこれでした。

「はい、昨晚に引き続き不届きな発言頂きましたー。もう一回言っちゃうとフェンサーさんには罰ゲームが与えられマース。仏の顔は三度までー」

ちなみに俺の忍耐も三度までー。

てゆうか、一学生には不相応なほどいい部屋ではあるはずなんだが……

1LDKの風呂トイレ別、洗濯機やテレビ、ベッドなども備え付けで完備、お値段は少し張りますがそこはバイトしてれば問題ない程度。

実は曰く付き物件だったのだが、そんなもん自分で抜っちゃいました。

ダイニングに入って冷蔵庫を開き、アップルジュースを取り出す。どうせ必要ないので飲まないだろうが、一応フェンサーにも飲むかどうかを目配せで聞いてみる。

そしたら案の定、彼女は首を縦に振って

「え、飲むの!？」

本来サーヴァントは睡眠や食事を必要としない。それゆえに返ってきた答えに戸惑いながらも、二つ分のコップにアップルジュースを注ぐ。

しかしここを犬小屋と称するには、生前どれくらい豪華なお家に住んでいればそうなるのだろうか。

やはり過去の英雄ともなると、報奨として与えられる家とかも桁違いなんだろうーか。

生まれてから死ぬまで戦争していたわけでもないだろうし、家族も居るだろうしそういう可能性もあるか。

聖女とか聖人の類だとしても、宗教や神が真に信じられていた時代、正統の教会や修道院はたいそう立派な建造物だったと聞くし。

だからといって、居住に対する文句を認めるわけにはいかん。

机の上にコップを置きながら、フェンサーにでん、と向かい合う。

「不満があるなら家に居る間は外で待機でもいいぞ」

「わかったわ。じゃあホテル代ちようだい？」

「このサーヴァント、一体何をほざきやがる」

いくら現代の知識が刷り込まれているとはいえ、この適応力は何事か。

いやそれ以前に、過去の聖杯戦争においてホテルに滞在するようなサーヴァントが居ただろうか、いや居ないに違いない！

もし居たなら出て来いよ。説教してやるよ、俺が。

「贅沢言うな。俺のサーヴァントなら尚更だ」

「まあさっきのは冗談だけれど。生活レベルの向上は進言いたしますわ、マスター？」

「う……確かに備え付けの家具使い回して、他のもりサイクルショップで買ってきたもんばかりだけどさ」

別に節制が趣味と言うわけでもないが、俺一人で稼げる金銭で生活していこうと思えばそれなりの工夫が要るわけ。

魔術に関すること以外で、黒守の財産に手をつけるのもプライドが許さないわけで。

「ウチの屋敷自体は冬木市に近い場所に移してあるんだけどなあ」

「なんで自分が住んでる場所に拠点を置かないの？」

「黒守の屋敷ってことは、俺個人の陣地であり、中には工房もある。

それを凜の領域である遠坂の土地に設置するには、オーナーにそれなりの対価を支払わなきゃならないからさ。

凜も後見人の人も無茶苦茶な要求はしてこないだろうけど、俺がこの土地にいる間ずっと対価を支払い続けるのも問題ありだろ。屋敷と工房を開いたままにしておくのは便利だけど、それにだって維持費や管理費がかかる」

飲み物を注いだコップに口をつける。

ここを永住の地、もしくは故郷と定めてしまうのならまた違う考えにもなるのだが、今のところはそんな予定もない。

卒業すれば時計塔のあるロンドンに移住するわけで、永住するつもりは無いが、もしかしたらそのまま帰ってこない可能性だってある。

俺が死んだ時には魔術協会が遺品などを屋敷ごと回収にやってくるだろうが、その土地のオーナーにもいくらか黒守の遺産が渡ってしまうわけで、それはいただけない。

黒守の遺産は全て俺一人が使用し、俺が最後に後始末を受け持たなきゃならない大事なものだ。

「ふうん。それならさ、レイジがリンと子供を作ればいいんじゃないの?」

「ブフツ!? げほッ、けほ……っ!!」

飲む途中だった液体を盛大に噴出し、反射で自分の顔面に噴射させながら俺は咳き込むのを止める。

このサーヴァント、さっきから何を口走っているのか!?

「だってクロガミとトオサカで一つの魔術の大家になってしまえば、レイジがそういうことで悩む必要もなくなるわけでしょう？」

優秀な母胎で優秀な子孫も残せて、一石二鳥じゃない」

「ち、違うでしょう？ 俺が家をどうにもできない問題から、何故に凜と、その、こ、子作りする話になるんでございましょう！？」

くそ、こういう話題には耐性があるはずなのに！

まさか自分のサーヴァントと話してるときに、こんな流れに持っていかれるとは予想だになかった。

そしてなまじとんでもない美人で可憐に見える少女の口から、そんな生々しい発言が飛び出るとは想定外だった。

いや、もしかしたら 彼女の生きていた時代ではそういう事が普通だったのかもしれない。

政略結婚という言葉もあるように、魔術師の家系で一子相伝の子以外の弟妹たちをどう扱うかは、当主が自由に決定する権利があったはずだ。

他家とのパイプが欲しい者、優れた魔術師の遺伝子を欲する者、理由は様々だったろうが、そんなやり取りが常識だった時代もあるのだから。

だからと言って、現代の魔術師である俺たちにまでその基準を当てはめるのはどうだろうか。

「家がどうか母胎がどうか、そんなので決めるのは間違ってるだろ。そもそもそこには、相手を思いやる心が欠けている」

「不思議なことを言うのね。魔術師はみんな、祖先から子孫に至るまでの一族全てを含めて、根源へと至るための道具でしょう？」

そこに余計な感情や思考を挟む余地なんて無い。レイジとリンなら、中々の純血種……いえ、混血種ハイブリッドが生まれそうだけど」

心底おかしそうに、フェンサーは俺を見て笑っている。

彼女の言うとおり、おかしいのは俺なのだろう。

互いに納得する恋愛をして結婚をするというのは本当に稀有な例。魔術師はすべからず、そういった恋愛面に限らず不自由を強いられる職業だ。

他人の思惑の上で成り立った繋がり全てに愛が無かったとは思わないが、明確に愛している相手と添い遂げた者もまた居ないはずだ。そういった諦観の念から結局はそうなるしかないというのなら、出来る限り優秀な遺伝子を持つ相手を選ぶのもまた魔術師として正しい在り方。

ただ俺自身が、そのことに吐き気を催すというだけで。

相手の心を見ない関係に挟まれて育つ子供は、果たして正常といえるだろうか。

そうやって少しずつ、自分自身の心も見えなくなってしまうのではあるまいか。

それらの蓄積が、今の魔術師の在り方を語っているのかもしれない。

逆に言えばそうして魔術師として余分な人間部分アイデンティティを、自らの内から排斥してきたとも言える。

ただ一つ確かなことは



「俺はそれ、気に入らないわ。同じような発言は二度とするなよ、フェンサー」

「……了解、マスター」

やれやれ、といった風情でフェンサーは肩を竦める。

コップを空にした俺は、部屋の奥にある金庫から購入証明書やら契約書類なんかを引っ張り出す。

そんな作業がてら、先ほどの話は打ち切ったつもりだったのに、思わず考えていたことが口を突いて出る。

「そもそも、凜が俺を好きになるはずもないだろう」

そう。魔術師云々以前に、もとよりそこが重要だ。

長年コミュニケーションを取ってきたつもりだが、凜からそれっぽい反応を返されたことはない。

俺もそれを分かっているから他の女の子と付き合ったりしていたし、その経験から手応え……というか、脈ありならそれとなく解る。

「レイジ……それ本気で言ってる？」

「本気も何も、普段接してる中での素直な意見だつて。どっかのドラマの主人公みたいに超絶鈍感なわけでもなし、俺も脈無しの相手にモーションかけるほど暇じゃあない」

（知らぬは本人たちばかりなり……重症ね、コレ。二人とも潜在的に相手のことを気にしてるのがわかってない）

彼らと会ってまだ間もないフェンサーだが、昨日から今日まで接してきた上での分析だ。

二人はお互いに相手に他人とは違う特別性を見出しているのに、無意識なものだからそれを自覚することが無い。

それは二人の言動の節々を見ていれば解ることだった。

もしも彼、彼女の内面に変化が起きるとしたら、それは何か劇的な事件でもない限り不可能だろう。

もしくはどちらかが気付いてじつくりとアプローチを掛けるか、この関係のままで年月を隔てれば気付くこともあるかもしれない。

それとも他にもう一人特別な人間が出来て、それと比較するようなことでもあれば、また価値観に変化が訪れるはずだ。

「よし、これで全部。フェンサー、新都に向かおう」

「了解……」

何故自分がこんなことを考えているのだろうと嘆息し、フェンサーは己のマスターの後に付いていった。

## 第六章 狂躁の夜を越えて（2）（後書き）

書き溜め、ネタ作り、次話の執筆作業中に、パソコンがフリーズ  
シャットダウンする事態に陥って、リアルに

「

！！？！」

と叫んだ作者です。  
バーサーカー

15分ごとにバックアップしてるので損害は2割程度でしたが、なにぶん書く量が多いので2割でも結構な復旧作業になりました。

しばらくは日常編が続くと思うので、面白おかしくしようとしてネタ放り込み過ぎた感があります。

ただ読者の方が面白ければ結果オーライです。こんなところでクオリティ落とすわけにはいかんのよ。

感想も暇な時に覗いて来ていたら随時返信するという手段で、内容を書き込めるようにしました。

UBWルートベースなので、しばらく原作の流れかもしれませんが、確実に変化は起きてきますのでお待ちください。

では、今回はこの辺で。しーゆーねくすと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2718y/>

---

Fate/stay night-the last Fencer-

2011年11月18日06時36分発行